

松木田遺跡群

第2次・第3次調査

縄文時代早期から平安時代の集落跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第578集

1998

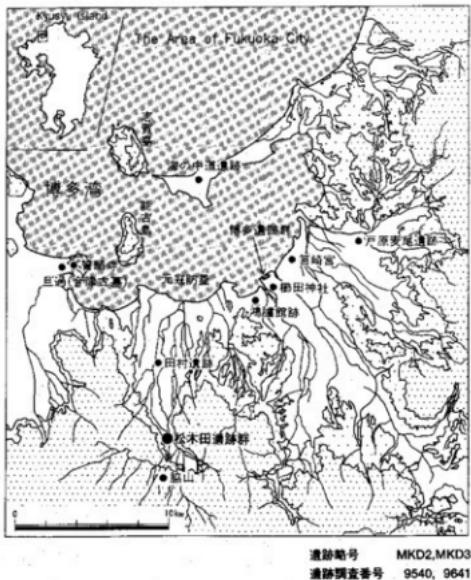
福岡市教育委員会

正誤表

ページ	行	誤	正
33	Fig. 27 住居跡平面図	SC020 SC025	SC025 SC020
43	7	N-8° -W	N-8° -E
44	4	素堀り	素掘り
46	Fig. 36	136~149のスケール	1/3
52	30	南	北
55	Fig. 44 195		
55	Fig. 44 197		
63	Fig. 50 SK103の方位		90° 時計回り
75	14	12.2mm~21.7mm	12.2mm~24.7mm
81	Fig. 57	第3次調査 SC025	第3次調査 SC021
PL. 26		1 SK102 (南から)	1 SK120 (南から)
PL. 27		1 SK105 (東から)	1 SK105 (南から)

松木田遺跡群

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第578集



遺跡番号 MKD2, MKD3
遺跡調査番号 9540, 9641

1998
福岡市教育委員会

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、数多くの遺跡が残されています。福岡市の西部に広がる早良平野は、近年開発の増加が著しく、それらが次第に失われつつあります。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく遺跡について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は早良区における県道内野次郎丸弥生線改良工事に伴い実施された松木田遺跡群第2次・第3次調査の記録を報告するものです。調査では、縄文時代から古墳時代を中心とした遺構と遺物を発見しました。この結果、これまでにつきりしていなかったこの地域の歴史、特に縄文時代早期を解明する上で大きな手がかりになるものと考えられます。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対しまして、心からの謝意を表します。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

- 1 本書は福岡市土木局道路建設第一課による一般県道内野次郎丸弥生線長峰地内道路改良工事に伴い、福岡市教育委員会が早良区早良3丁目地内において発掘調査を実施した松木田遺跡群第2次・第3次の調査報告書である。
- 2 本書で報告した各調査の細目は以下の通りである。

次数	調査番号	遺跡略号	遺跡調査原因	所在地	調査面積	調査期間
2次	9540	MKD 2	道路建設	早良区早良3丁目地内	318m ²	1995.11~12
3次	9641	MKD 3	道路建設	早良区早良3丁目地内	1045m ²	1996.10~1997.2

- 3 本書に掲載した遺構実測図の作成は調査担当者と下記の者が行った。
第3次調査 金子由利子 清原ユリ子 堀川ヒロ子 永井ゆり子 東島直美 上野道郎
- 4 本書に掲載した遺物実測図の作成は調査担当者と下記の者が行った。
第2次調査 名取さつき
- 5 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が行った。
- 6 本書に掲載した遺物写真の撮影は調査担当者と下記の者が行った。
第2次調査 平川敬治
第3次調査 平川敬治
- 7 本書に掲載した挿図の製図は調査担当者と下記の者が行った。
第2次調査 安野 良 副田則子 山崎賀代子
第3次調査 蜂須賀博子 大庭友子 名取さつき 池田美紀
- 8 第3次調査下層出土の石器については小畑弘己氏（熊本大学）の御教示を得た。
- 9 本書で用いた方位は磁北で、真北より6° 21' 西偏する。
- 10 遺構の呼称は竪穴住居跡をS C、掘立柱建物をS E、井戸をS K、土坑をS K、溝をS D、ピットをS P、その他をS Xと略号化した。
- 11 遺構・遺物番号は各調査次ごとに通し番号とした。なお、挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
- 12 本書に関する記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 13 本書の執筆は第2次調査を中村、第3次調査は、IV-(2)、(4) 及びV-(1) を米倉、他は星野が行った。
- 14 本書の編集は米倉・中村の協力を得て、星野が行った。

本文目次

Iはじめに	1
II位置と環境	2
III第2次調査	5
(1)調査の概要	5
(2)遺構と遺物	5
1 竪穴住居跡	5
2 土坑	12
3 その他の出土遺物	13
(3)小結	15
IV第3次調査	16
(1)調査の経過	16
(2)層序	16
(3)上層の記録	19
1 調査の概要	19
2 遺構と遺物	19
①竪穴住居跡	19
②掘立柱建物	42
③井戸	44
④土坑	44
⑤溝	53
⑥包含層	53
⑦ピット出土遺物	57
(4)下層の概要	58
1 下層調査の経緯	58
2 遺物の出土状況	59
3 検出遺構	59
①石組炉	60
②集石遺構	60
③土坑	60
4 出土遺物	65
(5)小結	72
Vまとめ	74
(1)縄文時代早期の遺構と遺物について	74
(2)弥生時代中期の住居跡について	76
(3)古墳時代前期の住居跡について	79

挿 図 目 次

Fig. 1	松木田遺跡群の位置と早良平野の主要遺跡	3
Fig. 2	松木田遺跡群周辺古図（明治年間）	4
Fig. 3	松木田遺跡群位置図	4
Fig. 4	第2次調査遺構配置図	5
Fig. 5	S C001	6
Fig. 6	S C001出土遺物	7
Fig. 7	S C002及び出土遺物	8
Fig. 8	S C004	9
Fig. 9	S C004出土遺物 1	10
Fig. 10	S C004出土遺物 2	11
Fig. 11	S C004出土遺物 3	12
Fig. 12	S C003・S C005及びS C005出土遺物	13
Fig. 13	S K012・013・014	14
Fig. 14	その他の出土遺物	15
Fig. 15	第3次調査土層断面図	17
Fig. 16	松木田遺跡群周辺地質図	18
Fig. 17	第3次調査上面主要遺構図	19
Fig. 18	S C002と出土遺物	21
Fig. 19	S C003と出土遺物	22
Fig. 20	S C004・005と出土遺物	23
Fig. 21	S C010と出土遺物	25
Fig. 22	S C015	27
Fig. 23	S C015建替え後と前	28
Fig. 24	S C015出土遺物 1	29
Fig. 25	S C015出土遺物 2	30
Fig. 26	S C015出土遺物 3	31
Fig. 27	S C017・020・025と出土遺物	33
Fig. 28	S C021と出土遺物	34
Fig. 29	S C027・028・029及び027出土遺物 1	36
Fig. 30	S C027・028出土遺物	37
Fig. 31	S C030と出土遺物	39
Fig. 32	S C031と出土遺物	40
Fig. 33	S C036と出土遺物	41
Fig. 34	S B022・023・024と出土遺物	43
Fig. 35	S E007・016	45
Fig. 36	S E007・016出土遺物	46
Fig. 37	S K006・008・009・011・013・014・018・026	47
Fig. 38	S K012と出土遺物	48

Fig.39	S K019	49
Fig.40	S K019出土遺物	50
Fig.41	S K032・033・035	51
Fig.42	S K009・018・032・035出土遺物	52
Fig.43	弥生時代包含層出土遺物 1	54
Fig.44	弥生時代包含層出土遺物 2	55
Fig.45	古代包含層出土遺物	56
Fig.46	ピット出土遺物	57
Fig.47	下層撲絃文土器出土状況	58
Fig.48	下層遺構配置図	59
Fig.49	下層の石組炉と集石遺構	61
Fig.50	下層の土坑 1	63
Fig.51	下層の土坑 2	64
Fig.52	出土縄文土器 1	66
Fig.53	出土縄文土器 2	68
Fig.54	出土石鎌	70
Fig.55	出土石器	71
Fig.56	早良平野の弥生時代大型住居跡	78
Fig.57	松木田遺跡の古墳時代の竪穴住居跡	81
Fig.58	岩本遺跡・有田遺跡の古墳時代前期の住居跡	82

図 版 目 次

PL. 1	1 松木田遺跡群遠景	2 雪の松木田
PL. 2	1 第2次調査全景	2 住居跡群
PL. 3	1 S C001	2 S C002
PL. 4	1 S C003	2 S C004
PL. 5	1 S K012	2 S K013
PL. 6	第2次調査遺物写真 1	
PL. 7	第2次調査遺物写真 2	
PL. 8	1 第3次調査上面1区全景（南から）	2 第3次調査上面2区全景（南から）
PL. 9	1 S C002（西から）	2 S C003（東から）
PL.10	1 S C004（南から）	2 同 竈（東から）
PL.11	1 S C005（東から）	2 S C010（南から）
PL.12	1 S C015（東から）	2 同 贼床撤去後（北から）
PL.13	1 S C015の土層断面	2 同中央土坑（北から）
PL.14	1 S C017（西から）	2 同遺物出土状況
PL.15	1 S C020（西から）	2 S C021（北から）
PL.16	1 S C025（北西から）	2 S C027・028・029・030（東から）
PL.17	1・2・3・4 S C027遺物出土状況	5 S C030（東から）

PL.18	1	S C030中央土坑（東から）	2	同遺物出土状況	3	S C031（東から）
PL.19	1	S B022（南から）	2	S B023（南から）	3	S B024（南から）
PL.20	1	S E007（南から）	2	S E016（西から）	3	S K006（南から）
	4	S K008・009（南から）	5	S K014（南西から）	6	S K018（西から）
PL.21	1	S K012（南から）	2	同遺物出土状況	3	同遺物出土状況
PL.22	1	S K019（北から）			2	同遺物出土状況
PL.23	1	S K032（北から）	2	S K033（東から）	3	S K035（西から）
	4	同遺物出土状況	5	S P197遺物出土状況	6	上面北端全景（南から）
PL.24	1	石組炉周辺の状況（北から）			2	集石遺構周辺の状況（南から）
PL.25	1	S X101（南から）			2	同底石（南から）
	3	S X109（南西から）			4	同底石（西から）
PL.26	1	S K102（南から）			2	S X108（南から）
PL.27	1	S K105（東から）	2	S K106（南から）	3	S K111（南から）
	4	S K110（南から）	5	S K118（西から）		
PL.28	1	下層遺物出土状況			2	同遺物出土状況
	3	同遺物出土状況			4	同遺物出土状況
PL.29	1	調査区北端東壁土層（西から）			2	調査区南端西壁土層（東から）
PL.30	第3次調査遺物写真1					
PL.31	第3次調査遺物写真2					
PL.32	第3次調査遺物写真3					
PL.33	第3次調査遺物写真4					
PL.34	第3次調査遺物写真5					
PL.35	第3次調査遺物写真6					
PL.36	第3次調査遺物写真7					
PL.37	第3次調査遺物写真8					
PL.38	第3次調査遺物写真9					
PL.39	第3次調査遺物写真10					

表 目 次

表1 第3次調査上面遺構一覧	20
表2 下層出土石器属性表	69

付 図 目 次

付図1 松木田遺跡群 第2次・第3次調査地点位置図	
付図2 松木田遺跡群 第3次調査上面遺構全体図	

I はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市早良区早良3丁目における道路改良のための埋蔵文化財事前審査願が福岡市土木局道路建設第1課から同市教育委員会埋蔵文化財課に1995年9月18日に提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、申請地が松木田遺跡群の範囲内であり、隣接する西側で第1次調査がおこなわれていることから試掘調査を実施した。1995年10月24日、1996年1月18日・3月6日・3月26日に事業対象地10040m²に13本のトレンチを設定した。その結果、全域が河川の氾濫原と推察され、その高まりに堅穴住居跡、土坑、ピットが確認された。その成果をもとに協議を重ねたが、現状での保存、設計変更は不可能との結論になり、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。第2次調査は1995年11月9日から12月13日まで、第3次調査は1996年10月1日から1997年2月15日まで行った。

2 調査の組織

調査委託：福岡市土木局道路建設第1課

調査主体：福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

同課第1係長 横山邦継（前任） 二宮忠司

調査庶務：内野保基

事前審査：浜石哲也（前任） 杉山富雄 櫻本義嗣

調査担当：第2次調査 中村啓太郎 白井克也

第3次調査 米倉秀紀 星野恵美

調査作業：第2次調査 青木秀雄 鬼塚友子 金子ヨシ子 平野ミサオ 伊藤ミドリ 牛尾秋子
岳美保子 山西人美 結城千賀子 結城信子 鋸山千鶴子

第3次調査 金子由利子 清原ユリ子 佐藤テル子 柴田タツ子 柴田常人

永井ゆり子 西尾タツヨ 堀川ヒロ子 松井フユ子 門司弘子

大穂栄子 大穂アサ子 保野志津代 永末京子 東島直美 上野道郎

長谷川律子 坂口和子 折口怜子 池健助 井本久美子 小宮玄子

吉鹿裕隆

整理作業：第2次調査 池田礼子 有吉千栄子 柴藤理恵

第3次調査 永友和子 衛藤琴美 蜂須賀博子 竹田弘子 柴田加津子 萩本恵子

調査協力：比佐陽一郎（埋蔵文化財センター）

II 位置と環境

遺跡の位置する早良平野は福岡市の南西部に当たり、東側を油山山塊、西側を飯盛一長垂山山塊、南側を背振山脈で区切られている。平野の中央には背振山脈に源を発する室見川が北流し、博多湾に注いでいる。平野内には幾つかの洪積台地も点在するが、その大部分は室見川を中心とした河川の沖積作用によって形成されている。

今回報告する松木田遺跡群は早良平野の南部にあり、東の油山山塊と西の飯盛一長垂山山塊が最も迫った狭隘地に位置する。遺跡の東側を南から流れてきた室見川が砂礫台地に突き当たり、大きく流れを西側に変えている。遺跡の大部分は、沖積扇状平野と一部西の飯盛一長垂山山塊から延びてきた砂礫台地（低位段丘）に占地していることが、地形図（Fig.16）から読みとれる。しかし、現況は開墾され水田となっており、この砂礫台地は現状からは伺えない。開墾される以前の明治年間の古図（Fig.2）は台地の端端が西側から延び、遺跡の一部が砂礫台地に位置している状況を示している。地形図（Fig.16）・古図（Fig.2）・発掘調査から第2次・第3次調査地点が沖積扇状平野と台地に立地していることが確認された。第3次調査で発見された縄文時代早期の遺構はこの砂礫台地に位置している。土層図（Fig.15）でみられるように、縄文時代の遺構のない北と南は急激に谷や旧河川となって落ちている。この谷を埋めるように西側から流れてきた土石流（黄色砂礫土層）の堆積がみられる。その後、弥生時代の遺構が形成されている。

松木田遺跡群では、今回報告分も含めて3次にわたる発掘調査が行われた（Fig.3）。第1次調査は昭和54年1月の道路改良工事に伴う立会調査である。弥生土器・須恵器等が出土し、古代集落跡の存在をうかがわせるものであった。

当遺跡に関連する周辺の遺跡をみると、縄文時代では谷口遺跡で押型文土器が出土し、峰遺跡で少量ではあるが押型文土器、石鐵等の遺物が出土している。大坪遺跡では押型文土器・曾畠式土器が出土している。脇山A遺跡で晩期の遺物が出土している。北側の重留遺跡では晩期の竪穴住居跡、墓地等から構成される集落が確認されている。弥生時代では前期の段階から室見川東岸の東入部遺跡・重留遺跡・岩本遺跡・四箇船石遺跡で竪穴住居跡、墓地が確認されている。中期においても集落の継続が認められ、東入部遺跡・重留遺跡では掘立柱建物の出現をみることができる。東入部遺跡第2次調査においては青銅器・鉄器等の副葬品を有する木棺墓・甕棺墓が検出されている。室見川西岸の野方久保遺跡・羽根戸遺跡・吉武遺跡でも前期から多くの竪穴住居跡、墓地等をもつ大集落が確認されている。さらに南の河岸段丘上の都地遺跡・金武遺跡・丘陵の先端部分の浦江谷遺跡・黒塔遺跡・長峰遺跡では甕棺墓群が営まれている。長峰遺跡は甕棺墓群の南限である。長峰遺跡は当遺跡と同じ丘陵に営まれており、甕棺墓群は当遺跡の集落に付随する可能性が高いと考えられる。当遺跡のすぐ北側では岸田遺跡・下兵庫遺跡が知られるが、調査が進んでおらず、はっきりとした遺跡の広がりは不明である。中期後半から後期初頭にかけては集落規模が縮小し、住居の分布も偏在する。南側では脇山A遺跡2次調査において前期の遺物が、谷口遺跡で後期後半の遺物が出土した程度である。古墳時代に入ると前代を踏襲し、各遺跡内で集落が形成される。古代では東入部遺跡・吉武遺跡において官術的色彩の強い大型建物群が製鉄関連遺構とともに確認されている。南側では峰遺跡で掘立柱建物が、内野遺跡で製鉄遺構が検出されている。

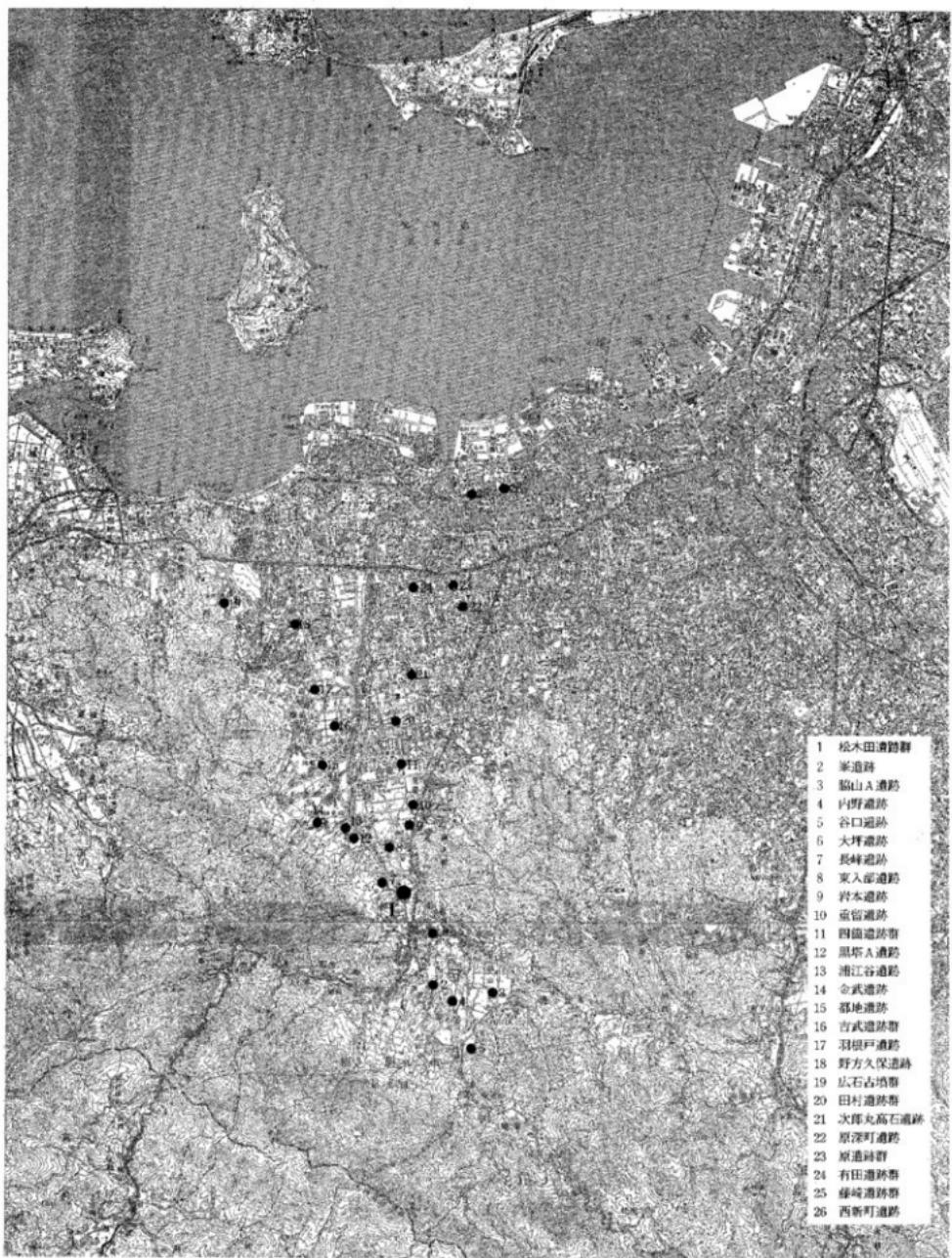


Fig.1 松木田遺跡群の位置と早良平野の主要遺跡 (1/100,000)

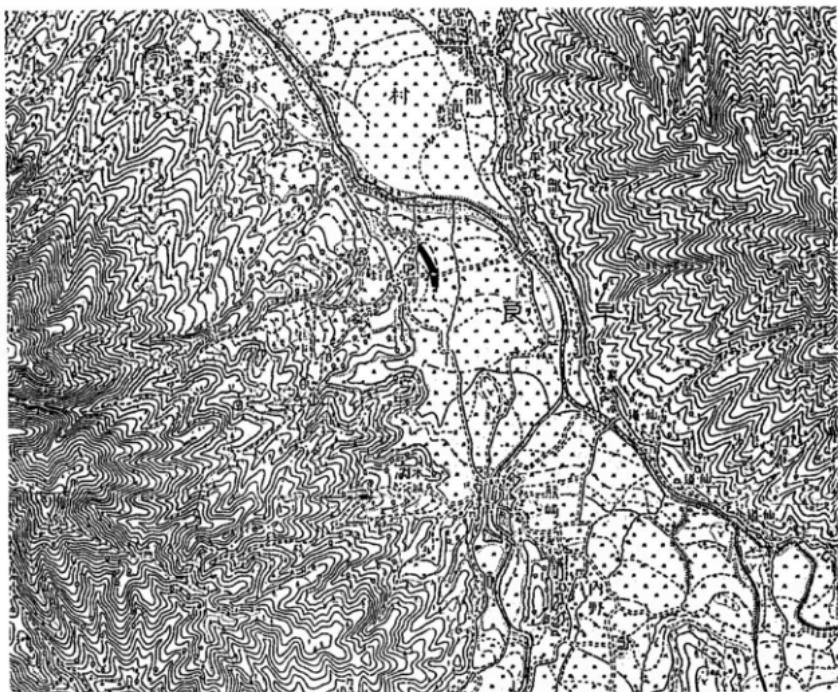


Fig.2 松木田遺跡群周辺古図（明治年間）

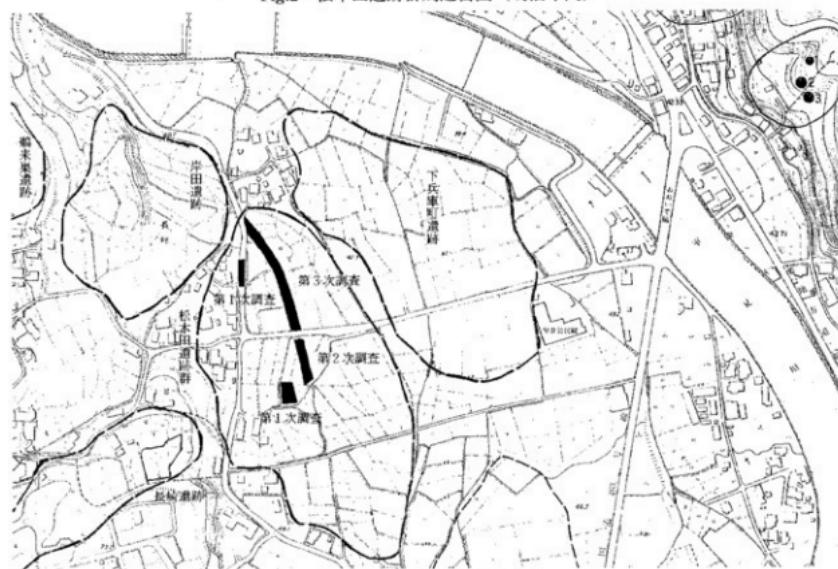


Fig.3 松木田遺跡群位置図

III 第2次調査

(1) 調査の概要

第2次調査区は遺跡群のほぼ中央に位置し、遺構面の標高は約44mである。基本層序は地表面より40~50cmの表土、耕作土、10~20cmの暗褐色土（包含層）、黄褐色砂質土（遺構面）、砂疊層となる。検出した遺構は弥生時代~古代の竪穴住居跡5軒、土坑、柱穴群、旧河川等である。柱穴は多数検出したが、調査面積が少なかったせいか建物としてまとまらなかつた。遺物は縄文時代の石器、弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器類、鉄滓等が出土している。調査面積は318m²である。調査区南部は旧河川により削平されており、これより以南は遺構は存在しないと判断した。調査は遺構面までを重機により掘削、遺構面の精査、遺構の掘削は人力によつた。その後下層確認のため、トレッセを南北に設定して人力掘削したが、疊層にあつたため以下に遺構面は存在しないものと判断し調査を終了した。

(2) 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

本調査区内で5軒検出した。

S C001 (Fig. 5, P L.3-1)

調査区北端に位置する長方形の焼失住居である。南北5.47m、東西3.95m、深さ14cmを測る。北壁部は削平が激しく、ほとんど残らない。南壁に沿つてし字状のベッド状遺構が付設される。主柱穴、炉等は不明瞭で検出することができなかつた。また床面では炭化材、炭が所々にみられるが、あまり焼けていない。

出土遺物 (Fig.6, P L.6)

1~3は土師器の甕である。1は口径が19.2cm、器高が31.0cmを測る。球形の胴部にやや内湾する口縁部を有す。調整は外面の胴部上位が横方向のハケメ、以下が縱方向のハケメを施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。底部には指頭による押圧痕が残る。2は口径19.6cm、器高30cm程度を測る。球形の胴部にやや内湾する口縁部を有す。調整は外面が胴部上位が横方向のハケメ、以下が縦

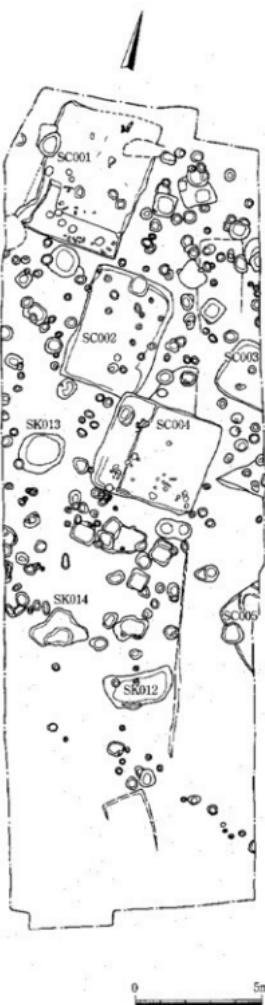


Fig.4 第2次調査遺構配置図

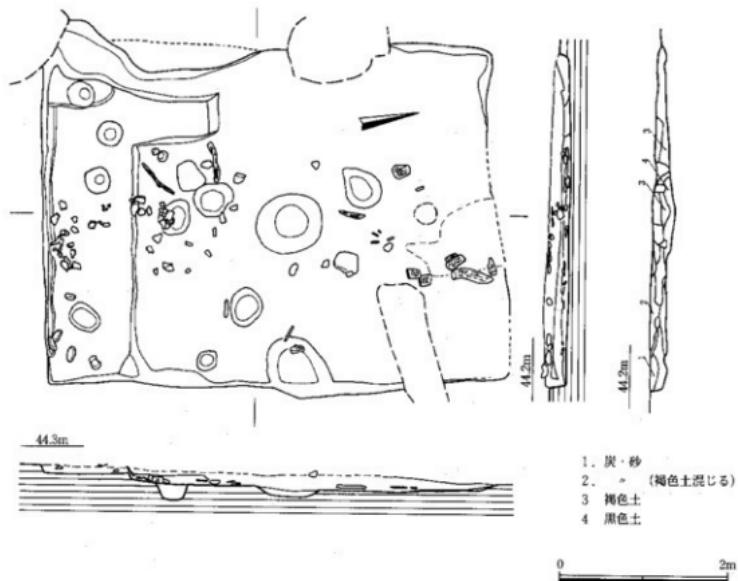


Fig.5 SC001

方向のハケメを施す。また肩部には櫛状工具で列点文を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。底部には指頭による押圧痕が残る。3は口径16.0cm、器高24.7cmを測る。卵球形の胴部にやや外反する口縁部を有す。調整は外面上位が縦方向のハケメ、下方がヘラケズリを施す。また肩部にはヘラ状工具による沈線がみられる。内面は口縁部、胴部とも横方向のハケメを施す。底部には指頭による押圧痕が残る。4・5は鉢である。4は口径13.6cm、器高5.1cmを測る。平らな底部で、器壁は厚手である。調整は外表面がナデ、内面がハケメを施す。5は口径8.3cm、器高4.1cmを測る。半球形の体部を有す。調整は外表面がナデ、内面が指頭による押圧を施す。

S C002 (Fig.7, P L.3-2)

S C001の南に位置する長方形の住居である。S C004に切られる。南北4.73m、東西3.29m、深さ24cmを測る。主柱穴、炉等は不明瞭で検出することができなかった。

出土遺物 (Fig.7, P L.6)

6は広口壺の口縁部である。口径24.0cmを測る。調整は内外面ともナデ後丹塗を施す。7～9は平底の底部である。7は底径9.2cmを測る。調整は外表面がハケ、内面がナデを施す。8は底径9.0cmを測る。調整は外表面がハケ、内面がナデを施す。9は底径9.0cmを測る。調整は外表面がハケ、内面がナデを施す。

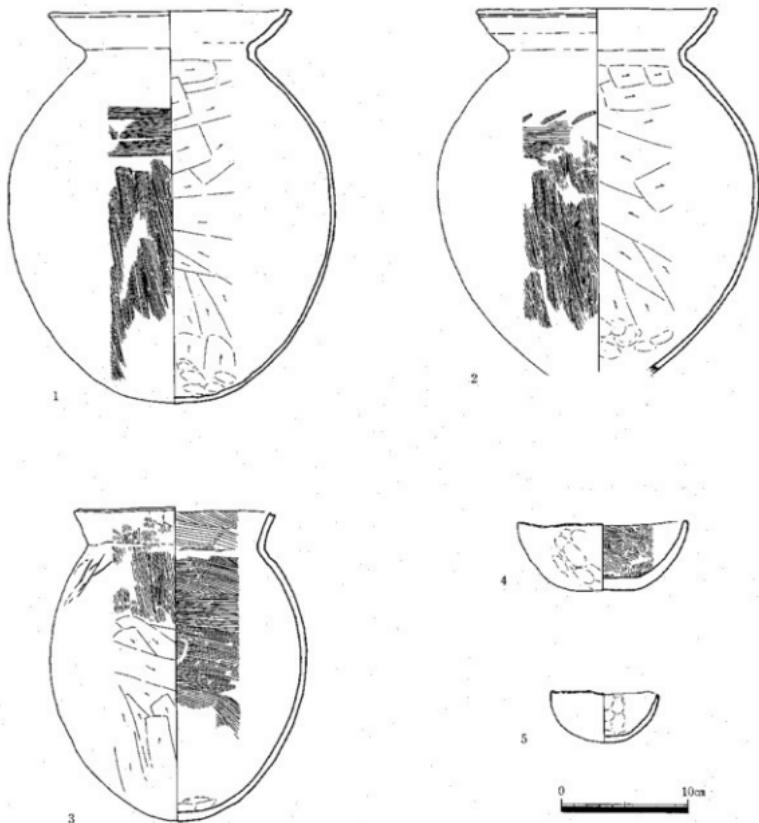


Fig.6 SC001出土遺物

SC003 (Fig.12、P L.4-1)

S C002の東、調査区東壁にかかって位置する方形の住居である。南北2.41m、深さ30cmを測る。出土遺物は土師器、須恵器、鉄滓等である。

S C004 (Fig.8、P L.4-2)

S C002を切って、南に位置する方形の焼失住居である。南北3.85m、東西4.24m、深さ23cmを測る。西壁に沿ってL字状のベッド状遺構が付設される。主柱穴、炉等は不明瞭で検出することができなかった。また埋土中には炭化材、炭が所々にみられるが、壁、床等はあまり焼けていない。

出土遺物 (Fig.9~11、P L.6-7)

10~21は土師器の甕である。10は口径16.2cmを測る。球形の胴部にやや内湾する口縁部を有す。調整は外面が胴部上位が横方向のハケメ、以下が縦方向のハケメを施す。肩部に波状の沈線を施す。口

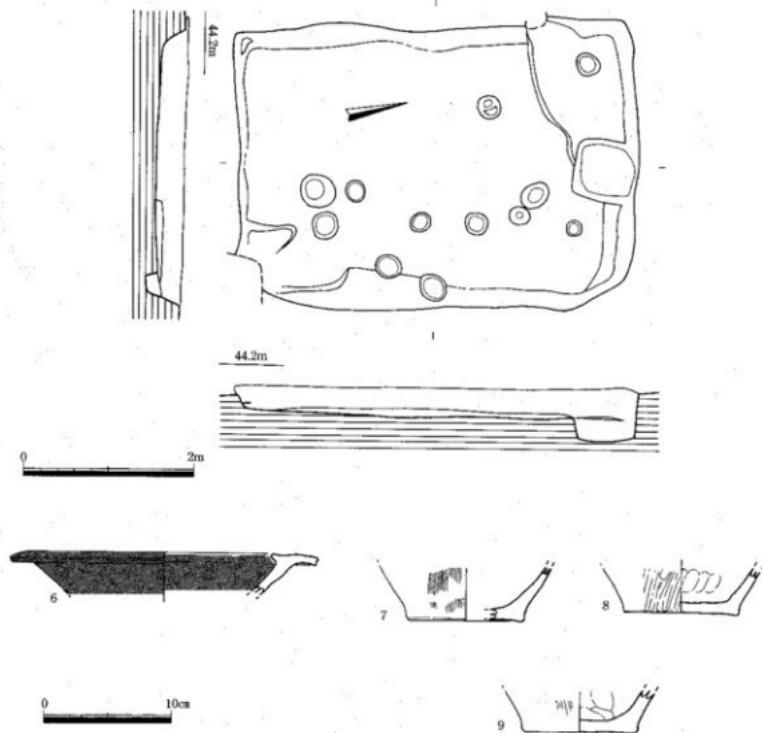


Fig.7 SC002及び同出土遺物

縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。11は口径15.6cmを測る。球形の胴部にやや内湾する口縁部を有す。調整は外面の胴部上位が横方向のハケメを施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。底部には指頭による押圧痕が残る。12は口径15.4cm、器高23cm程度を測る。球形の胴部にやや内湾する口縁部を有す。調整は外面の胴部上位が縦、横方向のハケメ、以下が縦方向のハケメを施す。肩部に1条の沈線を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。13は口径15.8cmを測る。やなで肩の胴部にやや内湾する口縁部を有す。調整は外面の胴部上位がナデ、中位が横方向のハケメ、以下が縦方向のハケメを施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。14は口径17.6cm、器高23.3cmを測る。球形の胴部に僅かに内湾する口縁部を有す。調整は外面の胴部上位がナデ、中位が横方向のハケメ、以下が縦方向のハケメを施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。底部には指頭による押圧痕が残る。15は口径17.5cm、器高23.3cmを測る。球形のやや歪んだ胴部に僅かに内湾する口縁部を有す。調整は外面の胴部上位がナデ、中位が横方向のハケメ、以下が縦方向のハケメを施す。肩部に1条の沈線を施す。

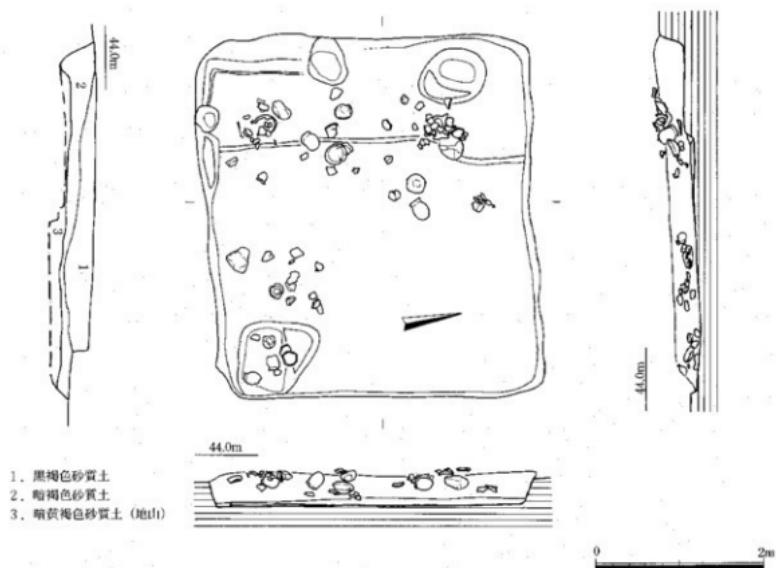
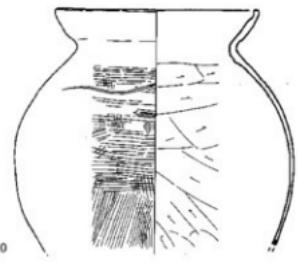
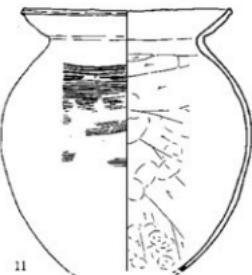


Fig.8 SC004

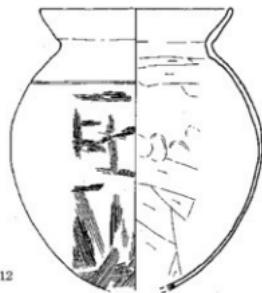
口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。底部には指頭による押圧痕が残る。16は復元口径20.6cmを測る。ナデ肩の肩部にやや内湾する口縁部を有す。17は口径14.5cm、器高17.5cmを測る。球形の胴部に僅かに内湾する口縁部を有す。調整は外面が横方向のハケメを施す。肩部に1条の沈線、彌状工具で列点文を施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。底部には指頭による押圧痕が残る。18は口径16.5cm、器高24cm程度を測る。球形の胴部に直線的に外傾する口縁部を有す。調整は外面が斜め方向のハケメを施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。底部には指頭による押圧痕が残る。19は口径17.6cm、器高27cm程度を測る。卵球形の胴部に直線的に外傾する口縁部を有す。調整は外面が斜め方向のハケメを施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。20は口径16.8cm、器高24.0cmを測る。球形の胴部に直線的に外傾する口縁部を有す。調整は外面が斜め方向のハケメを施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。底部には指頭による押圧痕が残る。21は口径13.4cm、器高16.8cmを測る。球形の胴部にやや外反する口縁部を有す。調整は外面が斜め方向のハケメを施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。22~25は壺である。22は口径15.8cm、器高33.6cmを測る。卵球形の胴部に外傾する口縁部を有す。調整は外面の胴部上位が斜め方向のハケメ、下方が縱方向のハケメを施す。口縁部は内外面とも横ナデ一部ハケメが残る。胴部内面はヘラケズリを施す。23は復



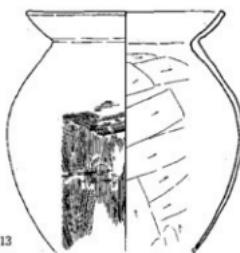
10



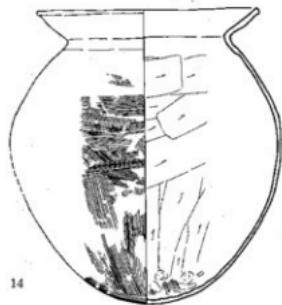
11



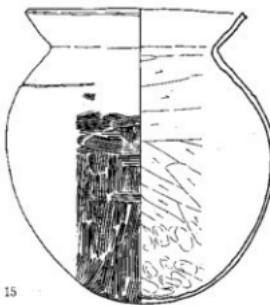
12



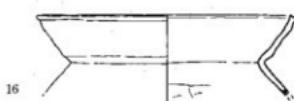
13



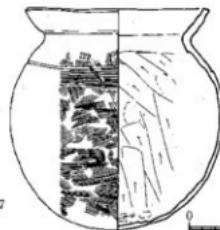
14



15

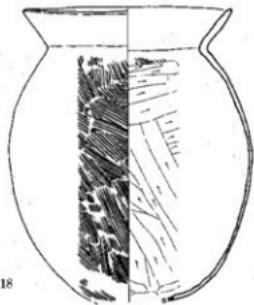


16

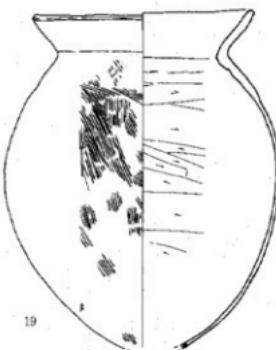


17

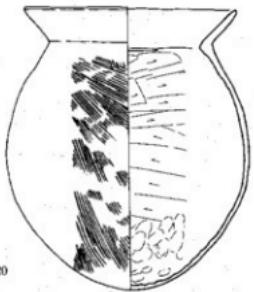
Fig.9 SC004出土遺物 1



18



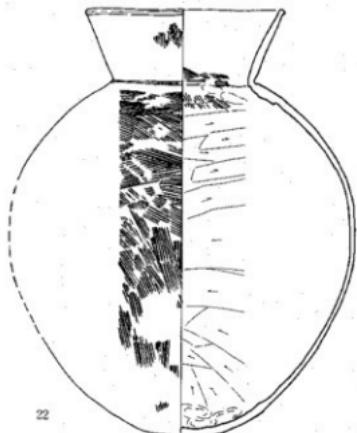
19



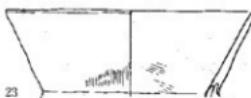
20



21



22



23

0 10cm

Fig.10 SC004出土遺物2

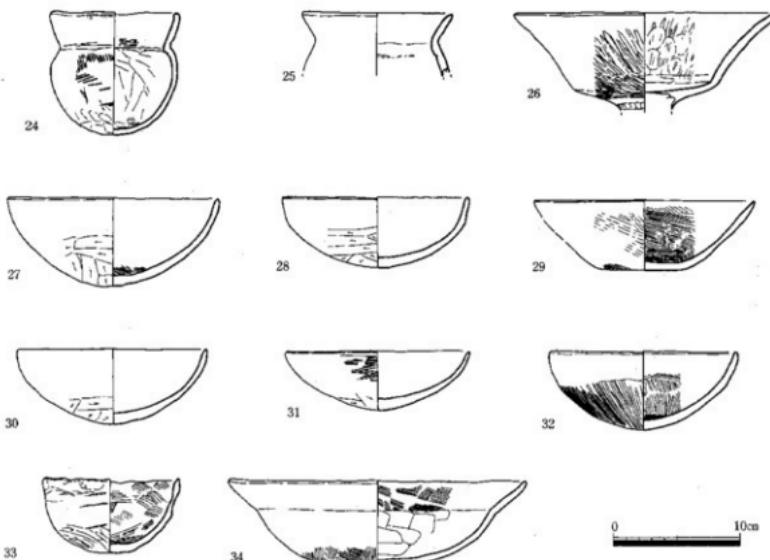


Fig.11 SC004出土遺物 3

元口径20.0cmを測る。24は口径10.2cm、器高9.6cmを測る。球形の胴部にやや内湾する口縁部を有す。25は復元口径12.0cmを測る。26は高環である。口径20.8cmを測る。27~34は鉢である。27は口径15.7cm、器高7.0cmを測る。28は口径14.9cm、器高5.5cmを測る。29は口径17.3cm、器高5.5cmを測る。30は口径15.0cm、器高4.9cmを測る。31は口径14.5cm、器高4.8cmを測る。32は口径14.9cm、器高6.2cmを測る。33は口径10.9cm、器高4.8cmを測る。34は口径23.5cm、器高6.8cmを測る。

S C005 (Fig.12)

S C004の南東、調査区東壁にかかって位置する方形の住居である。規模は不明。西壁にカマドを付設する。遺物は土師器の甕が出土している。

出土遺物 (Fig.12)

35は口径18.0cmを測る。ナデ肩の胴部に短く外反する口縁部を有す。調整は外面が縦方向のハケメを施す。口縁部は内外面とも横ナデ。胴部内面はヘラケズリを施す。

2 土坑

S K012 (Fig.13, P L 5-1)

調査区中央に位置する不整形の土坑である。長さ219cm、幅132cm、深さ37cmを測る。

S K013 (Fig.13, P L 5-2)

調査区南に位置する椭円形の土坑である。長さ191cm、幅142cm、深さ72cmを測る。

S K014 (Fig.13)

調査区南に位置する不整形の土坑である。長さ229cm、幅144cm、深さ26cmを測る。

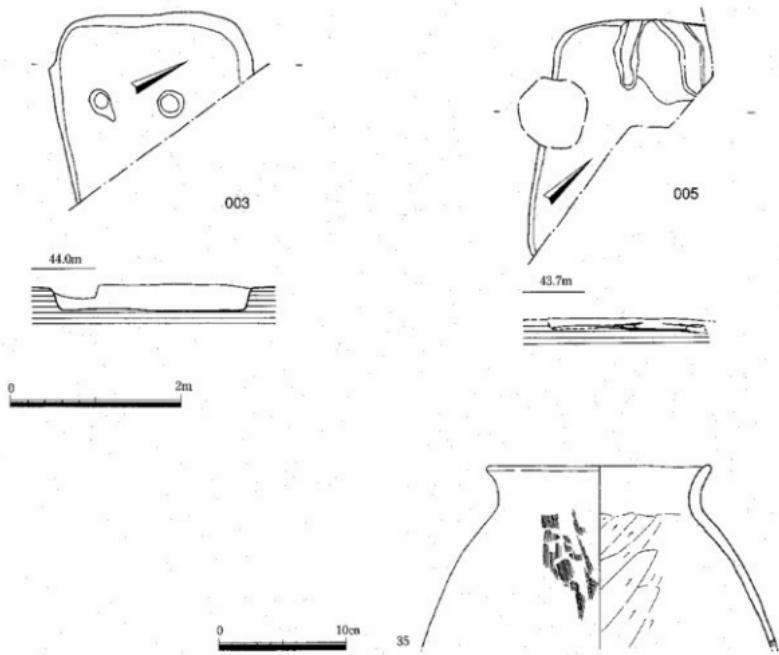


Fig.12 SC003・SC005及びSC05出土遺物

3 その他の出土遺物 (Fig.14)

36はS P 1 ?出土（注記剥離のため不明）。弥生時代の壺である。復元口径25.8cmを測る。肥厚した「L」字状の口縁を有す。調整は2次焼成を受けて器面が剥離しており不明。37はS P 102出土。復元口径30.6cmを測る。調整は内外面ともにナデを施す。38・39はS P 72出土。復元口径31.5cmを測る。ややだれた口縁部を成す。調整は内外面ともにナデを施す。39は底部で調整は内外面ともにナデを施す。40は広口壺の口縁部で復元口径36.4cmを測る。外反した頸部に凸帯を1条巡らせ、ややだれた口縁部を有す。調整は内外面ともにナデ後、丹塗を施す。41はS P 40出土。土師器の壺で復元口径12.6cmを測る。緩く外反する口縁を有す。調整は内外面ともに荒いハケメを施す。42はS P 102出土。須恵器の壺である。復元口径12.0cm、器高3.0cmを測る。調整は底部がヘラケズリ、他は内外面ともにヨコナデを施す。43はS P 9・10出土。高台部で、高台径8.0cmを測る。44はS P 120出土。土師器の壺である。復元高台径6.4cmを測る。調整は内外面ともにナデを施す。45はS P 33出土。黒色土器である。復元口径16.0cmを測る。口縁端部はわずかに外反する。調整は内外面ともにヘラミガキを施す。46はS P 43出土。土師器の把手である。

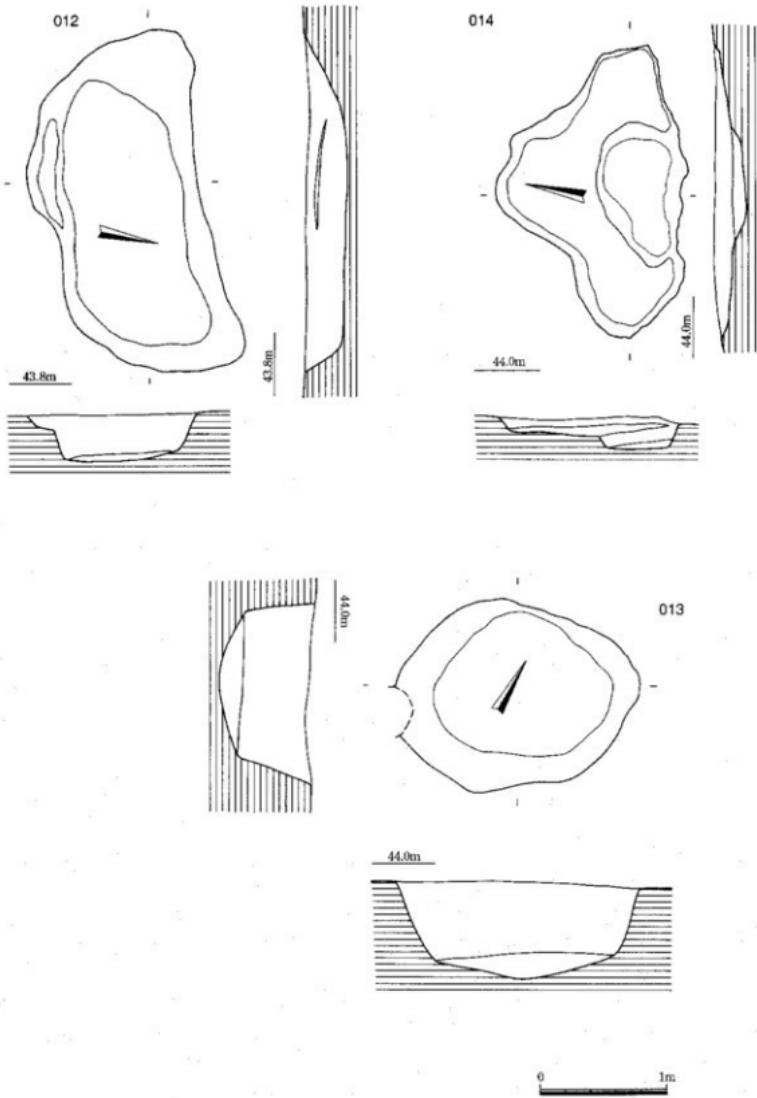


Fig.13 SK012-013-014

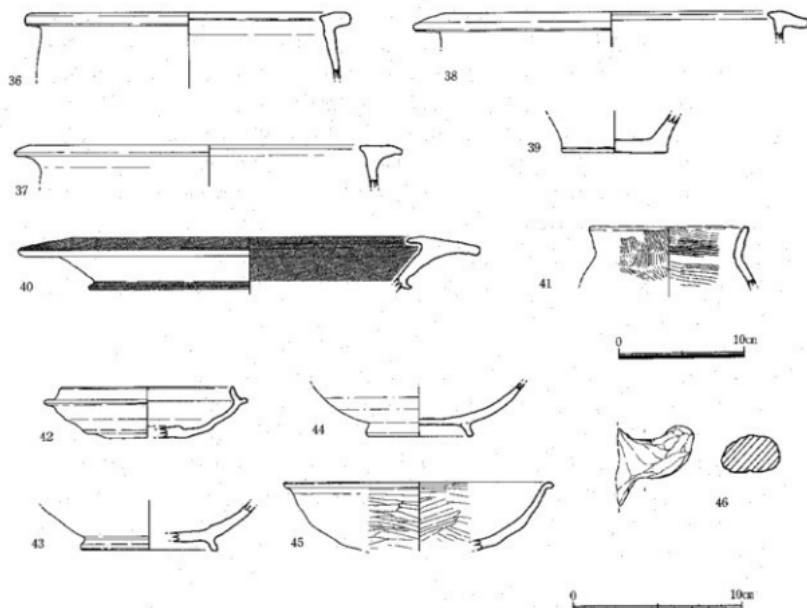


Fig.14 その他の出土遺物

(3) 小結

今回の調査では、当遺跡群が弥生時代から古代前半にかけての集落であることが確認できた。SC 001、SC 004は焼失家屋の可能性が高く、出土遺物とともに良好な資料である。また建物としてまとまらなかったが、柱穴には古代後半から中世にかけて属するものがあり、その時期まで遺跡が継続する。また掘方が方形を呈するものがあり、古代においてまとまった建物になる可能性が高い。本調査によって今までほとんど分かっていなかった松木田遺跡群の性格の一部を明らかにすることは大きな成果である。しかし調査の概要で述べたように出土遺物から下層の存在は予測できたが、下層確認を徹底しなかったために縄文時代の構造については確認できなかった。

IV 第3次調査

(1) 調査の経過

第3次調査は平成8年10月1日に、機械での表土剥ぎ作業を開始した。調査は土置き場の関係で、2区に分けて行った。調査当初は、試掘と第2次調査の結果から、竪穴住居跡10軒以内と土坑群を予測していたが、調査区南半の1区だけでそれを越える遺構群を検出した。さらに1区の調査終了間際にになって、竪穴住居跡を検出した面の下1.5mで縄文時代早期の包含層を検出した。縄文時代の調査は5区に分けて調査を行い、一部上層2区の調査と並行して行った。結局上層だけで、竪穴住居跡15軒をはじめとする多くの遺構群を検出し、下層からは4000点を越える遺物が出土した。

このような状況のため、調査は当初、平成8年12月に終了する予定であったが、平成9年2月15日で終了した。なお、上層の遺構と遺物については、本書で報告しているが、下層については、十分な整理ができていないため、大変遺憾ではあるが、概要のみの報告とせざるを得ない。現時点では次年度以降の本報告のめどはないが、いずれ何らかのかたちで本報告を行いたい。

(2) 層序

調査区は西から東に伸びる舌状を呈する沖積微高地上に立地しており、現況は田である。従って、全体の現況は小棚田状を呈している。調査区内には高さの異なる田が営まれていたため、調査区の西壁と東壁で高さが1m近く異なっている。ここでは高さの高い西壁の土層断面で説明する。

上層文化層は表土及び耕作土の下にあり、全体を通してほぼ同じであるが、上層文化層から下層文化層の間は、沖積地のため場所による変異が激しい。ここでは、出土遺物が多く、層的にも安定している縄文1区で基本層序を見る。

第1層 灰色粘質土 耕作土 厚さ20~30cm

第2層 黄褐色土 床土 厚さ20~30cm

シルト質のものから粘質のものに漸移的に変わり、2aから2cに分けられる。

第3層 黒褐色シルト 厚さ15cm

古代の包含層。この層を下げている途中で古墳時代の竪穴住居のラインを確認しており、この層はさらに2つに分離できるものと考えられる。

第4層 黄色砂疊 厚さ60~80cm

砂と疊の混合層。上部に疊が多く、下部は砂粒が細かくなる。部分的に黒褐色粘土、灰色粘土を混える。上面も下面もかなり凹凸が激しい。調査区北端部ではこの層が北へ向かって落ち、その上に弥生時代中期初頭の包含層(暗黄色粘質土)が形成されている。第4層は上層の遺構面であるが、調査区中央付近のみ、この層ではなく疊混じりの黄色シルト層が遺構面となっている。

第5層 黄灰色シルト 厚さ5~40cm

場所により、暗褐色や明褐色を呈するところもある。この層の上面から掘り込まれた穴がいくつか認められたが、不整形で、遺物もなく、自然によって形成された穴と考えた。

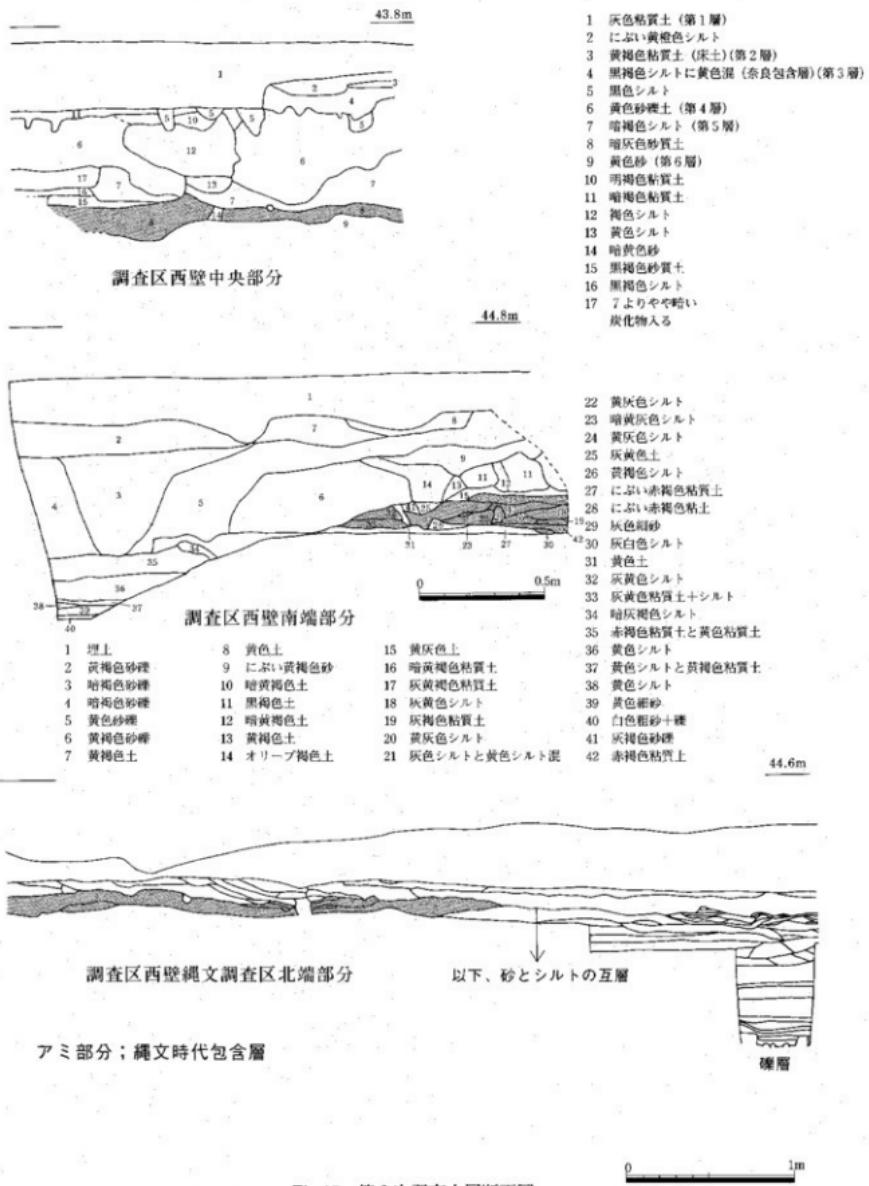


Fig.15 第3次調査土層断面図

第6層 黒褐色シルト 中心部厚さ20~30cm

縄文包含層。もっとも安定した部分は黒く、その周囲は灰褐色~暗褐色を呈する。包含層は周辺部になると、厚さが30~40cmと厚くなるが、粘質土とシルトの薄い互層に細分され、最後はその層もなくなり、無遺物層になる。

第7層 黄白色砂

包含層中心部の包含層下にある無遺物層。縄文期の遺構はこの面で検出した。60cm近く掘り下げたが、変化はない。包含層の周辺部では状況が異なり、包含層北端部では、包含層が消滅するあたりからこの層も消え、シルト質の層になる。南端部ではシルトまたは粘質土になり、調査区東南隅では、その層も自然と南へ向かって落ち、礫層がその上にのっている。

縄文層の下の大部分には黄白色砂が見られ、もっとも厚いところは60cm以上の厚さを持っていること、黄白色砂は縄文層のない部分には存在しないこと、黄白色砂の存在する部分の高さはその周囲よりやや高いことから、下層遺構が造られた時は、微高地であったと思われる。またその周囲はシルトと粘質土の互層になっており、水性の層と考えられる。包含層形成後にはシルト質の層が形成され、さらに厚い砂礫層があることから上層の遺構が造られる前に土石流があったと推察される。その時期は、上層遺構の上限が弥生時代前期であることからそれ以前である。縄文中期の土器と押型文土器が1点づつ上層の遺構から出土しており、あるいは押型文土器以前に礫層が形成された可能性もあるが、1点のみの出土では何ともいえない。

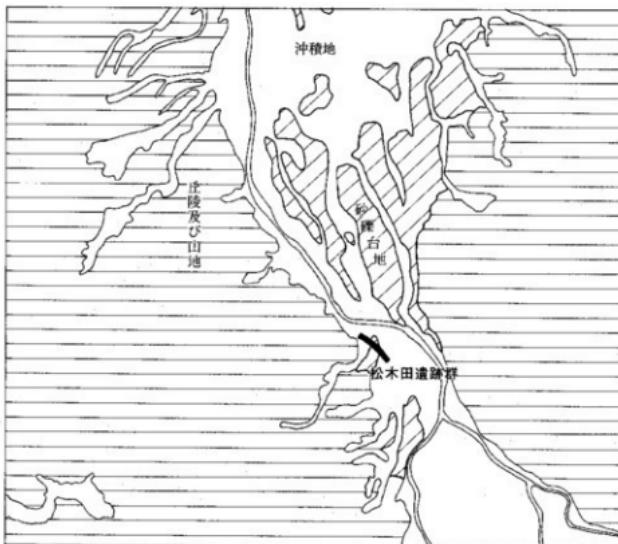


Fig.16 松木田遺跡群周辺地質図

(3) 上層の記録

1 調査の概要

第3次調査地点は、第2次調査地点の北側に位置し、調査前の標高は約44.35mを測り、調査区北端部は緩やかに傾斜している。50cm前後の表土を除去すると、奈良時代の遺物を含んだ厚さ20~40cmの黒褐色シルトがあった。上面の遺構はその下で検出したが、扇状地のため層は一様ではなく、検出面は主に黄色砂礫土・黄色シルトであった。また、調査区北端部の北向き緩傾斜面には弥生前期末~中期初頭の暗黄色粘質土の包含層が形成されている。厚さは南側から北側にかけて厚くなり、調査区内では最大0.4mを測る。検出した遺構は、弥生時代の竪穴住居跡8軒・土坑・ピット、古墳時代前期の竪穴住居跡5軒・土坑・ピット、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒、平安時代の井戸2基、掘立柱建物3棟である。なお弥生時代の遺構も含めて、ほぼすべての遺構から土師器・須恵器が出土しているが、これは前述の包含層の遺物や見落としたピット等の遺物と考えられる。

2 遺構と遺物

①竪穴住居跡

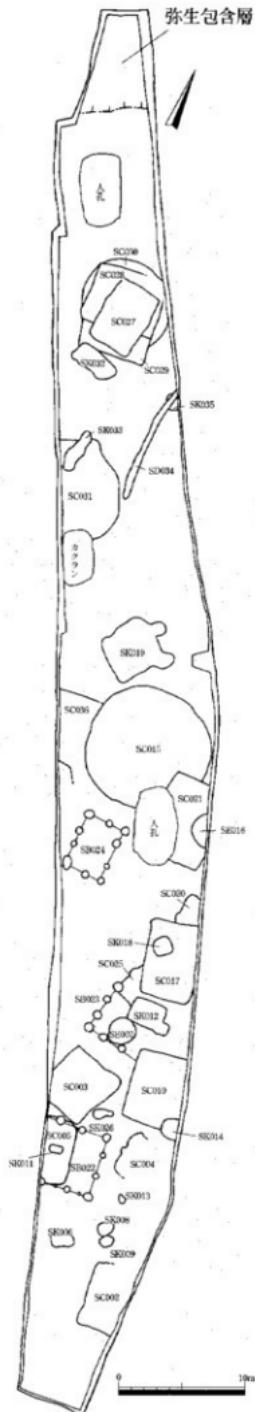
弥生時代中期の竪穴住居跡5軒、弥生時代後期の方形竪穴住居跡1軒、弥生時代終末の方形竪穴住居跡2軒、古墳時代前期の方形竪穴住居跡5軒、古墳時代後期の方形竪穴住居跡3軒を検出した。遺構の遺存状況は切り合いや、搅乱のため良好とはいえない。また貼床部分の土層の土は検出が容易ではなく、十分に検出できなかったり、掘り誤った部分がある。

S C002 (Fig.18, PL. 9-1)

調査区の南側に位置する方形プランの竪穴住居跡で、東側・北側は削平を受けている。遺存状況は悪く、床面は凸凹を呈する。深さは南壁部分で10cmを測る。ピットは多数検出されたが、この住居に伴う柱穴は不明である。弥生土器、土師器が大ビニール1袋、黒曜石片が21g出土している。弥生中期の土器が最も多く、遺構の埋没時期はこの時期ではないかと思われる。

出土遺物 (Fig.18)

001・002は甕の口縁部で001は逆L字状口縁の口唇部に刻み目を施すもの、002は「く」の字に外反し肥厚するものである。003は鉢で口縁端部に三角凸帯をもつ。004は手づくね土器の底部片である。005は壺の底部片でシャープな立ち上がりを示し、底径10.8cmを測る。外面は灰黒色を呈する。006は甕の底部片で、外面は継刷毛目、内面はナデ調整を行い、底径8.5cmを測る。



番号	種類	平面形	規模 (m)	深さ(cm)	時代	備考
001	欠番					欠番 (015・036の遺物を含む)
002	住居跡	方形	5.4+ α ×3.0+ α	10	弥生中期	1/2のみ遺存
003	住居跡	方形	4.5×5.0	10	弥生後期	2本柱 出入口の小土坑
004	住居跡	方形	3.0+ α ×1.7+ α	13	古墳後期	竈をもつ
005	住居跡	隅丸方形	5.34×2.4+ α	10	弥生中期	1/2のみ遺存 中央土坑
006	土坑	隅丸方形	1.8×0.86	24	?	
007	井戸	円形	直径2.6	310+ α	平安時代	自然堆積を呈する
008	土坑	楕円形	1.36×1.04	8~22	弥生?	
009	土坑	楕円形	1.4×0.84+ α	34	弥生?	
010	住居跡	方形	5.88×4.52+ α	33	古墳前期	ベッド付 2本柱
011	土坑	隅丸方形	1.02×0.56	54	?	二段掘
012	土坑	長方形	2.7×2.14	16	古墳後期	
013	土坑	楕円形	0.7×0.44	16	?	
014	土坑	楕円形	1.75×0.3+ α	13	?	1/2のみ遺存
015	住居跡	円形	直径10.6	50	弥生中期	建て替え 中央土坑 8本柱 壁溝 貼床
016	井戸	円形	直径2.8	180+ α	平安時代	1/2のみ遺存 自然堆積を呈する
017	住居跡	方形	6.2×4.1+ α	15	古墳前期	ベッド付 2本柱 壁溝
018	土坑	隅丸方形	1.44×1.44	68	古墳後期	
019	土坑	楕円形	5.34×3.8	20	古墳前期	製鉄関連遺構? 炭化物・鉄滓多く入る
020	住居跡	方形	2.4+ α ×1.2+ α	12	古墳後期	焼土塊あり
021	住居跡	長方形	6.7×4.9+ α	28	古墳前期	ベッド付 2本柱
022	壠立柱建物					3間×2間+ α
023	壠立柱建物					4間×3間+ α
024	壠立柱建物					2間×3間
025	住居跡	方形	3.0+ α ×1.8+ α	10	古墳後期	貼床 焼土塊あり
026	土坑	楕円形	1.22×0.8	76	?	二段掘
027	住居跡	長方形	5.4×3.8	40	古墳前期	ベッド付 2本柱 壁溝 出入口の小土坑
028	住居跡	方形	5.6×2.2+ α	10	弥生終末?	
029	住居跡	方形	5.6×4.7+ α	12	弥生終末?	貼床
030	住居跡	円形	直径7.4	45	弥生中期	中央土坑 7本柱 壁溝
031	住居跡	円形	直径8.2	20	弥生中期	1/2のみ遺存 中央土坑
032	土坑	長方形	3.56×1.62	110	?	
033	土坑	楕円形	3.65×0.78~1.14	4~13	?	製鉄関連遺構?
034	溝		8.9×0.6	6	?	
035	土坑	隅丸方形	1.32×0.9+ α	60	弥生前期	二段掘
036	住居跡	方形	3.2+ α ×3.0+ α	—	古墳前期	鉄鎌出土

表1 第3次調査上面遺構一覧

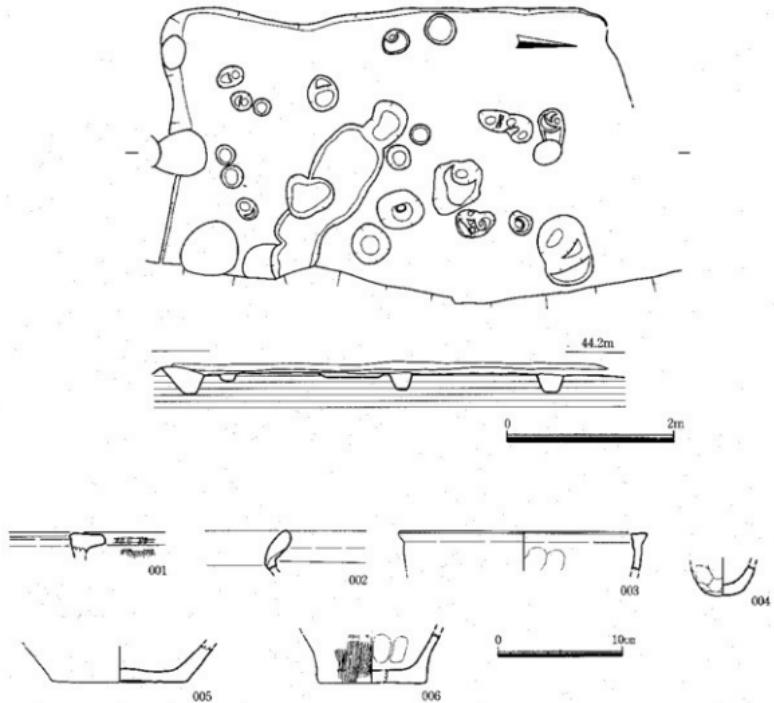


Fig.18 SC002と出土遺物

SC003 (Fig.19, PL. 9-2)

SC002の北西側に位置する方形プランの竪穴住居跡である。SC005を切り、西側は一部調査区外に延びる。東西4.5m、南北5.0m、壁の残存高10cmを測る。主柱穴は2本で径50~70cm、深さは30cmを測り、南側の主柱穴では径26cm程の柱痕跡が確認された。西壁中央に径76cm、深さ28cmのピットがあり、ピットの底には径5cm程の穴が5つ検出された。中からミニチュア土器1点 (Fig.19-013) が出土した。出入口部分の小土坑ではないかと考えられる。住居内からは、弥生土器、土師器、須恵器、青磁片が大ビニール1袋、黒曜石片が32g、鉄滓が138g出土した。

出土遺物 (Fig.19, PL.30)

007~009は甕の口縁部である。「く」の字状口縁で、いずれも端部は平坦面を成している。内外面とともに刷毛目調整を行い、口縁部はその後に横ナデで仕上げている。010は凸レンズ状の平底である。底径は8.8cmを測る。金雲母を含み、外面は橙色、内面は灰色を呈する。外面を刷毛目、内面をナデ調整している。底部外面には刷毛目調整が残る。011~013はミニチュア土器で、012は口径4.0cm、器高4.0cm、013は口径2.6cm、器高3.1cmを測る。011・012の外面は刷毛目調整を、内面は指ナデ・指オサエを行っている。013は内外面ともに指オサエ・ナデで仕上げ、底部は縦ケズリをおこなった後、横ナデをしている。012・013は金雲母を含んでいる。014は半月形の石包丁で、長さ8.2cm、幅4.3cm、厚さ0.8cmを測る。弧に両刃を作り、穿孔は両面から行っている。刃こぼれしている。石材は安山岩である。

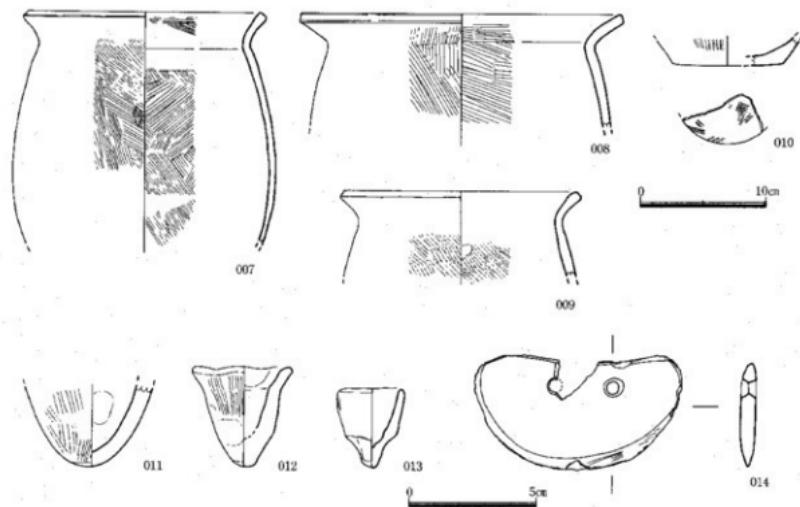
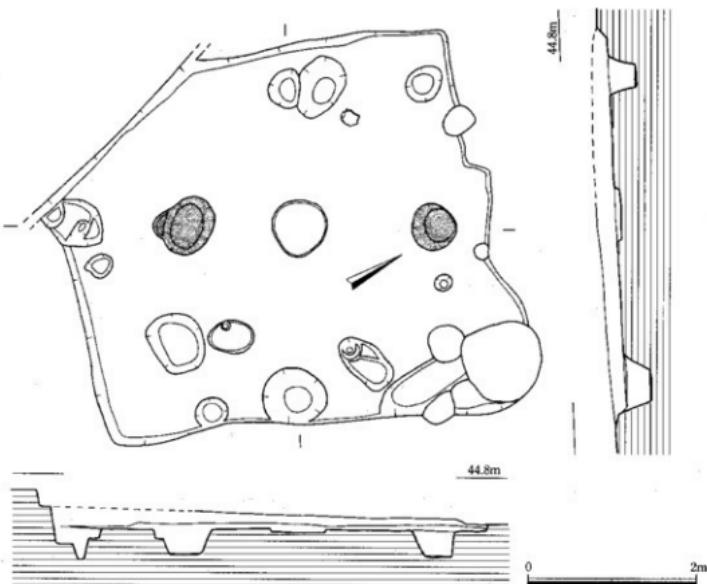


Fig.19 SC003と出土遺物

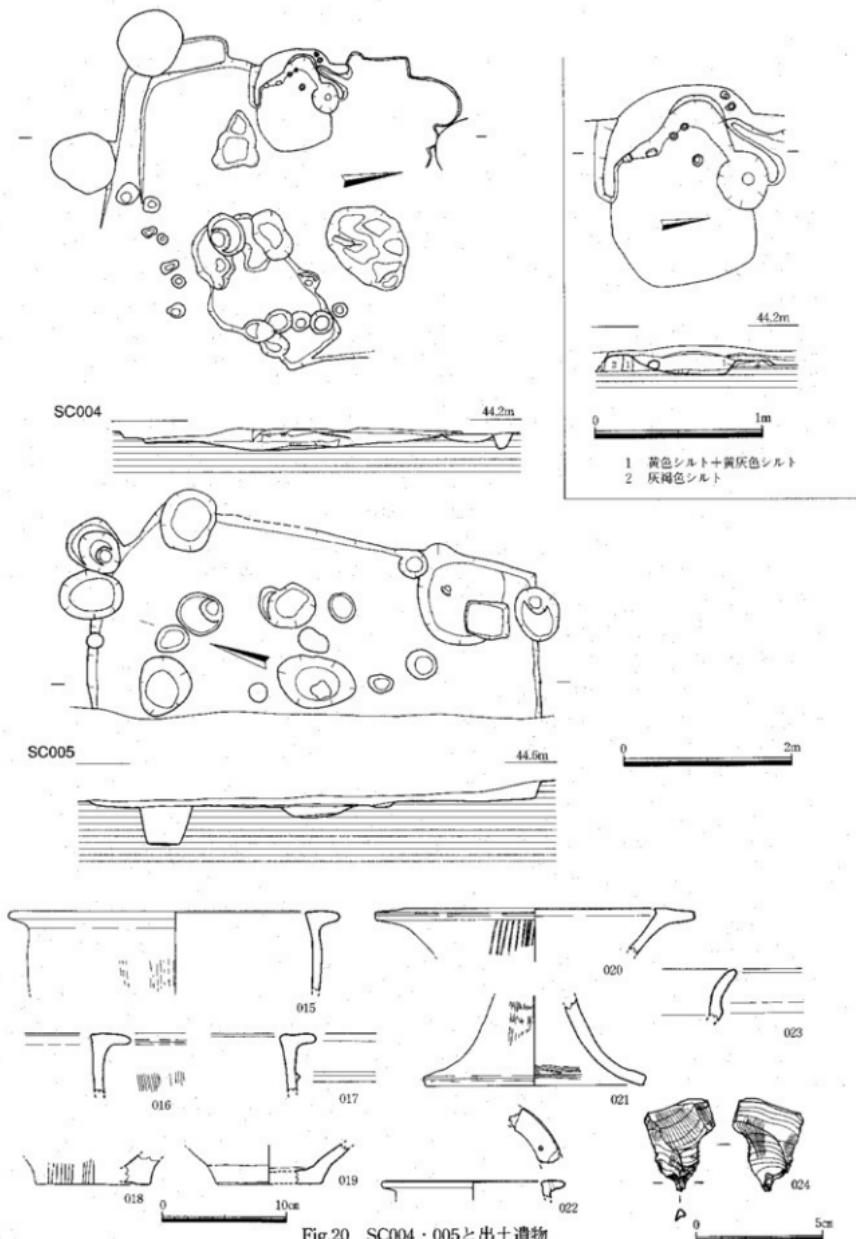


Fig.20 SC004・005と出土遺物

S C004 (Fig.20, PL.10)

S C003の東側に位置し、西壁中央に竪穴住居跡である。東側は大きく削平を受けている。東側に4cmの立ち上がりが一部みられ、それを壁と考えると、3.4mの正方形に近い形に復元できる。床面は凸凹で、中央部分の94×60cmの黒色土は一掘り込んで、埋め戻して、床面を貼っている。壁の残存高は最も残りのよい南西側で13cmを測る。主柱穴は不明である。

かまどは左袖がピットに切られ、上部も大きく削平を受けている。袖は黄灰色・灰褐色シルトで造られており、粘土は見られなかった。また、地山の黄色土が部分的に見られたので、削りだしではないかと思われる。燃焼部は5cm程浅く掘り窪められており、黒褐色土を主体に黄色土、焼土、炭化物の堆積が見られた。天井部の崩壊によってできるブロック状の焼土がない点や、炭化物が少ない点から、廃棄の際に焼して片付けていったのではないかと考えられる。遺物はいずれも細片ばかりで、土師器、弥生土器が中ビニール1袋、黒曜石片6g出土している。

S C005 (Fig.20, PL.11-1)

S C004の西側に位置する竪穴住居跡である。当初、長さ4.1m、幅3.6mの不定形の形状を成していたが、5cm掘り下げた段階でピットと隅丸方形プランのS C005を検出した。西側半分は調査区外に統く。床面で中央土坑が検出され、それを巡るようにピットが並ぶ。南北約5.34m、壁の残存高は10cmを測る。住居の中央には0.94×0.6m、深さ12cmの土坑がある。そのまわりに3つの小ピットがある。土坑内に焼土や炭化物はなかった。柱穴は中央の土坑を中心に円形に配され、柱穴間の直線距離は1.0~1.1m、柱穴の直径50~72cm、深さ23~46cmを測る。南側で柱穴が検出されなかつたのは出入口等、なんらかの施設があったのではないかと思われる。弥生土器、土師器、少量の須恵器、砥石片1点等が小コンテナ1箱程度、黒曜石片が72g出土した。

出土遺物 (Fig.20, PL.30)

015~017は甕の口縁部片である。いずれも逆L字状口縁で、外傾気味である。017は三角凸帯が口縁下に1条巡る。ともに外面は刷毛目調整の痕跡がうかがえるが、最終的には外面横ナデで仕上げる。金雲母・赤褐色粒を含む。018は上げ底気味の底部で、底径9.0cmを測る。内面に黒斑がある。019は甕の底部で、円盤貼付の平底である。底径8.2cmを測り、金雲母・赤褐色粒を含む。外面は浅黄橙色、内面は黒色を呈する。020・021は高坏である。020は鉢先状口縁をもつ坏部で口径27.4cmを測る。頸部には横ナデをした後、斜方向の暗文を施している。金雲母を含み、橙色を呈する。021は脚部片で、底径17.6cmを測る。内面には一部横方向の刷毛目がみられるが、全体を横ナデで仕上げている。橙色を呈し、外面には赤色顔料を塗布している。022は鉢の口縁部で、口径14.5cmを測る。平坦口縁で端部は丸くおさめる。口縁部の中央に径0.3cmの孔を有する。外面には赤色顔料を塗布している。023は繩文晩期の精製浅鉢の口縁部である。坏部下位の屈曲部から大きく外反した口縁をもち、全面を磨きで仕上げている。024は黒曜石製の石錐である。基部を欠失している。幅2.8cm、現存長3.3cmを測る。ドリル部分の幅0.4cm、長さ0.4cmを測る。図示できなかつた出土土器の中で胎土に径0.5cmの黒曜石片を含んだ甕の底部があった。他に粘板岩を石材とした砥石片が1点出土している。

S C010 (Fig.21, PL.11-2)

S C004の北側に位置する方形プランの竪穴住居跡である。東側は一部調査区外に延び、北西部コーナーはピット群に切られている。南北5.88m、東西現存長4.52mを測り、長方形を成すと思われる。残存壁高は東側壁で33cmである。南北にベッド状遺構があり、ともに東側壁に鉤手状にまわる。北側のベッド状遺構は幅1.06m、南側のベッド状遺構は幅0.9mで、地山を削り出して作った上に土を貼っている。一方東側壁への鉤手部分のベッド状遺構は床から土を盛って作っている。この南北からの鉤

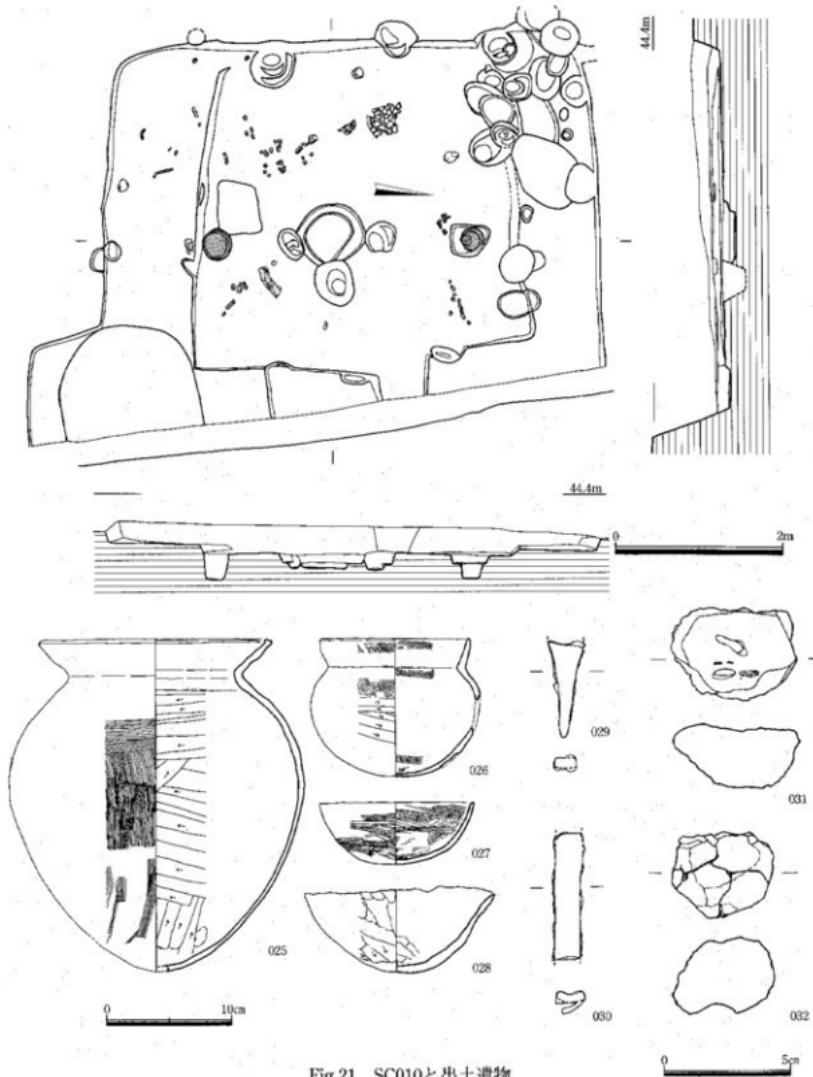


Fig.21 SC010と出土遺物

手状のベッド状遺構に挟まれた東側壁下に長方形の土坑がある。この西側は赤く固くしまっている。踏み固められた跡と思われる。出入口に関する遺構と考えられるが、出入口の土坑は通常、平面形は円形を呈し深いが、この土坑は長方形で浅いため、掘り足りない可能性がある。床面上には多くの炭化物が見られた。中央に5cm程の浅いピットがあるが、そこからは焼土・炭化物は検出されなかった。このピットを挟むようにして、2つの主柱穴がある。柱穴の径は46~34cm、深さは26~31cmを測る。遺物は土師器、弥生土器、須恵器が大コンテナ1箱分、黒曜石片が57g、鉄器・鉄滓(103g)が出土している。

出土遺物 (Fig.21, PL.30)

025は壺で、底部が一部欠損している。肩部が張り、やや尖り底である。口縁は外傾し、端部内側をつまみ上げている。また口縁端面には浅い沈線がめぐる。口径17.6cm、器高26.1cm。胴外面には刷毛目調整を行う。口縁から底部にかけて全面に煤が付着している。胎土には少量の白色粒と金雲母を含む。外面はにぶい橙色、内面はにぶい赤褐色を呈する。026は短頸壺で、口径11.7cm、器高10.85cmを測る。胴部が丸みをおび、口縁が内湾気味に外傾する。口縁端部は丸くおさめている。内面は刷毛目調整をおこなった後、横ナデで仕上げている。外面は胴部最大上半は刷毛目調整の後横ナデを施し、下半はヘラ削りである。胎土は緻密でわずかに白色粒を含んでいる。外面には煤の付着がみられ、部分的に火を受けた跡がある。027・028は鉢である。027は丸底を呈し内外面ともに不規則な刷毛目調整をおこなっている。1/2の残存で口径12.2cm、器高4.9cmを測る。浅黄橙色を呈する。028は手づくね風の鉢で口径13.8cm、器高5.5cmを測る。丸底で外面の下半には縱方向のケズリを上半は指オサエが残り、口縁はつまみ上げて作り出している。内面は指オサエを残したまま粗いナデで仕上げている。白橙色を呈する。ともに白色粒・金雲母を含む。029は鐵の茎である。030は鉈の可能性があり、横断面は三日月形をなしている。031は楕円形鋸治溝であり、平面は5.0cm×3.5cmの楕円形を呈し、厚さ2.4cmを測る。重量65gでメタルは残っていない。上面はやや窪んでおり、木炭が付着残存している。032は鉄塊系遺物でクラックが入っている。

S C015 (Fig.22・23, PL.12・13)

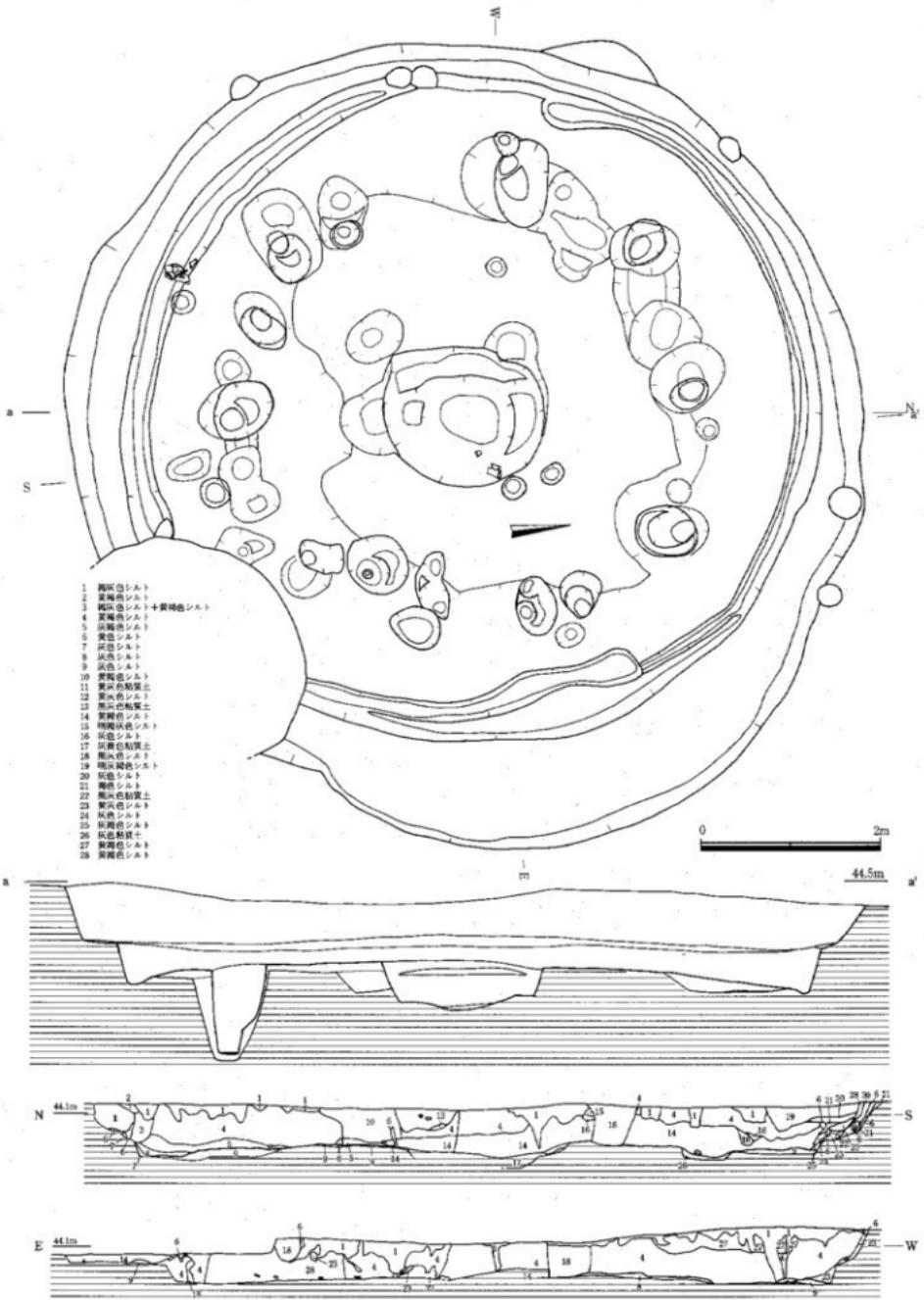
調査区の中央に位置する大型円形竪穴住居跡である。南側をマンホールにより擾乱されている。平面プランは円形を呈し、最大径10.6mを測る。当初、S C015を中心にして東西方向に黒褐色を呈した1本の溝が走っている様相を呈していた。掘り下げると、3軒の住居跡の切り合いを確認した。東から方形プランのS C021、円形プランのS C015、方形プランと考えられるS C036である。

十字のベルトに設定し直し、掘り下げると周囲はベッド状を呈した。この時点で、2軒の住居の切りあいの可能性が考えられたが、ベルトの土層観察をおこなうと、切りあいのラインが入らない点、ベッド状遺構の上から下の床面まで土が流れている点から、2軒の切り合いでなく、ベッド状遺構を有する円形住居跡であることを確認した。ベッド状遺構の幅は東側が最大で110cm、一番細くなっている西側で12cmを測る。地山を削りだして作っている。残存壁高は最大50cmである。

床面で焼土・炭化物が確認され、それを追って掘り広げていくと床面は中央土坑付近がレベル的に一番高く、壁に向かうにつれ7cm程深くなっている。焼土・炭化物は西側の床面で多く検出した。壁沿いに、幅8~20cm、深さ4~8cmの壁溝が巡るが、北東側1.8m部分は切れている。また南西側の壁溝は壁から最大45cm離れている。床は中央土坑付近は地山であるが壁に向かうにつれ深くなっている部分に貼床をしている。貼床の厚さは10cm程度である。中央土坑は直径195cm、幅164cm、深さ38cmで楕円形を呈している。中央土坑からは炭化物・焼土は検出されなかった。柱は径5.7mの円を描くように最低8本確認された。柱穴径は42~78cm、深さは40~85cmで、中心に向かって傾き約5度の傾斜をもって立っている。柱穴は壁溝と並行するが、ベッド状遺構は東に張り出している。柱穴とベッド状遺構の関係から住居の拡張・建て替えが考えられた。

貼り床を下げるともう1列切りあうように、柱が8本確認された。柱穴径は54~108cm、深さは42~72cmで、直立している。中央土坑も東に約60cm拡張した。貼床の下は中央土坑付近から壁側に向かって15~20cmと大きく落ちている。この段階で1軒の住居の立て替えが考えられた。

弥生土器、土師器が大コンテナ4箱分、使用痕・加工痕のある剝片6点を含んだ黒曜石片が291g、不明鉄製品・鉄滓が416g出土している。このうち、土師器はS C036の可能性が高い。



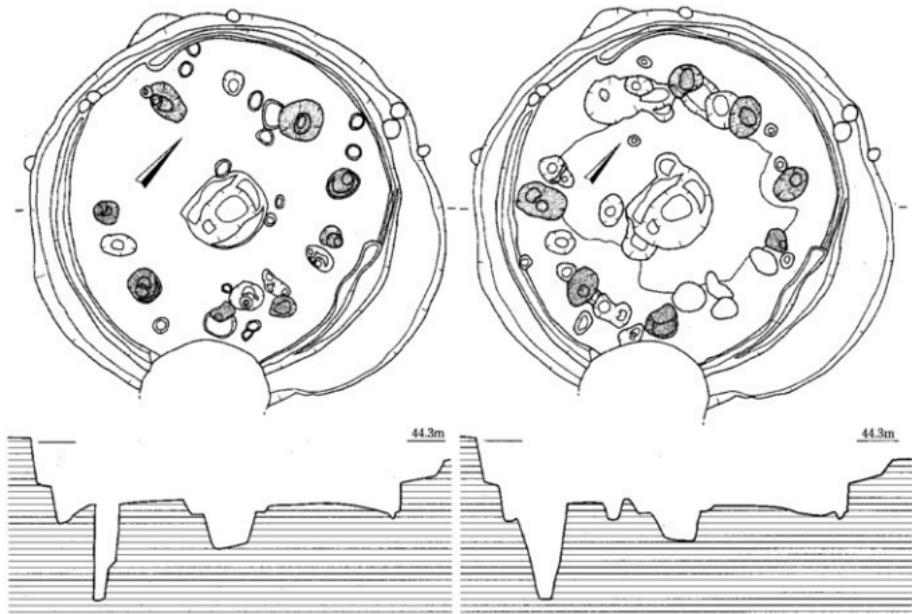


Fig.23 SC015建替え後と前

出土遺物 (Fig.24・25・26、PL.30・31)

033～046は甕である。033・034は口縁に三角凸帯をもつもので034は口縁端部に刻目を施している。他は逆L字状の口縁をもつ甕である。035の口縁は外傾気味で、内側に突出するものである。外面は粗い刷毛目調整をし、内面は丁寧な横ナデで調整している。白色砂粒を多く含み、橙色を呈する。036～038はやや内傾する口縁をもち、わずかに内側に突出するものである。037は外面に赤色顔料を塗布し、口縁内側に垂れている。036・038は金雲母・白色砂粒を含み、浅黄橙色を呈する。037の胎土は精良である。調整は外面に刷毛目調整がみられるものもあるが、いずれも丁寧な横ナデで仕上げている。038は口縁下に三角凸帯を1条巡らせている。037は口径19.0cm、038は口径32.4cmである。039・040の口縁は内傾し、内側に明瞭な稜線をもつ。039の口縁下には三角凸帯を1条巡らせている。丁寧な横ナデで仕上げている。金雲母・白色砂粒を少量含み、039はにぶい黄橙色を、040は橙色を呈する。口縁から胴部にかけての外面に煤の付着がある。039は口径34.2cm、040は32.8cmを測る。041・042の口縁は内傾し、内側に明瞭な稜線をもたないものである。041は胴部が開かないことから、鉢の可能性もある。外面は粗い刷毛目調整で、内面は横ナデをしている。口径は29.2cmを測る。042はほぼ完形品で、口径22.0cm、器高21.0cm、底径8.7cmを測る。外面は縦方向の刷毛目調整で、内面は横ナデをしている。041は赤褐色を含み、いずれも白橙色を呈する。042は口縁から底部にかけて煤がみられる。043はわずかに上げ底となる底部片である。044～046は平底を呈し、043に比べ薄い。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。044は外面に煤の付着がみられる。

047～061は壺である。047は口縁が外反する壺で頭部と胴部の間に三角凸帯を巡らせている。口縁部内面はわずかに窪んでいる。外面は刷毛目調整のあとと丁寧にナデ消している。口縁部と外面には赤色顔料を塗布し、頭部から口縁部にかけて暗文を施している。口径は12.0cmを測る。048・049は袋状

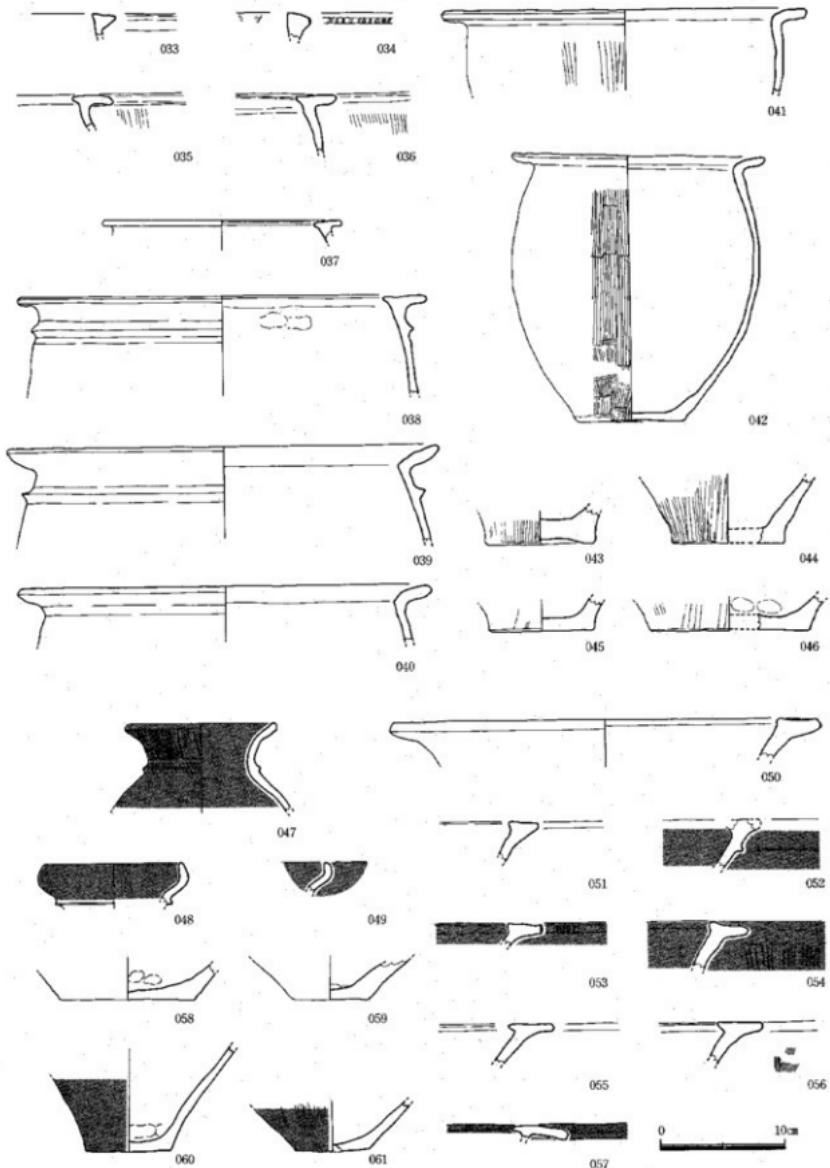


Fig.24 SC015出土遺物 1

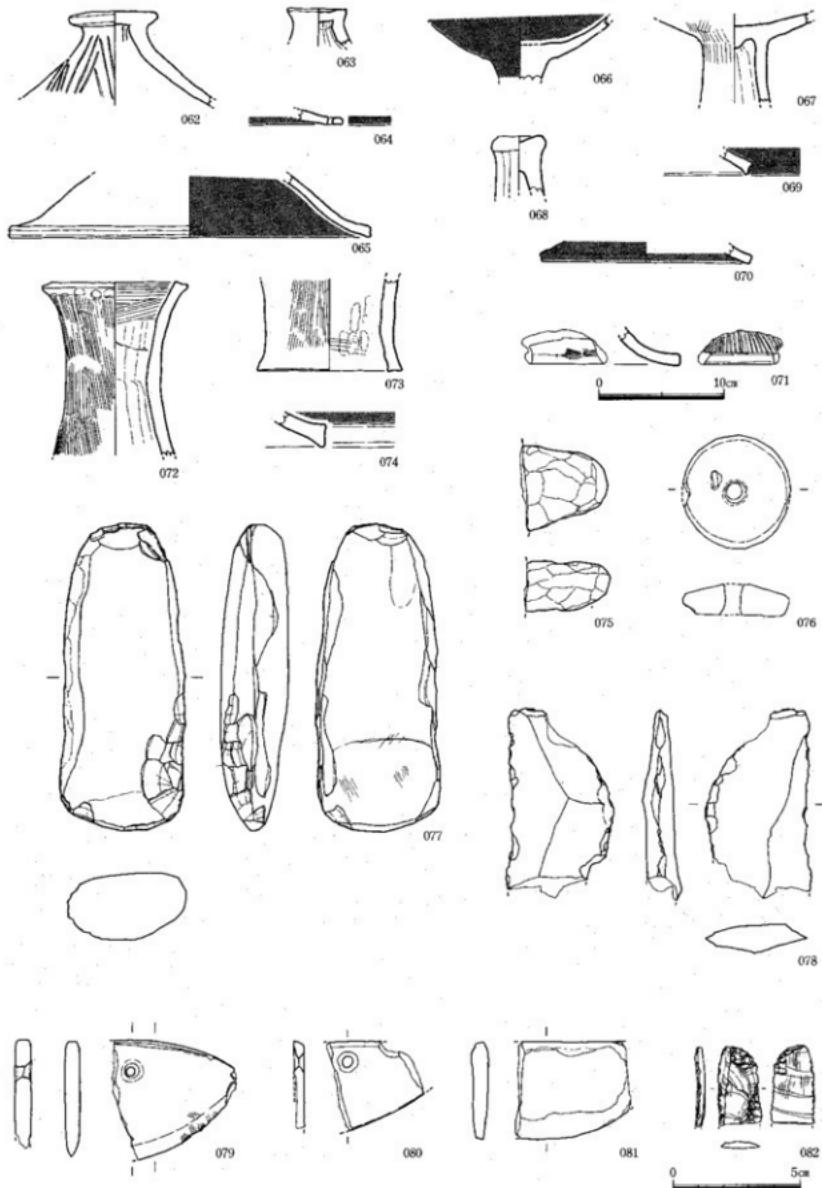


Fig.25 SC015出土遺物 2

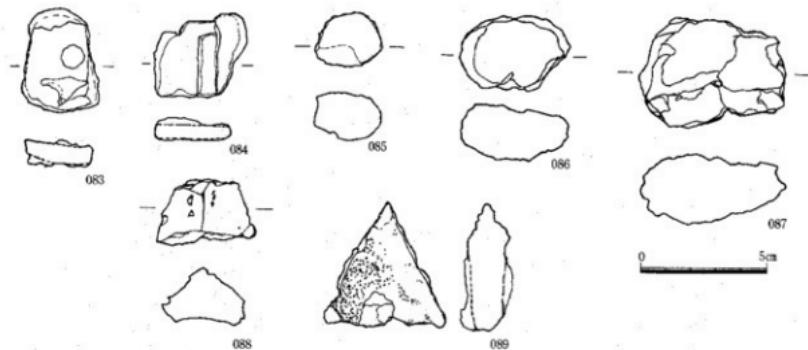


Fig.26 SC015出土遺物3

口縁で、048は口縁下に三角凸帯が付き、口径10.8cmを測る。内外面に赤色顔料が残る。050～057は広口壺である。055・056は鋸先口縁を呈する。050は口径34.2cmを測る。056の外面に一部刷毛目調整が残るが、ナデ調整で仕上げている。050～056はにぶい橙色を呈し、052・053・054・057の内外面には赤色顔料が残っている。052の口縁下には三角凸帯がめぐり、053の口縁端部には刻目が施されている。054の口縁下から頸部にかけては暗文が施されている。058～061は底部片で平底である。061の外面に刷毛目が残るが、丁寧なナデで仕上げている。060・061は赤色顔料が残っている。058の内面にはにぶい褐色、外面と059の内外面にはにぶい橙色を呈する。胎土は059は白色砂粒を多く含む。

062～065は蓋である。062・063はつまみ部の破片である。062のつまみの径は7.0cmを測り、金雲母・白色砂粒を含み、浅黄橙色を呈する。外面には黒斑がある。丁寧なナデで仕上げたあと、外面には暗文風の浅い沈線を施している。064は内外面に、065は内面に赤色顔料が残る。064は無頭壺の蓋と思われ、外面には丁寧な磨きが施されている。口縁近くに穿孔がある。065は口径28.8cmを測り、端部中央は窪んでいる。

066～071は高杯である。066は杯部片で内外面に赤色顔料が残っている。067は広く開く杯部と太い柱状の脚部をもつ。杯部外面は刷毛目で、他はナデで調整している。金雲母・赤褐色粒・白色砂粒を多く含み、灰白色を呈する。068は柱状の脚部で、外面は縱方向のナデを施している。069～071は脚部片である。069の脚端部中央は窪んでいる。外面には赤色顔料が残っている。070は脚部径16.8cmを測り、内外面に赤色顔料を塗布している。071は幅部が大きく外に開くもので、内面は橙色を呈し、外面には赤色顔料が残っている。端部はわずかに窪んでいる。外面には雑な暗文が施されている。

072～074は器台である。072は口径11.6cm、073は底径11.4cmを測る。外面は刷毛目調整、内面底部付近は横方向の刷毛目、上部はナデ調整を行う。金雲母・赤褐色粒・白色砂粒を含み、橙色を呈する。074は筒型器台の底部片である。白色微砂粒を含み、明橙色を呈する。全面丁寧なナデ調整で仕上げている。外面には赤色顔料の付着がみられる。

075は瓶の把手部分である。076は土製の紡錘車である。径4.5cm、厚さ1.25cmを測る。孔径は0.8～0.9cmで、両側から穿孔している。にぶい黄橙色を呈する。

077は磨製石斧である。全長12.25cmを測る。全体によく磨かれている。刃部側面には敲打痕が残る。玄武岩製である。078は縦型石匙である。側面は剥離調整している。石材はサヌカイトである。079は小豆色を呈した輝緑凝灰岩製で、いわゆる立岩産の石包丁である。弧に両刃を作る。刃こぼれをしている。孔径は0.7cmを測り、両側から穿孔している。080・081は半月形の石包丁である。080は砂岩製

で、風化が激しく刃部の形態等は不明である。孔径は0.8cmで両側から穿孔している。081は穿孔を行う前の未製品である。他に赤チャート質の剥片が1点出土している。082は縦長刃剥片を利用した黒曜石製の使用痕のある剥片である。側縁の片側を使用している。最大幅1.3cm、長さ3.5cmを測る。

083 (22.97g)・084 (17.9g)は鉄片で、製品の可能性もあるが、錯がひどいため、不明である。087は楕円形鐵治渾で、平面は5.7cm×4.3cmの楕円形を呈し、厚さ2.8cmを測る。重量86gでメタルは残っていない。底面全体に径1~3mmの砂粒が疊らに付着している。085 (10.61g)・086 (28.92g)は鉄渾で球状に近い形をしている。特に085の小型の球状を呈した鉄渾はこれ以外にも多くみられる。

088は精鍛渾で29gを計る。089は炉壁の一部で表面は焼結しており、鉄渾が溶けきれずに砂鉄が半融解している。41gを計る。

S C017 (Fig.27, PL.17)

S C010の北側に位置する方形プランの竪穴住居跡である。東側は一部調査区外に延び、S K018に切られている。南北6.2m、東西4.1mを測り、長方形を呈する。残存壁高は15cmである。壁溝は西壁・東壁にあり、幅20cm、深さ10cmを測る。主柱穴はS K018やピットに切られてプランははっきりしないが、南北2本と考えられる。深さは27~45cmを測る。西側に径70cm、深さ20cmの土坑があり、出入口と思われる。南と北にベッド状遺構があり、地山の削りだしである。S C010のように鉤手状にまわる部分にだけベッドを貼ってつくっていた可能性もある。鉤手状のベッド状遺構が西側にまわる可能性も考えねばならない。弥生土器、土師器が大コンテナ1箱分、黒曜石片が29g、鉄渾が181g出土した。

出土遺物 (Fig.27, PL.31・32)

090~092は甕である。090・092は胴が丸く張る。090の口縁はやや内湾気味に外傾し、端部内面には段を有する。外面肩には5本程浅い沈線を巡らしている。外面には煤が付着している。091・092の口縁は外傾し、端部は丸くおさめている。すべて内面はケズリ、外面は刷毛目調整である。赤褐色粒・白色粒を多く含む。浅黄橙色を呈し、090・092は外面に黒斑がある。

093は短頸壺である。口縁は外湾気味に外傾し、端部は丸くおさめている。口縁部内面は横方向の刷毛目、胴部内面は横方向のケズリ、胴部外面は斜め方向の刷毛目で調整を施している。白色粒を多く含み、浅黄橙色を呈する。

094は器台で受部である。受部の屈曲は明瞭で、口縁は外傾気味にひらく。端部は丸くおさめている。口縁部内面は横方向のミガキを、受部内面・外面には丁寧な横ナデを行っている。胎土は精良でわずかに白色粒を含み、明赤褐色を呈する。095は器台で内外面ともに指ナデ、指オサエで調整している。白色粒を多く含み、金雲母が混じる。明赤褐色を呈する。

S C020 (Fig.27, PL.15-1)

S C017の北側にあり、東側の大部分が調査区外に延びている方形の竪穴住居跡である。S C017側の床面には焼土・炭化物がみられる。粘土はみられなかったがS C004と同様のかまどではないかと思われる。またS C020の遺物はS C017の遺物より新しいことから切り合いを間違えて南側のプランを確認できず掘りすぎてしまった。遺物は土師器と少量の弥生土器が中ビニール1袋、黒曜石片が4g出土している。ほとんどが小片であり図化できるものはなかった。

S C021 (Fig.28, PL.15-2)

S C020の北側に位置し、西側はマンホールに搅乱を受け、東側はS E016に切られ調査区外に延びている。北西コーナーはS C015との切り合いを明確にすることはできず、10cm程掘り下げた床面で確認した。南北5.6m、残存壁高は南側で最大28cmを測る。南と北にベッド状遺構があり、西側で鉤手

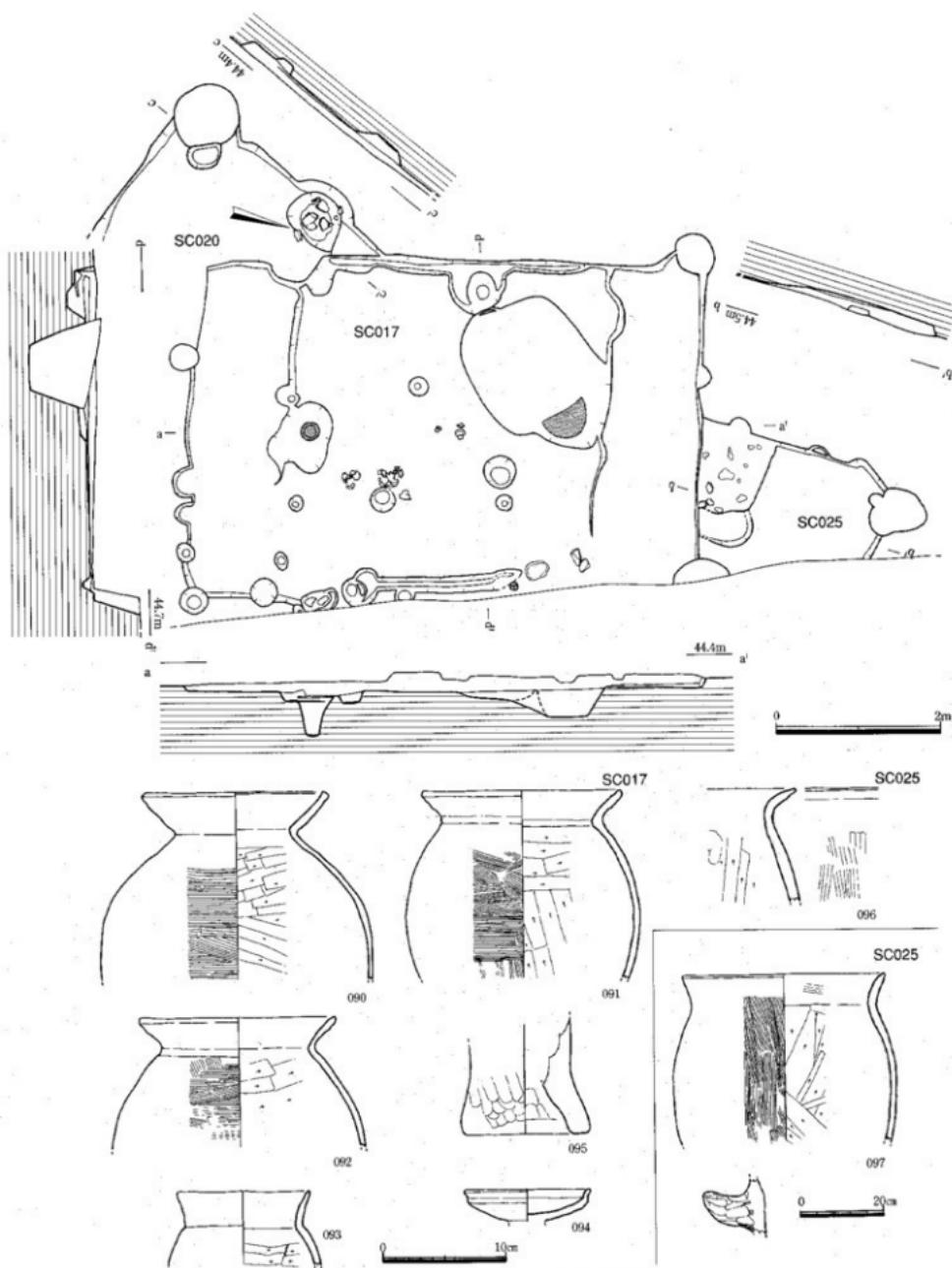


Fig.27 SC017・020・025と出土遺物

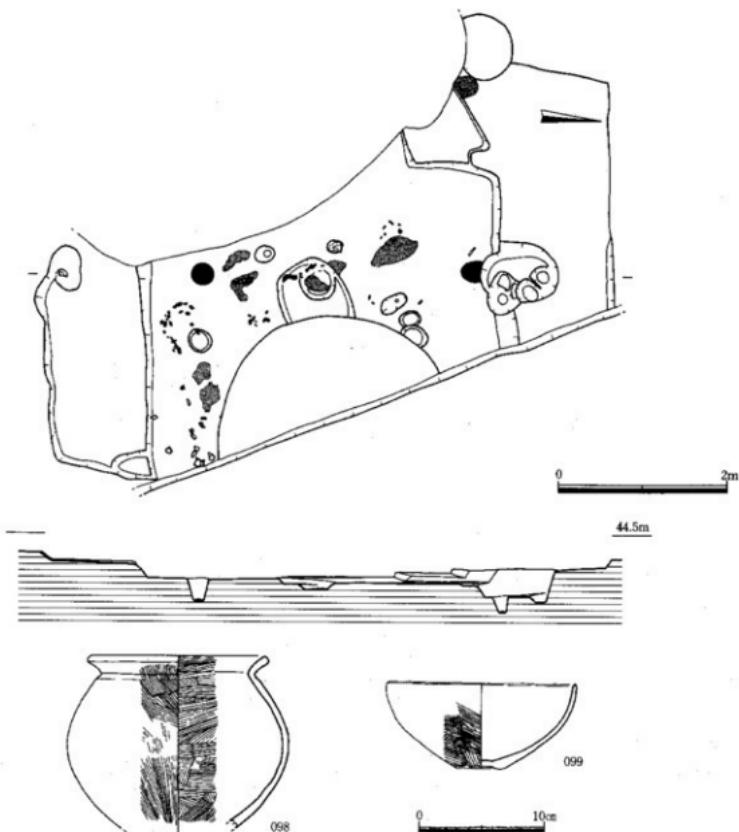


Fig.28 SC021と出土遺物

状に曲がる。ベッド状遺構は南側で幅1.2m、北側で幅1.4mを測る。床面には焼土・炭化物が多くみられた。住居中央には楕円形の浅い土坑がある。深さは3cmである。この土坑をはさむようにして、2本の主柱穴がみられる。柱穴の径は26~30cm、深さは4~26cmを測る。住居内からは土師器、弥生土器が小コンテナ1箱、黒曜石片が12g、鉄滓が108g出土し、床面直上で甕(Fig.28-098)が出土した。
出土遺物 (Fig.28, PL.32)

098は甕で、胴部が丸く張る。口縁は短く外反し、端部はやや肥厚し、口唇部は面を作り出している。内外面ともに刷毛目調整で、下部は粗くなっている。胎土には白色粒・金雲母・赤褐色粒を含み、色調は、外面が赤褐色、内面はにぶい橙色を呈する。099は鉢で、底部は上げ底気味の小さな平底で、そこから全体的に内湾する体部に移行し、口縁部はほぼ直立する。口縁端部は丸くおさめる。内面は丁寧なナデで、外面は不定方向の刷毛目である。胎土には白色粒を含み、白橙色を呈する。内外面ともに黒斑がある。

SC025 (Fig.27, PL.16-1)

S C017の南西側に位置し、方形プランを呈すると考えられる竪穴住居跡である。当初、大部分をSK012・SC017に切られていると思っていた。しかし、SC025の西壁付近から検出された焼土がSC017の上面に統いていることや、SC025から出土した土器がSC017よりも新しいことからSC025とSC017の切り合い関係を間違えて掘り下げたことが判明した。SC025はSC017より新しいことを確認した。残存壁高は西側で10cmを測る。灰褐色に黄色・茶褐色の混じった土で貼床をしている。焼土は1.12×0.6mの範囲でひろがっており、その下からは66×54cm、深さ20cmのピットが検出された。壁から30cm張り出しているプランや焼土の存在から竈の存在がうかがえるが、粘土はみられなかった。土師器の甕、瓶などが中ビニール1袋、鉄滓が15g出土した。

出土遺物 (Fig.27, PL.32)

096は甕である。口縁は外傾し、端部付近は強い横ナデを施して、端部に面をつくりだしている。内面は縱方向のケズリを、外面は粗い刷毛目を施している。097は1/3残存の把手付き甕である。口縁部は緩く外傾している。端部は折り曲げて丸くおさめている。口径は25.2cmを測る。調整は口縁部横ナデ、胴部外面縦方向の刷毛目、胴部内面ヘラケズリをおこなっている。残存部には煤の付着はみられない。ともに、白色粒が多く含み、橙色を呈する。黒斑が外面にみられる。

SC027 (Fig.29, PL.16-2, 17-1・2・3・4)

調査区の北側に位置し、南北5.4m、東西3.8mを測る方形プランの竪穴住居跡である。壁の残存高は西側で40cmを測る。貼り床はしていない。南側に幅96cmの帯状のベッド状遺構がある。地山を削り出して作っている。床面との境に小溝がみられ、これは東側・北側・西側を巡って住居を全周する。幅20cm、深さ2~13cmの壁溝である。北西角では壁溝とピットと一緒に掘ってしまい、正確なプランをつかめなかった。また北側では壁溝の深さは2cmと浅くなっていて全てを検出することはできなかった。東壁中央付近に壁溝が30cm程張り出したところがあり、これは出入口ではないかと思われる。主柱穴は南北2本で径30~48cm、深さ11~37cmを測る。床面中央・北側ではまとまって炭化物がみられた。住居内からは土師器、須恵器、弥生土器が大コンテナ4箱、加工痕のある剥片1点を含んだ黒曜石片が66g出土した。

出土遺物 (Fig.29・30, PL.32・33)

100~103は甕である。胴部が丸く張る。100の口径15.4cm、101の口径17.3cm、102の口径16.6cm。100・101の口縁は内湾気味に外傾し、端部内面には段ができる。101の口縁は厚みがある。102は直線的に外傾し、端部付近は強い横ナデを施して丸くおさめている。101の肩部には3~4本の太めの沈線が、102には1本の沈線がめぐる。調整は外面の上半が横ナデ、下半が縦ナデ、内面はヘラケズリである。色調は101が橙色。他はすべて浅黄橙色である。胎土は白色粒・赤褐色粒を含み、103のみ金雲母も含む。

104は広口壺の口縁で口径18.0cm。口縁は外傾し端部は丸くおさめている。内面は縦方向の、外面は横方向の刷毛目調整である。105~107は短頸壺で、口径は105が10.1cm、106が12.4cm、107が9.8cmである。器高は105が8.4cm、106が10.2cm、107が7.1cmを測る。口縁部は内湾気味に外傾し、105・107は端部を丸くおさめ、106は端部をわずかにつまみだし端面に浅い沈線を避けている。口縁部と胴部上半は縦方向の刷毛目、下半はケズリ、105と106の口縁部外面には横方向の細い沈線状のミガキを施している。口縁部内面は横方向の刷毛目、105・107の胴部内面は丁寧なナデを、106には刷毛目調整をおこなう。胎土は精良でわずかに白色粒を、107のみ金雲母も含む。106は内外面橙色、105の外面は褐色、内面は白橙色、107の外面は白橙色、内面は白黄橙色。すべて外面底部付近に黒斑がある。105の口縁部・胴部上半、107の胴部上半にほんのわずか赤色顔料の付着がみられる。

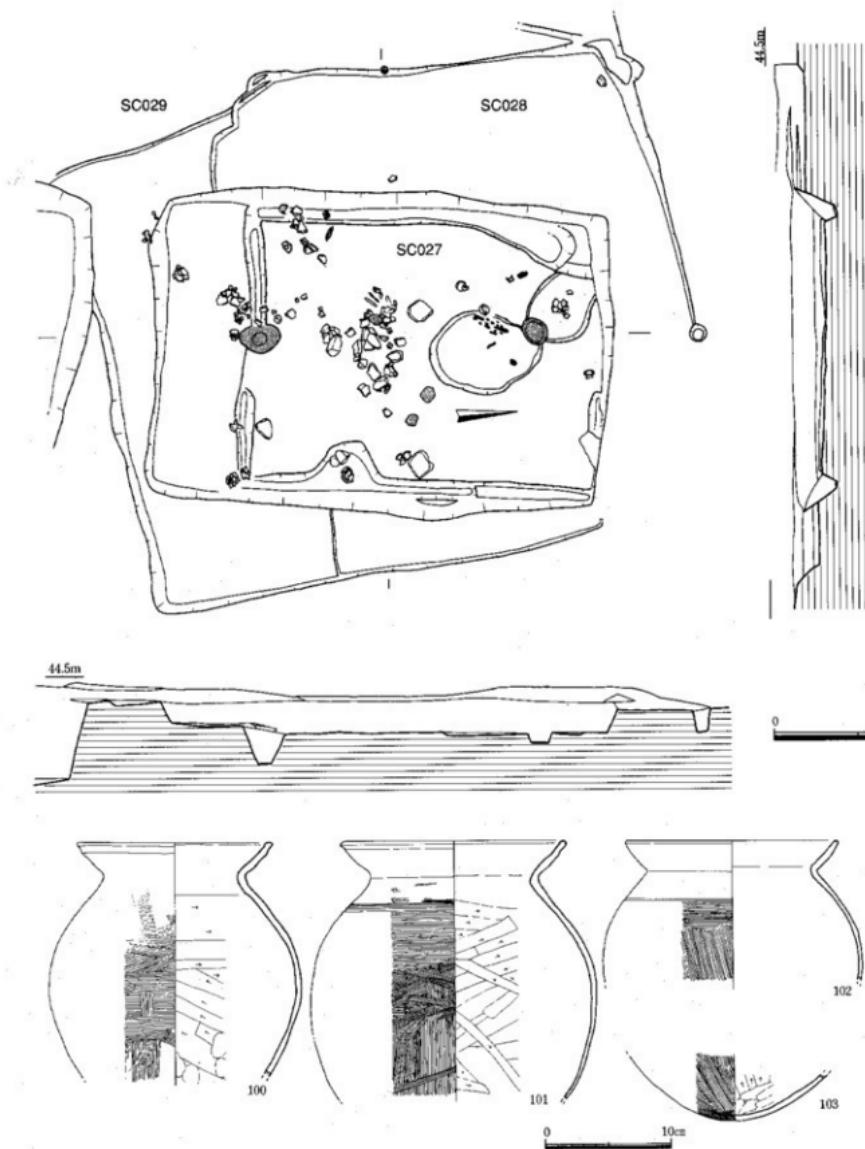


Fig.29 SC027・028・029及び027の出土遺物 1

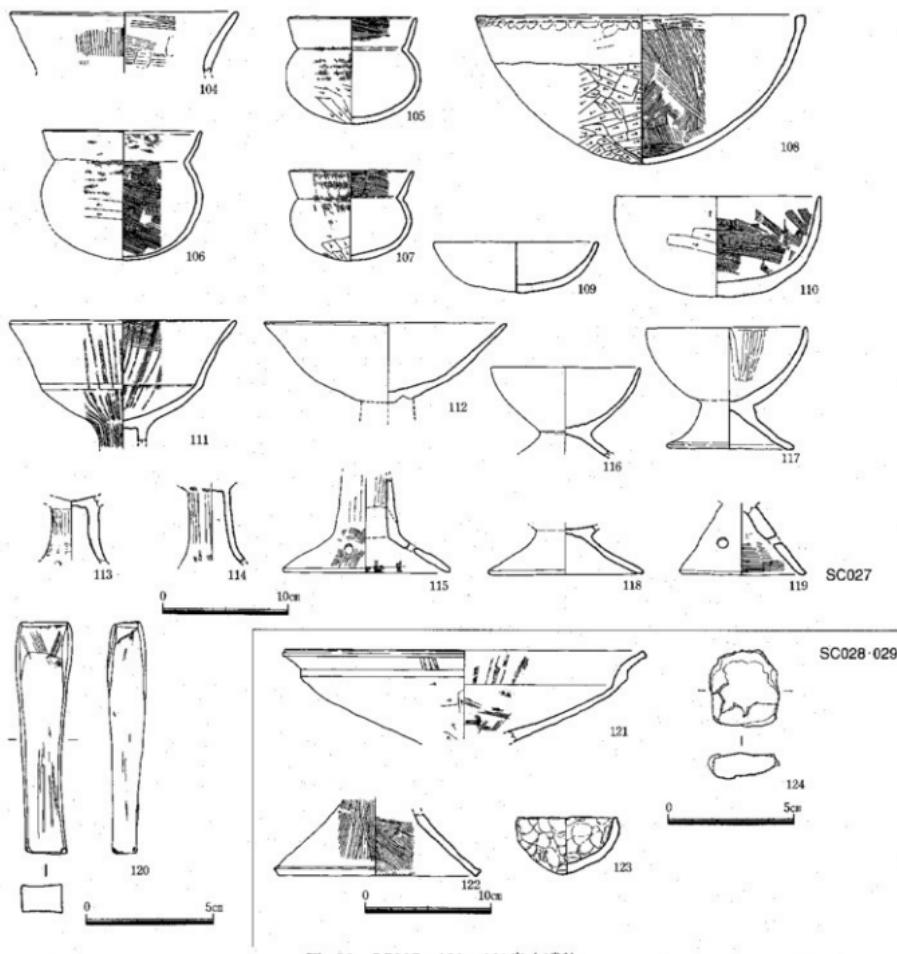


Fig.30 SC027・028・029出土遺物

108～110は鉢で、108は大型のものである。口径は108が 26.2cm 、109が 13.0cm 、110が 16.5cm 。器高は108が 11.8cm 、109が 4.0cm 、110が 7.9cm を測る。108の底部は尖り気味の丸底でそこから体部が開き、口縁が直立する。口縁端部は折り曲げて面をつくりだしている。口縁部外面は横方向につまみながらナデて調整しているため指オサエが残る。胴部外面はケズリである。内面は全体を刷毛目調整した後、口縁部に2～4列の工具による刺突を施している。最後に口縁部の面をナデて仕上げている。胎土には赤褐色粒・白色粒を含み、にぶい橙色を呈する。外面には黒斑があり、部分的に火を受け赤変している。109は皿状のもので口縁端部は丸く仕上げている。内面と外面上半は丁寧なナデを、下半は横方

向のケズリを施している。胎土は白色粒をわずかに含み、橙色を呈する。110は平底にちかい底部で、口縁は直立する。口縁はつまみ上げて丸くおさめている。内面は刷毛目調整を行い、その後に底と口縁部を横ナデ、外面は風化のため単位は不明だがケズリで成形している。胎土は白色粒をわずかに含み、にぶい橙色を呈する。外面底部付近に黒斑がある。

111～115は高坏である。111は深めの坏部で、底部と体部の境に明瞭な段をもち、外反する口縁部となる。口径17.7cmを測る。調整は外面上半部に横ナデ、他は丁寧なナデをした後、縱方向に暗文を施している。胎土は精良で白色粒・金雲母をわずかに含み、橙色を呈する。端正な作りの高坏である。112は口径19.2cm、底が浅く、坏の開きは直線的で、端部は丸く仕上げている。内面に一部刷毛目が残るが、全体的に風化が激しく、詳細は窺えない。胎土は白色粒を多く含み、浅黄橙色を呈する。113～115はいずれも脚部片である。113・115は焼成前の円形透かしをもち、現存で、113は3つ、115は2つ確認できる。115の底径は13.2cmを測る。115の裾部は内面に段を有し内湾気味に聞く。筒部にはしづり痕がみられ、脚部は刷毛目調整である。外面に赤色顔料の付着が、わずかにみられる。114は113・115に較べ細身である。113・114の内面はナデ、外面は縱方向の刷毛目の後に筒部は縱方向の丁寧なミガキで仕上げている。胎土は白色粒を含み、115のみ赤褐色粒が混じる。115は浅橙色、他は橙色を呈する。

116～118は台付鉢である。116・117ともに深めの坏部で口縁は内傾気味に直立する。116は風化のため詳細は窺えないが、117と同様に内面は縱方向のミガキ状のナデを施している。外面は丁寧なナデである。117は坏部に短い柱状部を持つが、116は坏部から脚が直接開く。116に1箇所円形透かしがあるが、下が欠損しているため、詳細は不明である。胎土は白色粒を含み、117は金雲母も混じる。116は淡褐色、117はにぶい橙色で、一部欠損しているが、口径12.7cm、底径6cm、器高9.6cmを測る。118は前者と違い、大きく聞く裾部を持つ。また、作りも端正である。横ナデで仕上げている。外面には煤の付着がみられる。胎土は精良で黄橙色を呈す。

119は器台脚部。厚手で中位に焼成前の円形透かしをもつ。現存では2個の透かしがみられる。風化のため外面は不明だが、内面の透かしより下は横方向の刷毛目、上はナデを施している。白色粒を少量含み、浅黄橙色を呈する。

120は手持ちの仕上げ砥石である。石材は凝灰岩である。全長9.1cmで、側面の4面ともよく磨かれている。

S C028・029 (Fig.29, PL.16-2)

S C027に大きく削平を受けた2軒の方形竪穴住居跡である。検出時に2軒の住居があることは確認できたが切りあい関係は分からなかった。壁の残存高はS C028が10cm、S C029が北側で12cmを測る。床面のレベルはほぼ同じである。S C029は部分的に貼り床が残っている。付随する柱穴・土坑等は削平のため不明である。ベルトの土層では切りあい関係が判然としなかった。また時期を明確にする遺物量も少なく、時期差をうかがうことはできなかった。土師器・弥生土器が小コンテナ1箱、黒曜石片が67g、鉄器が1点出土している。

出土遺物 (Fig.30, PL.33)

121は高坏の坏部片である。坏部は浅く緩やかに開き、上半が屈曲し口縁は短く外反する。口縁端部は強く横方向にナデを施し、外面に段を有する。端面には浅い沈線が巡る。屈曲部より下の外面はケズリ、上半はナデのち縦方向のミガキ状ナデ、内面は不定方向の刷毛目調整の後、縦方向の細いミガキ状ナデをおこなう。口径は28.4cmを測る。胎土は白色粒を含み、黄橙色を呈し、口縁付近に黒斑がある。122は台付鉢の脚部である。底径は15.6cmを測る。脚は直線的に聞く。強い横ナデで成形し

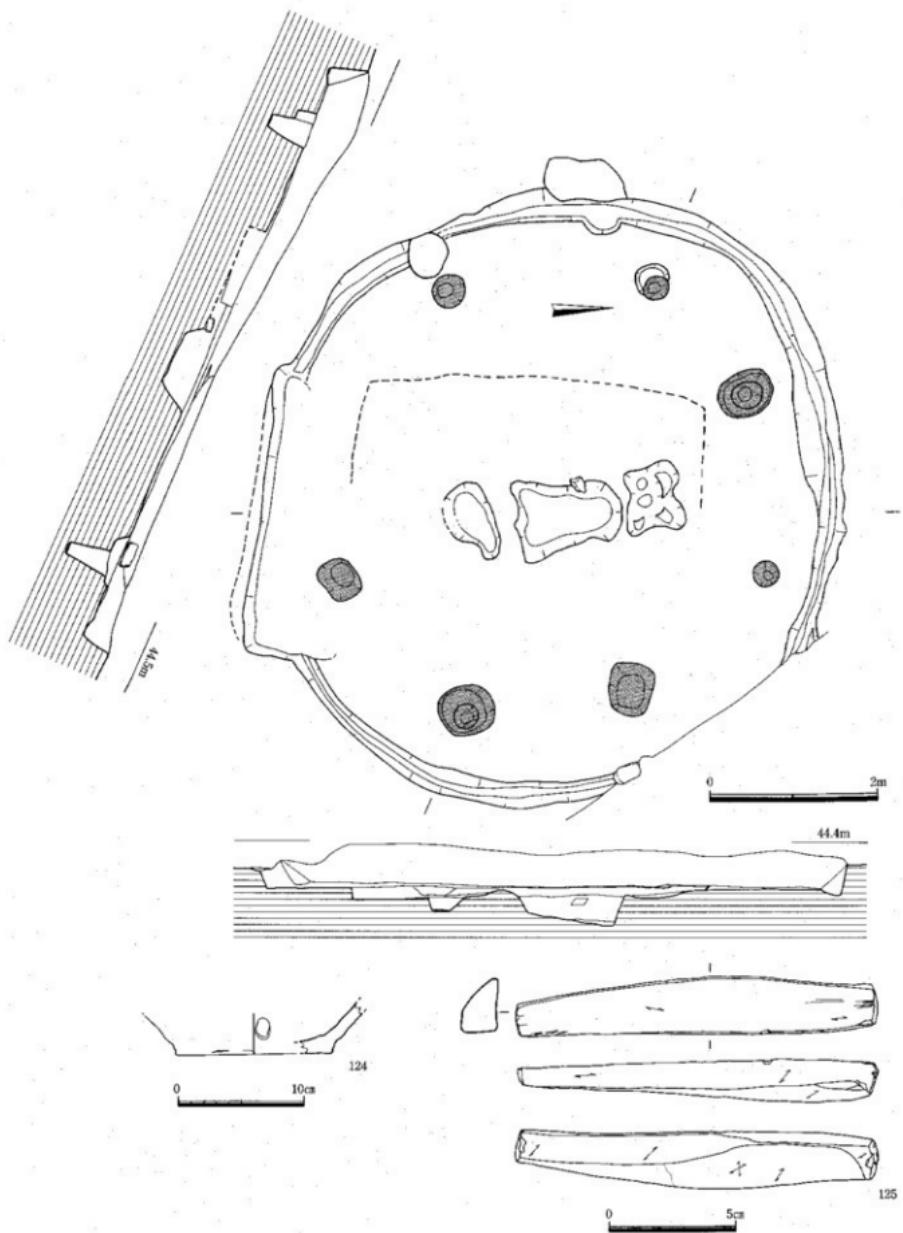


Fig.31 SC030と出土遺物

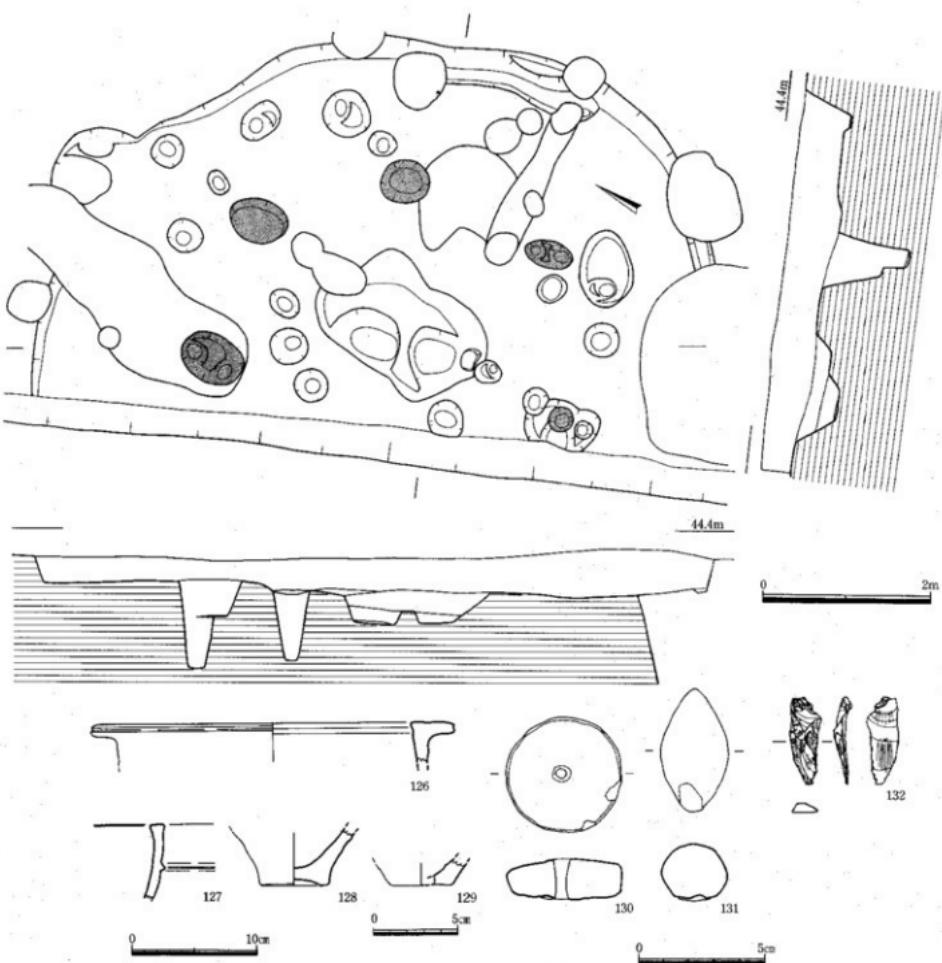


Fig.32 SC031と出土遺物

ており、端面は浅く窪んでいる。内外面ともに刷毛目調整である。胎土は白色粒・金雲母を少量含み、にぶい橙色を呈する。123は手づくね土器で、口径7.8cm、器高4.5cmを測る。赤褐色粒・白色粒を多く含み、にぶい橙色を呈する。内外面に黒斑がある。

124は鉄片で、17gを計る。刀子の可能性もあるが破片のため不明である。

S C 030 (Fig.31, PL.17-5,18-1・2)

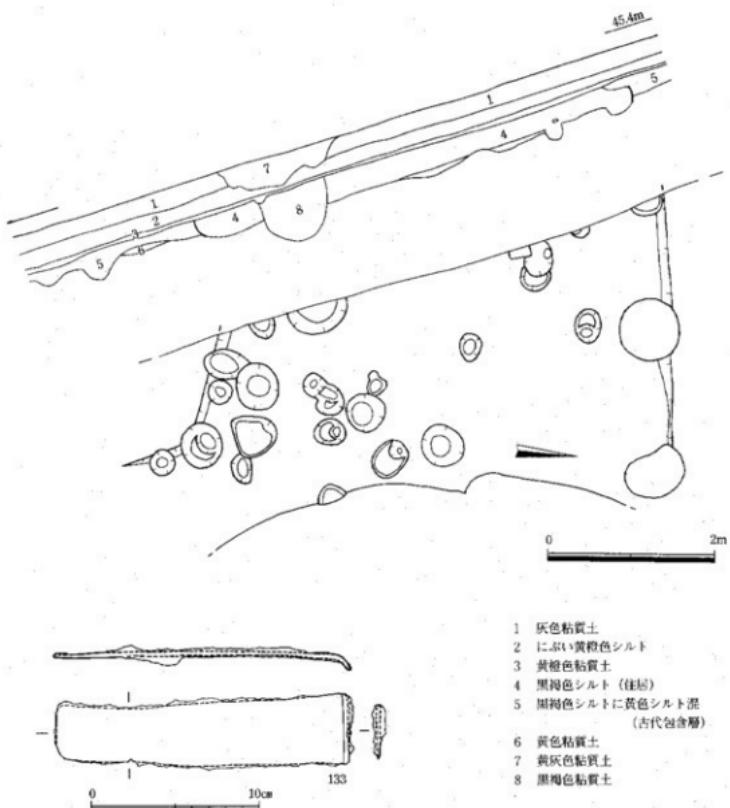


Fig.33 SC036と出土遺物

調査区北側に位置し、一部調査区外に延びている弥生時代の円形竪穴住居跡である。SC027・028・029に切られている。直径7.4m、残存の壁高は西側で45cmを測る。幅20~60cm、深さ3~5cmを測る壁溝があり、全周すると考えられる。住居の中央には 1.24×0.72 m、深さ最大28cmの土坑がある。その周りに3つのピットがある。土坑内には焼土や炭化物はなかった。柱は中央土坑を中心半径1.4mの円を描くように7本配されている。柱穴の直径32~68cm、深さ22~60cmを測り、柱は直立している。柱穴間の直線距離は1.8~2.48mであり、一ヵ所だけ3.6mを測るところがあるが、この部分は出入口にあたるのではないかと考えられる。弥生土器、土師器が小コンテナ1箱、砥石が1点、黒曜石片が72g出土している。東側で内外面に梢円を施した押彫文の土器細片が1点出土している。

出土遺物 (Fig.31, PL.33)

124は壺の底部片で中央土坑から出土している。底径12.4cmを測り、色調は浅黄橙色を呈する。125は手持ちの仕上げ砥石である。全長14.2cm、幅2.25cm、厚さ1.7cmを測る。石材は凝灰岩であり、4面ともよく磨かれている。

押形文土器は細片のため実測していないが、穀粒文と呼ぶべき小粒な橢円押形文で、両面に施文している。比較的古式のものである。

S C031 (Fig.32, PL.18-3)

S C030の南側に位置する弥生時代の円形竪穴住居跡である。西側半分が調査区外に続き、南側は擾乱を受けている。直径は8.2m、残存の壁高は20cmを測る。住居の中央には1.2×2.8m、深さ12cmの土坑がある。土坑の周りには幾つかのビットがあるが、どれが土坑に伴うかは分からなかった。土坑内に焼土や炭化物はなかった。柱は中央の土坑を中心に半径2.12mの円を描くように配されている。柱穴間の直線距離は1.8~2.0m、柱穴の直径36~80cm、深さ34~52cmを測る。南側の壁沿いで、断続的に壁溝らしき幅28~48cm、深さ4~10cmを測る小溝を検出した。遺物は弥生土器、少量の丹塗り土器、土師器が小コンテナ1箱、紡錘車、投弾、黒曜石片40gが出土している。

出土遺物 (Fig.32, PL.34)

126は逆L字状の口縁をもつ甕である。口縁端部に1条の沈線を巡らせている。外面には一部刷毛目調整がみられるが、全面ナデ調整で仕上げている。口径は28.7cmを測る。127は鉢の口縁部片で、口縁下に三角凸帯を巡らせている。赤みを帯びた橙色を呈し、胎土には金雲母を少量含む。128は甕の底部片で底径5.4cmを測る。胎土は白色砂粒を多く含み、外面は橙色、内面は黒色を呈する。129はミニチュア土器の底部片である。底径3.6cmを測り、外面はミガキ、内面は丁寧なナデ調整である。微砂粒を多く含み、にぶい褐色を呈する。130は土製の紡錘車である。径4.6cm、厚さ1.7cmを測る。孔径は0.4~0.6cmで、両側から穿孔している。色調は橙色を呈する。131は投弾で、長さ4.8cmを測る。色調は橙色を呈し、器面はなめらかに仕上げられている。

132は黒曜石製の使用痕ある剥片である。縦長の剥片の側縁を使用している。長さ3.5cm、幅1.2cmを測る。他に内外面に赤色顔料を塗り、外面に暗文を施した広口壺の口縁部片が出土している。

S C036 (Fig.33)

S C015の西側に位置する竪穴住居跡である。S C015で述べたように遺構検出を間違えて、掘りとばしてしまった。わずかに北側と南側に壁の立ち上がりが残る。南側の立ち上がりは途中で折れ曲がっており、あるいはベッド状遺構かもしれない。両立ち上がり間の距離は約4.6mを測る。住居の西側は調査区外に延びるため調査区の土層断面にも壁の立ち上がりが確認できる。住居に伴う土器は分からぬが、東側のS C015西壁近くの最上層で出土した鉄鎌はS C036から出土したと思われる。またS C015で出土した古墳時代の土師器はこの住居に伴うものと考えられる。

出土遺物 (Fig.33, PL.34)

133は鉄製の直刃鎌である。全長17.5cm、背部の厚さは0.2~0.3cmを測る。着装部はわずかに折り返している。銹化のためメタル・木質痕は残っていない。

②掘立柱建物

今回の調査では多数の柱穴を検出したが、建物として復元できたのは3棟である。柱痕跡はほとんど確認できなかった。

S B022 (Fig.34, PL.19-1)

調査区の南側に位置する。建物が調査区外に延びているため全容は明らかではないが現状では2間×3間の側柱建物で、主軸方向をN-6°-Wにとる。梁行は全長520cm、桁行は全長400cmを測る。柱穴はほぼ円形を呈し、径40~70cm、深さ24~34cmを測る。1つのビットから根石が出土している。土師器・弥生土器・須恵器・黒曜石片が出土している。

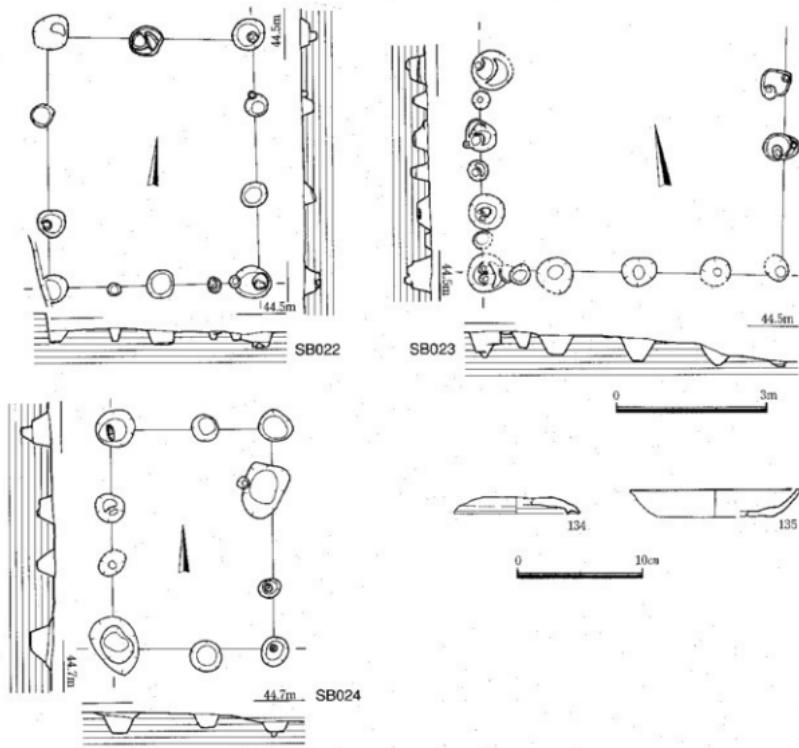


Fig.34 SB022・023・024と出土遺物

出土遺物 (Fig.34)

134は環蓋で口径10.0cmを測る。返りは小さく内傾する。135は土師器環である。口径13.6cm、器高2.2cm、底径9.0cmを測る。にぶい橙色を呈し、胎土は金雲母・白色微砂粒が多く入る。外底部は回転糸切りである。

S B 023 (Fig.34, PL.19-2)

S B 022の北側にあり北側・東側はピットや土坑の切りあいが激しく不明であるが、現状では3間×4間の側柱建物で、主軸方向をN-8°-Wにとる。南側梁行は全長600cm、西側桁行は全長400cmを測る。1つのピットから根石が出土している。柱穴はほぼ円形を呈し、径36~72cm、深さ12~50cmを測る。土師器・弥生土器が出土している。

S B 024 (Fig.34, PL.19-3)

S B 023の北側にあり、2間×3間の側柱建物で、主軸方向をN-1°-Wにとる。梁行は全長440cm、桁行は全長320cmを測る。柱穴はほぼ円形を呈し、径44~90cm、深さ31~58cmを測る。土師器・弥生土器・須恵器が出土している。

S E 007 (Fig.35, PL.20-1)

S C 003の北側に位置する。壁の崩落の危険があったため上から2.6mまでは手で掘り下げたが、底はユンボで掘り下げて確認を行った。井戸掘方の平面プランは円形で、直径は上面が2.6m、深さは約3.1mを測る。素堀りの井戸で、湧水はなかった。自然堆積を呈しており、廃棄の際に埋め戻さなかつたと考えられる。上から1.6mまでは黄色土を基本に橙色土・黒褐色土・黒色粘質土が混ざり細かい堆積をする。その下は黄橙色砂質土、灰白色粗砂と疊による大きな堆積を示す。弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・白磁等が中コンテナ1箱、黒曜石片が6g、楕円錐形鍛冶滓・鉄滓・炉壁が417g出土した。

出土遺物 (Fig.36, PL.34)

136~139は土師器皿である。口径3.7~4.1cm、底径2.4~2.9cm、器高0.43~0.67cmを測る。136はにぶい黄橙色、137~139は浅黄橙色を呈す。137~139は赤褐色粒を胎土に含む。いずれも外底面は回転糸切りをし、136には板状圧痕が残っている。140は土師器環である。口径15.5cm、器高3.1cmを測る。胎土に白色砂粒を少量含み、浅黄橙色を呈する。底部はヘラ切り調整を行っている。141~144は土師器の塊である。144は口径16.0cmを測り、体部中位で屈曲し、口縁に至る。色調はにぶい黄橙色で部分的に黒色を呈している。142は底径5.0cm、143は底径6.8cmを測る。ともに底部は丁寧なナデを行っているが、142には板状圧痕が残っている。142は金雲母を、143は白色砂粒を少量含んでいる。色調は浅黄橙色を呈する。145・146は白磁である。145は玉縁状の口縁を持つものである。青味を帯びた白色の釉が施される。胎土はにぶい橙色でやや粗い。146は内底見込みに浅い沈線を有し、高台脇まで灰白色釉を施すが、一部高台疊付にまでたれている。高台疊付より外底面は露胎である。胎土は灰白色でやや粗い。

S E 016 (Fig.35, PL.20-2)

調査区の中央に位置し、東側半分は調査区外に延びる。S E 007と同様、壁の崩落の危険があったため上から1.8mまでは手で掘り下げたが、それより下はユンボによる掘り下げを行った。井戸掘方の平面形状は円形と思われ、南北2.8mを測る。素堀りの井戸で、湧水はなかった。自然堆積を呈しており、上から1.6mまでは黄色土を基本に褐色土・灰色土・粘質土が混ざり堆積するが、その下はシルト層・砂層となる。立ち割り中に下層を発見したため、底まで下げなかつた。深さ2.8+ α mを測る。遺物は土師器・須恵器・弥生土器が中ビニール1袋、鉄塊系遺物・楕円錐形鍛冶滓・鉄滓が414g出土している。

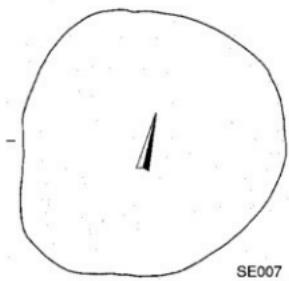
出土遺物 (Fig.36, PL.34)

147は須恵器で高台付きの环である。口径11.3cm、底径7.4cm、器高4.0cmを測る。外側に開く高台を貼付し、丸く立ち上がり、口縁はわずかに外反している。外面は一部自然釉となっている。胎土は径5mm程の白色粒が入っており、精良とはいえない。内外面ともに灰色を呈する。148は土師器の塊である。底径は6.3cmを測り、白黄橙色を呈する。149は黒色土器A類である。内面は丁寧に磨いている。底径は7.0cmを測り、外面はにぶい橙色を呈する。胎土は白色砂粒を少量含む。150は鉄塊系遺物である。メタルは残っていない。25gを量る。

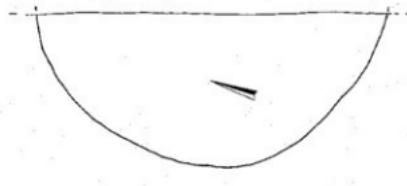
④土坑

S K 006 (Fig.37, PL.20-3)

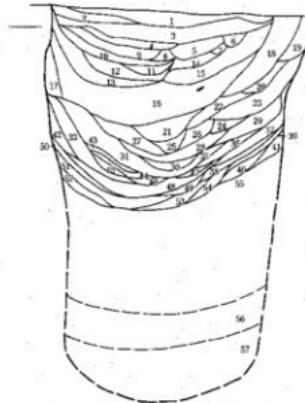
調査区南側で検出した。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ1.8m、幅0.86m、深さは0.24mを測る。底面の2つのピットはS K 006に切られている。覆土は暗茶褐色土で、炭化物・小礫を含む。遺物は土器片が1点出土しているのみである。



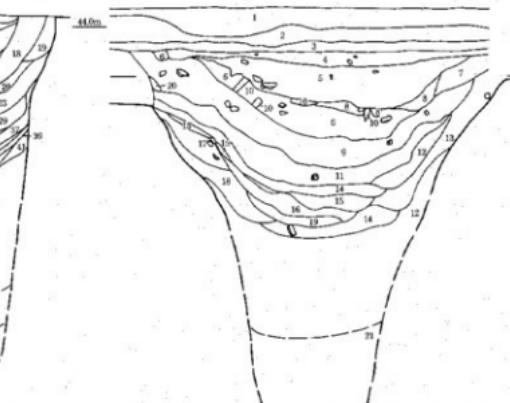
SE007



SE016



- 1 中や灰白色を帯びたにじむ褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黑褐色土に褐色土を多く含む
- 4 黑褐色土に褐色土を、微色點を含む
- 5 明黄褐色土に漂褐色土、褐色土を含む
- 6 にじむ漂褐色土に漂褐色土を含む
- 7 より白い
- 8 オリーフ褐色土に明黄褐色土を含む
- 9 黄褐色土
- 10 オリーフ漂褐色土に漂褐色土を含む
- 11 オリーフ漂褐色土に漂褐色土を含む
- 12 漂褐色土に少く少す漂褐色土を含む
- 13 漂褐色土に少く少す漂褐色土を含む
- 14 13とは同じ
- 15 黑色粘質土
- 16 黑色粘質土に明黄褐色土、漂褐色土を含む
- 17 漂褐色土に黑色土を含む
- 18 黑褐色土に漂褐色土、明黄褐色土を含む
- 19 漂褐色土
- 20 黑褐色土に漂褐色土のブロック状
- 21 黑褐色土に漂褐色土と明黄褐色土のブロック状
- 22 オリーフ風化粘質土に明黄褐色土を含む
- 23 黑褐色粘質土に明黄褐色土を含む
- 24 黑褐色粘質土に明黄褐色土を含む
- 25 黑褐色粘質土と明黄褐色土のブロック状
- 26 黑褐色粘質土に明黄褐色土を含む
- 27 黑褐色粘質土に明黄褐色土、明黄褐色土をごく少含む
- 28 黑褐色土
- 29 黑褐色粘質土に明黄褐色土を含む



- 30 黑褐色粘質土
- 31 明黄褐色土と明黄褐色土と漂褐色土ブロック状
- 32 黑褐色土
- 33 黑褐色土に明黄褐色土を少含む
- 34 黑褐色土に明黄褐色土を多く含む
- 35 黑褐色土にごく少く少す漂褐色土を含む
- 36 明黄褐色土に漂褐色土を含む
- 37 明黄褐色土に漂褐色土を含む
- 38 黑褐色土
- 39 黑褐色土と漂褐色土
- 40 漂褐色土
- 41 明黄褐色土
- 42 黑褐色土
- 43 オリーフ漂褐色土
- 44 黑色粘質土
- 45 黑褐色土に漂褐色土を含む
- 46 黑褐色粘質土に漂褐色土を含む
- 47 明黄褐色土
- 48 黑褐色粘質土に明黄褐色土、明黄褐色土を含む
- 49 黑褐色粘質土
- 50 黑褐色土に明黄褐色土を含む
- 51 黑褐色土に漂褐色土を含む
- 52 黑褐色土に明黄褐色土を含む
- 53 黑褐色土に多く含む
- 54 黑褐色粘質土と漂褐色土を含む
- 55 黑褐色粘質土に漂褐色土を含む
- 56 黑褐色土
- 57 黑褐色土

- 1 黑褐色土
- 2 黑色土
- 3 所有地境界シルト
- 4 漂褐色粘質土と少く少す漂褐色土
- 5 漂褐色粘質土
- 6 にじむ漂褐色土
- 7 喷出褐色土
- 8 にじむ黄褐色土
- 9 にじむ灰褐色土
- 10 黑褐色粘質土
- 11 にじむ黄褐色土
- 12 漂褐色粘質土
- 13 黑褐色粘質土
- 14 所有地境界
- 15 にじむ黄褐色土に漂褐色土を含む
- 16 黑褐色土
- 17 にじむ灰褐色土
- 18 にじむ灰褐色土
- 19 にじむ灰褐色シルト
- 20 黑褐色シルト
- 21 漂褐色シルト

Fig.35 SE007・016

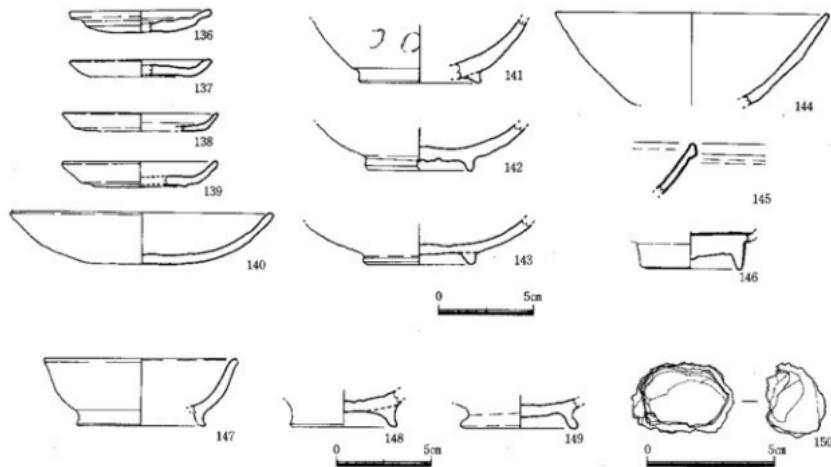


Fig.36 SE007・016出土遺物

S K008 (Fig.37、PL.20-4)

調査区南側で検出した。平面プランは円形に近い楕円形を呈し、長さ1.36m、幅1.04m、深さ8~22cmを測る。床面にピットがあり、径44~50cm、深さ20cmを測る。覆土は暗茶褐色土で、遺物は弥生土器・土師器が小ビニール1袋、黒曜石片2gが出土している。量的には弥生土器の方が多いが明確な時期は分からぬ。

S K009 (Fig.37、PL.20-4)

調査区南側で検出した。平面形は円形に近い楕円形を呈し、長さ1.4m、深さ18~34cmを測る。中央が一段深くなつており、その深さは26cmである。覆土は暗茶褐色土で、遺物は弥生土器・土師器が小ビニール1袋出土している。量が圧倒的に弥生土器の方が多いのでこの頃の時期のものと考えられる。

出土遺物 (Fig.42、PL.35)

166は鉢で、口縁は内湾気味で、端部は丸くおさめている。口径は19.0cm、器高12.0cm、底径7.6cmを測る。底部は平底である。外面下部に一部刷毛目調整が残るが、内面・口縁部はナデ調整である。

S K011 (Fig.37)

調査区南側の西壁付近で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ1.02m、幅0.56mを測る。二段掘りで一段目の深さ14cm、二段目の深さ40cmを測る。覆土は暗茶褐色土で、出土遺物は土師器・須恵器・弥生土器が小ビニール1袋分である。量は土師器の方が多い。黒曜石片が4g出土している。

S K012 (Fig.38、PL.21)

S C017の南側に位置する。東側はこの遺構に伴わないと思われるピット群があるが、切りあい関係は分からなかった。平面プランは長方形を呈し、長さ2.7m、幅2.14mである。深さは西側は16cm、東側は12cmを測るが、床面は西から東へと6cm程徐々に下がっている。遺物は土師器・須恵器・弥生土器が大ビニール1袋、黒曜石片が3g、鉄滓が74g出土している。

出土遺物 (Fig.38、PL.34)

151・152は甕である。151は「く」の字状口縁を呈し、端部付近にヘラで押された痕跡を残す。外側は刷毛目調整をおこなった後、強い横ナデを施している。内面下位は指ナデ、上位はケズリで調整

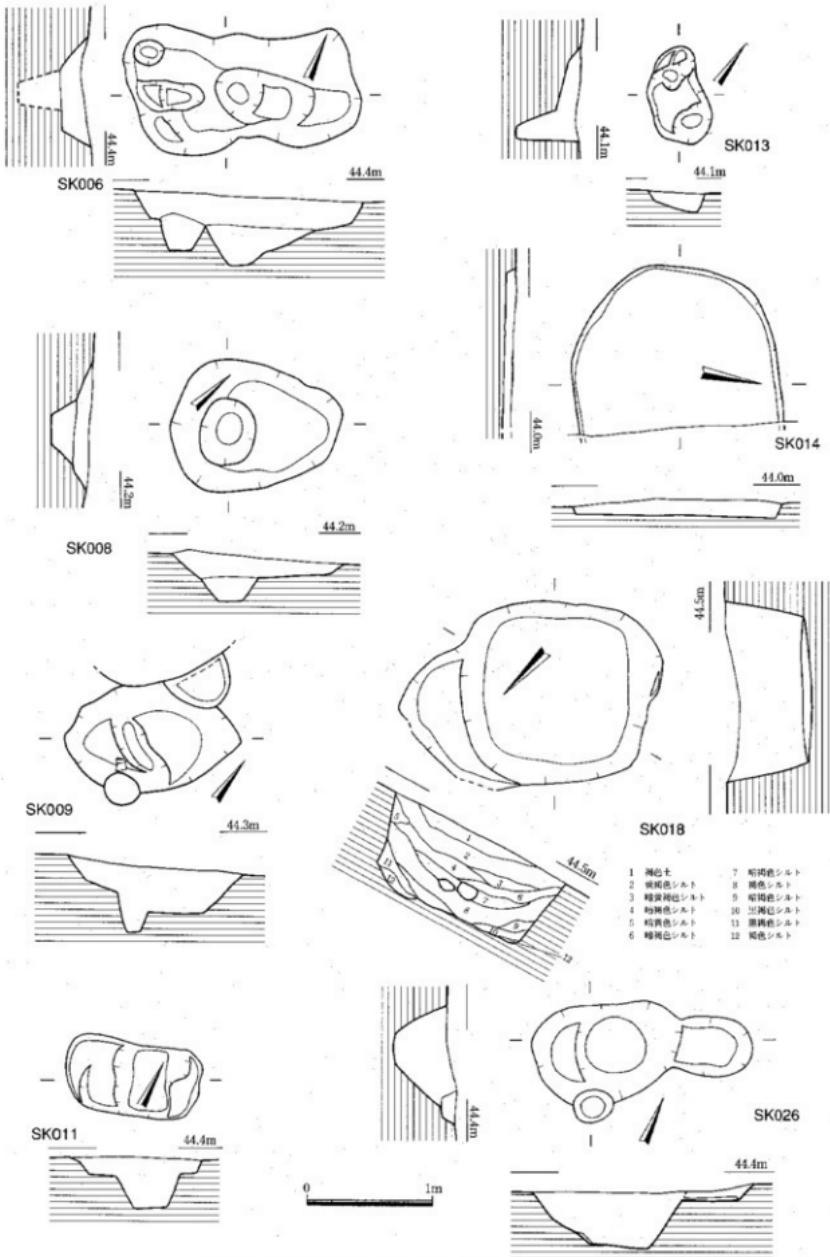


Fig.37 SK006 · 008 · 009 · 011 · 013 · 014 · 018 · 026

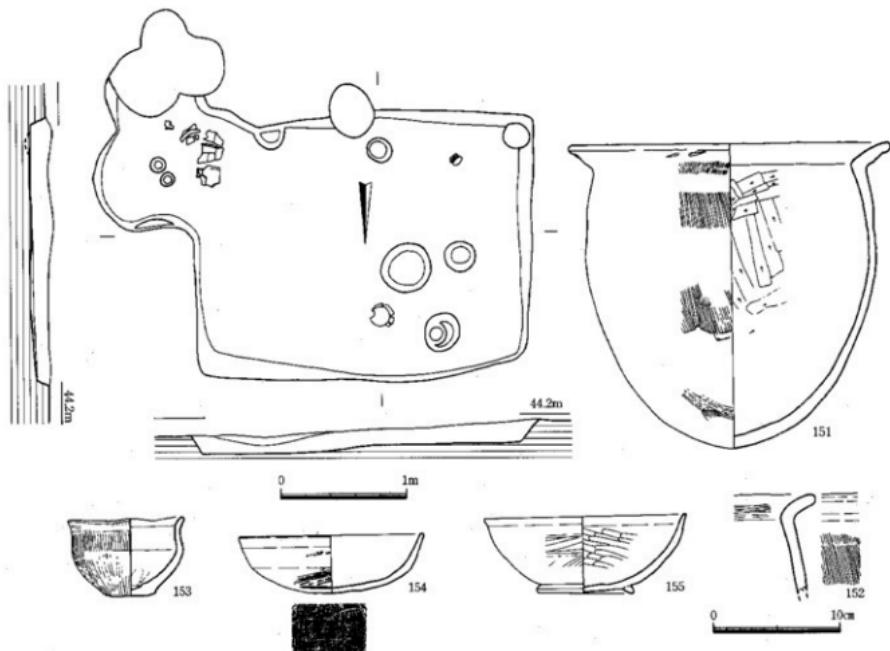


Fig.38 SK012と出土遺物

している。口径25.4cm、器高24.0cmを測る。151は口縁部外面に、152は胴部外面に煤の付着がある。153は小型の鉢である。口縁が一部欠損しているが、ほぼ完形品である。径3.7cmの底部から立ち上がり、胴部中位で大きく内傾し、再び口縁を外傾させている。結果、内面の胴部と口縁にやわらかい稜線をもつ。外面は縦方向の刷毛目調整を行い、部分的に指でナデしている。外面下位は不定方向の指ナデ、上位から口縁にかけては横ナデで調整している。胎土に白色微砂粒をわずかに含み、白橙色を呈する。外面に黒斑がある。154は土師器高台付塊である。高台は欠損しているが、底部に黒く痕跡が残る。口径14.75cm、現器高4.6cmを測る。内外面ともにナデ調整をおこなっている。色調は白橙色を呈する。底部に「井」の字状のヘラ記号がある。155はA類の黒色土器である。口縁はわずかに外反している。外面下位はケズリを、外面上位と内面は丁寧な横方向のミガキを施している。色調は外面は白橙色、内面は黒色を呈する。外面に黒斑がある。口径16.4cm、器高6.0cmを測る。底部に「井」の字状のヘラ記号がある。

S K013 (Fig.37)

調査区南側で検出した。平面プランは梢円形を呈し、長さ70cm、幅44cm、深さ16cmを測る。床面東側に径24cm、深さ32cmのピットを持つ。覆土は暗茶褐色土で、遺物は須恵器・弥生土器片各1点、鉄滓16gが出土している。

S K014 (Fig.37, PL.20-5)

調査区の南側で検出した。東側半分は調査区外に延びている。梢円形を呈すると思われる。南北の長さは1.75mを測る。床面は平坦であり8~13cmと浅い。覆土は暗茶褐色土で、出土遺物は土師器・須恵器・弥生土器が小ビニール1袋分である。

S K018 (Fig.37, PL.20-6)

S C017内で検出した。平面プランは隅丸方形を呈し、一辺が1.44mを測る。底は舟底形を呈し、深

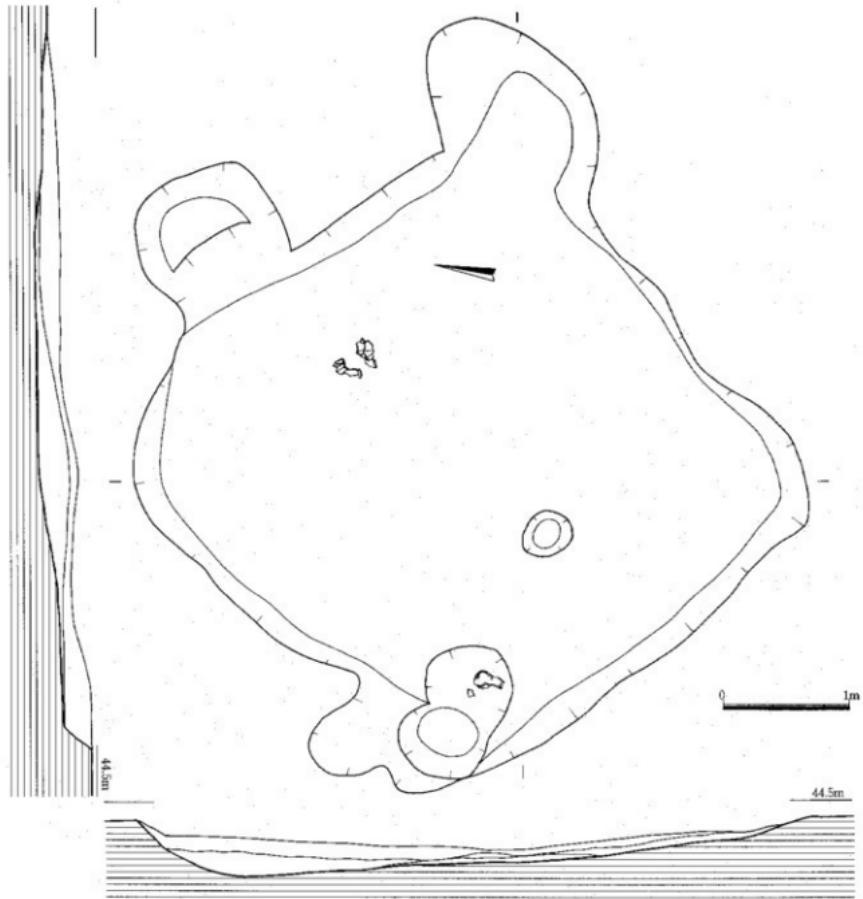


Fig.39 SK019

さ68cmである。遺物は土師器・須恵器・少量の弥生土器が大ビニール1袋、黒曜石片が8g、鉄滓が71g出土した。

出土遺物 (Fig.42、PL.35)

167は須恵器の高環脚部である。筒部は細長で脚は大きく開くと考えられる。胎土に白色砂粒をわずかに含み、外面に黒斑を有する。

S K019 (Fig.39、PL.22)

調査区中央で検出した。平面プランは梢円形を呈し、長さ5.34m、幅3.8m、深さ16~20cmを測る。底はかなり凸凹している。覆土は小礫を含んだ黒色土である。特に中心部分は灰を多く含んでいた。遺物の中に鉄滓・灰をかなり含んでいたため、製鉄関連の遺構と思われる。しかし焼上は見られず、壁も焼けてなかった。廃棄場的性格をもつものであろうか。鉄滓の中には地山の礫をかみこんでいるものもあり、この時期の可能性は十分に考えられる。遺物は大量の土師器・弥生土器が大コンテナ2箱、楕円錐形鉛治滓・鉄滓が369g出土している。

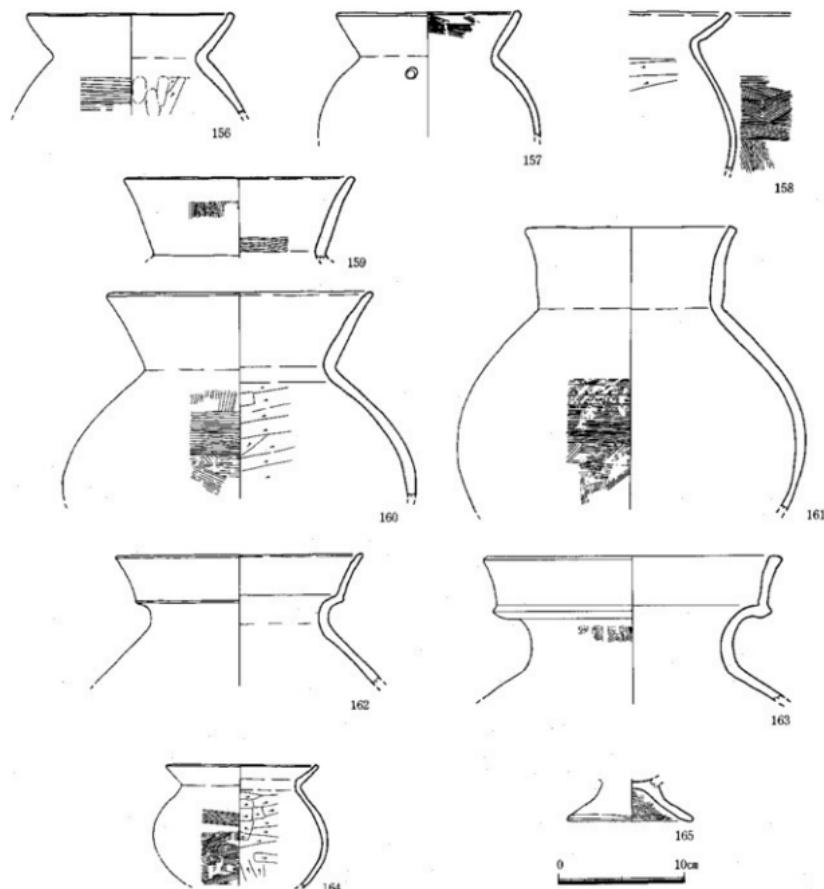


Fig.40 SK019出土遺物

出土遺物 (Fig.40、PL.34・35)

156～158は甕で、口径は156が16.0cm、157が14.4cmである。口縁は内湾気味に外傾し、端部内側をつまみ上げている。156は肩部上半が肉厚である。157の口縁は外傾し、端部は丸くおさめている。すべて口縁部は横ナデ、胴部外面は刷毛目調整、内面はケズリ、部分的にナデを施している。胎土に白色粒を含み、158は赤褐色粒も混じる。156・158が鈍い黄橙色、157が赤褐色を呈する。

159～161は卵形の胴部から口縁が外傾する單口縁壺である。口縁が長く端部付近は強い横ナデを施し内側の段を意識している。端部には面を作り出している。口縁部は159が刷毛目、160・161が横ナデで調整をしている。胴部外面は刷毛目、内面はケズリを施している。白色粒・赤褐色粒を含み、黄橙色を呈する。159・161の内外面には黒斑がみられ、161の外面には赤色顔料の付着がみられる。口

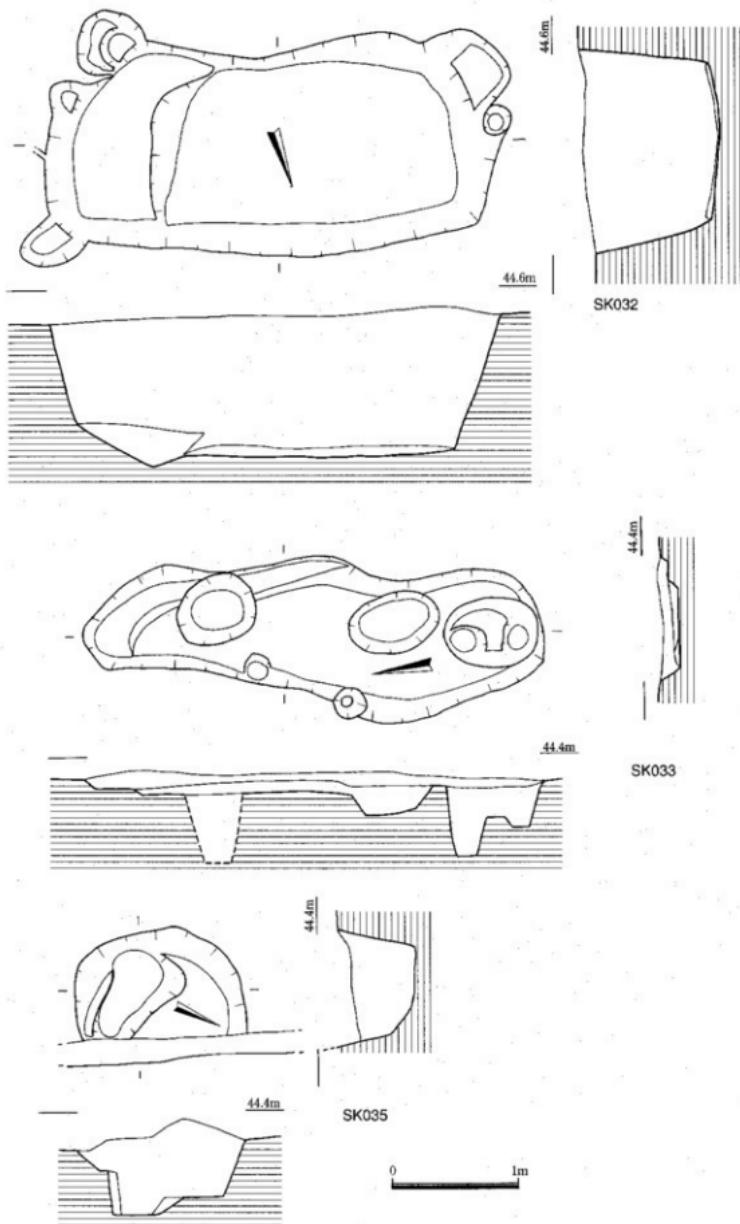


Fig.41 SK032 · 033 · 035

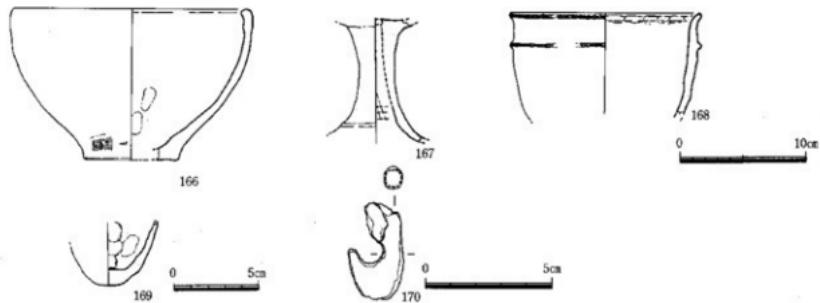


Fig.42 SK009・018・032・035出土遺物

径は159が18.2cm、160が31.0cm。

162・163は壺で、丸く外湾する頸部から口縁部がやや直線的に外傾する。口縁端部は162が面をつくり、163が丸く仕上げている。口径は162が19.6cm、163が23.6cm。163は器壁がかなり厚い。162は胴部内面にわずかにケズリを残すものの丁寧な横ナデで仕上げている。163も同様、胴部外面に継刷毛目を残すが後は横ナデである。白色粒を多く含み、162は赤褐色粒も混じる。浅黄橙色を呈する。164は短頸壺で、口径11.6cmを測る。口縁は外傾し、端部内側をつまみ上げている。口縁は横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面はケズリをしている。白色粒をわずかに含み、明褐色を呈する。165は台付鉢の台である。高さ3.4cm、底径9.9cmを測る。端部は丸く仕上げている。外面は横ナデ、内面は刷毛目で成形している。胎土には赤褐色粒・白色粒をわずかに含み、外面はにぶい橙色、内面は褐灰色を呈する。

椭形鍛冶滓が1点出土している。平面は6.5cm×4.0cmの楕円形を呈し、102gを量る。他は鉄塊系遺物か判断できないような小型の球状を呈した鐵滓(Fig.26-085)が多く出土している。

S K026 (Fig.37)

調査区南側中央付近で検出した。SC005と同様に検出面である黄色シルトでは明確なプランは確認されず、暗茶褐色土で風倒木状の様相を呈していた。掘り下げていくと楕円形の土坑が確認された。覆土は暗茶褐色土である。長さは1.22m、幅は80cmを測る。二段掘りとなっていて一段目までは32cm、二段目までは44cmである。出土遺物は土師器が小ビニール1袋出土している。

S K032 (Fig.41, PL.23-1)

調査区北側に位置し、SC027・SC028・SC029を切っている長方形プランの土坑である。長さ3.56m、幅1.62m、底はわずかに舟底形を呈し深さは1.1mを測る。上から40cmは黒色粘質土に礫が多く入っていたが、下に行くほど礫は少なくなり、粘質土からシルトに変わっていく。遺物は土師器と少量の弥生土器が大ビニール1袋、黒曜石片が14g、鉄製の釣り針が1点出土している。遺構の性格・時期ともによくわからなかった。

出土遺物 (Fig.42, PL.35)

169はミニチュア土器である。外面は風化のため調整は分からぬが、内面は指オサエ・ナデで仕上げている。胎土には白色砂粒を多く含み、橙色を呈する。

170は鉄製の釣り針である。上方は欠損している。断面は方形に近い円形を呈している。重量は7gでメタルは残っていない。

S K033 (Fig.41, PL.23-2)

調査区南側でSC031を切った状態で検出した。細長い楕円形を呈し、長さ3.65m、幅0.78~1.14m

を測る。深さは4~13cmであり、底は凸凹している。SK019と同様、覆土は小礫を含んだ黒色土で、炭をかなり含んでいた。しかし焼土は見られず、壁も焼けていなかった。遺物は弥生土器・土師器が小ビニール1袋出土したが、いずれも小片で時期は不明である。黒曜石片が5g、鉄滓（長さ5.5cmを測る棒状の鉄滓）が35g出土している。

SK035 (Fig.41, PL.23-3・4)

調査区の北側に位置し、東側は調査区外に延びる。平面プランは隅丸方形に近いと考えられる。南北幅は1.32mを測る。二段掘りとなっていて、一段目の南側は深さ24cm、北側は44cm、二段目は60cmである。底は砂層となっており、凸凹である。覆土は暗茶褐色土である。遺物は弥生土器・土師器が中ビニール1袋出土している。底から10cm程浮いた状況で弥生前期末の甕が出土している。遺構はこの時期のものと思われる。後述する北側の包含層と同じ時期の遺構はこの土坑1基のみである。黒曜石片が6g出土している。

出土遺物 (Fig.42)

168は如意状口縁をもつ甕の口縁部である。口径は15.2cmを測る。口縁と口縁下に2条の刻目凸帯が巡る。内面と口縁は横ナデ、外面下位は縦ナデで調整している。胎土は金雲母・白色微砂粒をわずかに含み、にぶい橙色を呈する。

⑤溝

SD034 (Fig.17)

調査区の北側に位置し、SC031・SK035を切り調査区外に延びている。現存長8.9m、幅50~60cm、深さ3~6cmと浅い。覆土は黒色土でやわらかい。

⑥包含層

弥生前期末～中期初頭と古代の2枚の包含層が確認された。

1 弥生時代の包含層

調査区の北側に谷があり、谷にかけての傾斜は調査区内から始まっている。北から8mのところから傾き始め、包含層もその地点から始まる。厚さは南側から北側にかけて厚くなってしまっており、調査区内では最大40cmを測る。出土した土器は主に弥生前期末～中期初頭のものである。

出土遺物 (Fig.43・44, PL.35・36)

171~191は甕である。171~176の口縁は如意状を呈する。176を除き口縁端部は板ナデをしており、平坦面を呈する。176は丸く仕上げている。173の口縁部下端には強く指で押された痕がある。175は口唇部下端に刻目を施している。171・175の外面は刷毛目調整がみられるが、他は丁寧なナデで仕上げている。171・175・176の口縁部内面は横方向の刷毛目、他は横方向の板ナデをしている。171はにぶい黄橙色、176は黒色、他はにぶい橙色を呈する。171・173・174の外面には煤の付着がみられる。177~179の口縁は断面三角形を呈する。調整はななめ板ナデをしたあと丁寧な横ナデをしている。胎土は金雲母・赤褐色粒・白色砂粒を多く含む。178・179の口縁下には1条の三角凸帯がめぐる。179の口縁部三角凸帯の刻目の有無は剥落しているため不明であるが、口縁下の凸帯には刻みを施している。177の外面には煤の付着がある。180~184の口縁は未発達な逆L字状を呈する。181は口縁下に三角凸帯を、182・183は刻目凸帯を1条めぐらせている。182・183は口縁にも刻目を施している。180の外面は丁寧なナデで、他は縦方向の刷毛目調整で仕上げている。口縁部内面は181に横方向の刷毛目が残るが、全て丁寧なナデである。いずれも白色砂粒を多く含み、184以外は金雲母も含んでいる。

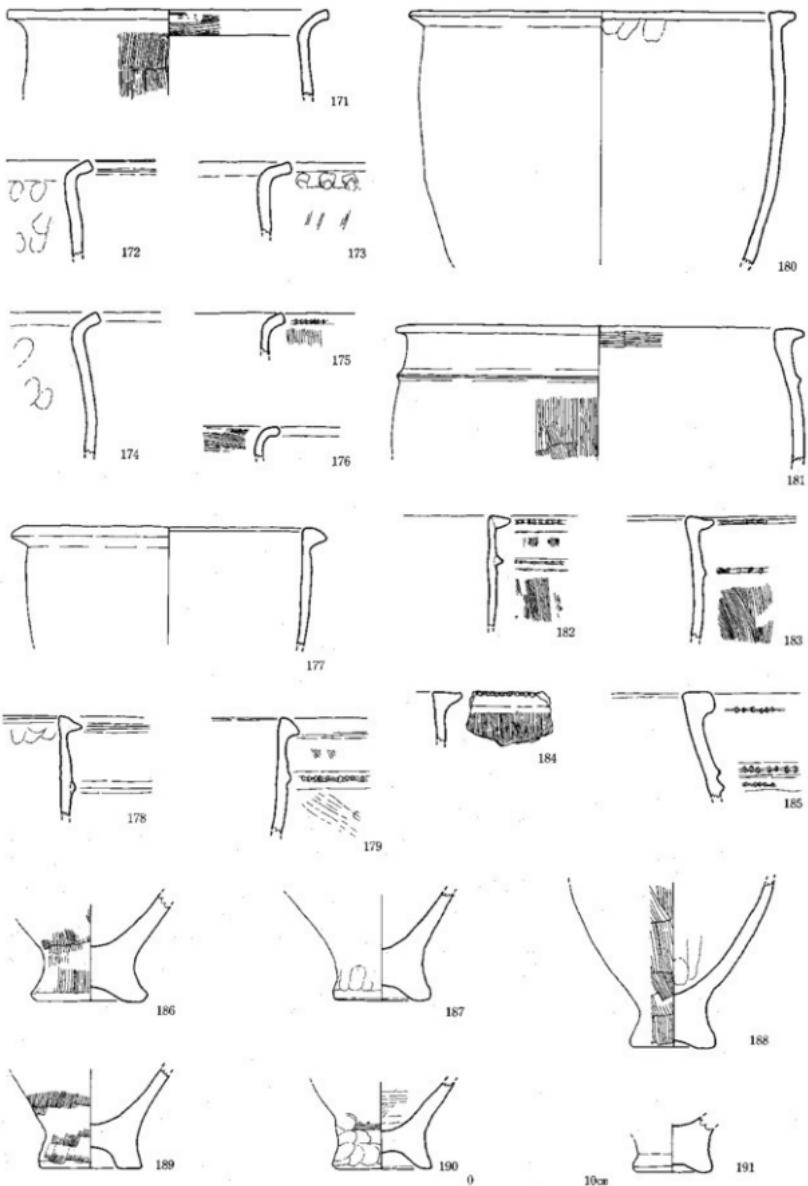


Fig.43 弥生時代包含層出土遺物 1

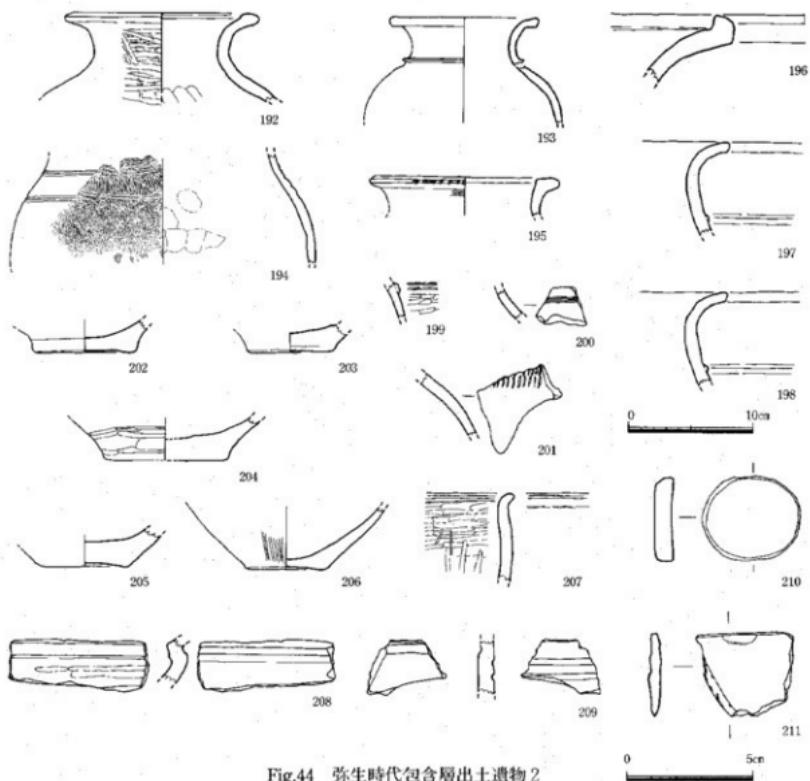


Fig.44 弥生時代包含層出土遺物2

180の外面は二次焼成のため剥落している。181の外面には煤の付着がみられる。185は口縁の上面を肥厚させ平坦面を作る。口縁下に2条の刻目凸帯をめぐらせている。口縁部の上端・下端の2カ所にも刻目を施している。白色砂粒を多く含み、外面は風化により剥落している。にぶい橙色を呈する。口縁部上面には黒斑がある。186～191は底部片すべて上げ底である。186～188は厚めである。外面は刷毛目調整、内面はナデ調整をしている。186・188・191は金雲母を含んでいる。色調は黄橙色を呈している。186は内面にこげの付着がある。

192～206は壺である。192・193は口縁が外反する壺である。192は口縁内面に段をもち、口径15.1cmを測る。外面は粗いミガキをし、内面口縁部・頸部は横ナデ、胴部はヘラケズリをしている。金雲母・赤褐色粒・白色砂粒を含み、外面は灰赤色、内面はにぶい橙色を呈する。193は頸部と胴部の間に三角凸帯を作り、口縁端部上方には沈線風の文様がある。口径は10.4cmを測る。外面は粗い横ミガキをし、内面は横ナデをしている。白色砂粒を多く含み、外面は赤褐色、内面は橙色を呈する。194は胴部片で、外面は粗い横ミガキ、内面は横ナデをしている。肩部には貝殻腹縁で沈線・波状文を施している。胎土には赤褐色粒を少量含み、外面は赤褐色、内面は橙色を呈する。195は口縁がわずかに外反し、口径14.2cmを測る。端部には刻目を施す。全面横ナデで仕上げている。196は口縁端部が跳ねる広口壺である。胎土には赤褐色粒を多く含み、外面は灰黒色、内面は橙色を呈する。197は口

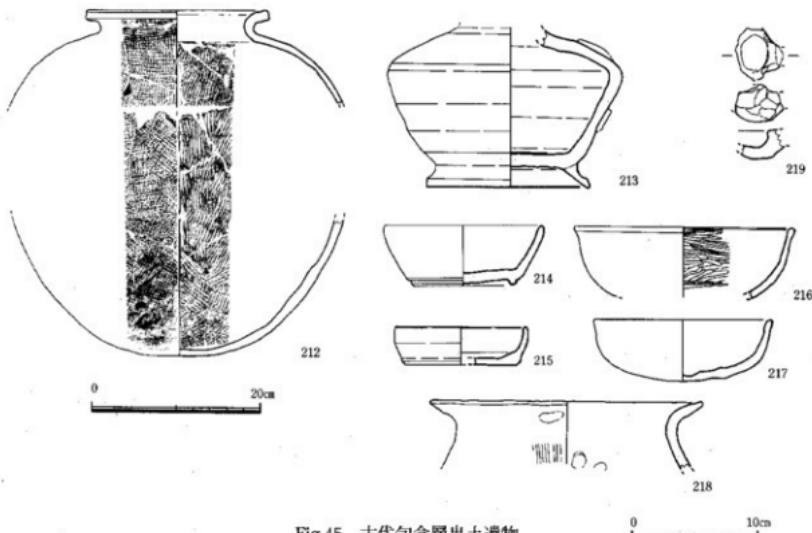


Fig.45 古代包含層出土遺物

縁が緩やかに外反する。口縁部は横ナデ、他は縦ナデで仕上げている。金雲母を多く含み、外面は褐灰色、内面は黒色を呈する。198は肩部に三角凸帯を有する。角閃石・白色砂粒を含み、浅黄橙色を呈する。199～201はいずれも胴部片で、199は「コ」の字状の1条の凸帯を巡らせている。外面は粗いミガキ、内面は横ナデをしている。色調は褐色を呈する。200は沈線を2条巡らせている。赤褐色粒を含み、にぶい黄橙色を呈する。201は貝殻腹縁で2条の波状文を施している。202～206は底部片である。204は円盤貼付状の平底で、202・203は円盤貼付状で上げ底気味である。204の外面は粗いミガキを施し、206の外面に刷毛目調整が残るが、他はナデ調整である。いずれも白色砂粒を含み、203・206は金雲母・赤褐色粒も含む。色調は202が灰黄褐色、204が灰褐色、他が黄橙色である。

207は鉢である。口縁は直立気味に立ち、端部が外反する。端部中央に浅い沈線が入る。内外面ともに、粗いミガキで仕上げている。白色砂粒を多く含み、黒色を呈する。

208・209は縄文晩期の精製土器である。208は胴部外面の屈曲部上に沈線を施すのを特徴とする浅鉢である。209は外面に2条、内面に1条の沈線をもち、口縁付近の破片と思われる。もう少し内傾する可能性がある。

210は土器片を利用した円盤形土製品である。周縁部を丹念に打ち欠き成形している。径3.3～3.8cm、厚さ0.7cmを測る。内外面ともナデ調整である。外面は黒色、内面は橙色を呈する。

211は半月形の石包丁である。砂岩製で、弧に両刃を作る。刃こぼれをしている。

2 古代の包含層

古代の包含層は床土の直下、上面の遺構面である黄色シルトの上に堆積していた。ほぼ調査区の全面にひろがっており、水平に堆積している。埋土は黒褐色シルトであり、部分的に粘質をおびていて、厚さ20～40cmで北にいくほどわずかに厚くなっている。遺構検出時、この層を下げている途中で古墳時代の竪穴住居跡のラインを確認していることやこの黒褐色シルトの上層部に土器が多くみられたことから、さらに2つに分離できるものと考えられる。

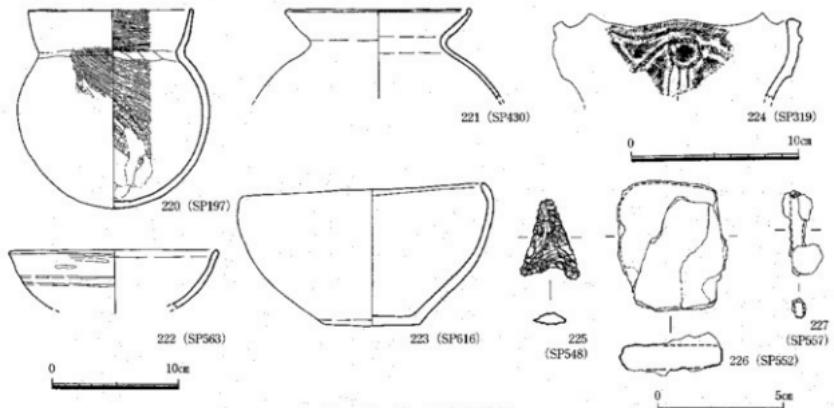


Fig.46 ピット出土遺物

出土遺物 (Fig.45、PL.36)

212は須恵質の壺である。口径は22.2cmを測る。外面には格子目印きを、内面には横ナデを施している。また口縁両面に黒色顔料を塗布している。213は須恵器の高台付長頸壺である。頸部分は欠損している。胴部下半はケズリ、上半は回転ナデ調整である。高台は外側に長く張り出している。214・215は瓦器塊である。214は高台付の瓦器塊である。口径12.6cm、器高4.7cm、底径8.2cmを測る。回転ナデ調整で、灰色を呈する。215は口縁が内湾気味に直立にたつ。口径10.4cm、器高3.0cm、底径8.8cmを測る。回転ナデ調整である。外面は橙色で部分的に褐色を呈し、内面はにぶい黄橙色を呈する。216はB類の黒色土器である。口縁部がわずかに外反する。外面下位にはケズリが残るが、外面上位と内面は丁寧な横方向のミガキを施している。色調は外面下位は白橙色、外面上位と内面は黒色を呈する。口径17.4cmを測る。217は土師器の坏である。口縁部がわずかに外傾する。風化がひどく調整は不明である。口径14.0cm、器高4.9cmを測る。外面は明赤褐色、外面は橙色を呈する。218は土師器の壺である。胎土は白色砂粒を多く含む。外面は粗い刷毛目、口縁部は横ナデ、胴部内面は綫方向のナデをしている。口径は21.4cmを測る。219は手づくねの小型約と思われる。約部分のみの出土である。

⑦ピット出土遺物

今回の調査区では1000を越すピットが検出されているが、それらのうち遺物の検出されたピットについてS Pの符号を付して番号をつけた。(欠番がかかなりある。) それらのうち大半は掘立柱建物の柱穴であると思われるが、建物の柱穴として拾い挙げたのは3軒分にすぎない。ピット出土遺物のほとんどは小破片が多いが、中には完形品も含まれている。この項では、柱穴として拾い挙げきれなかつたピットの遺物について述べる。

出土遺物 (Fig.46、PL.36)

220はS P 197出土の完形の小型壺である。口径は内湾気味に外傾する。口径13.0cm、器高15.6cmを測る。調整は口縁外面がナデ、内面は横・斜の刷毛目、胴部外面上半が斜方向の刷毛目、下半が粗いケズリ、内面が斜方向の刷毛目である。白色砂粒を多く含み、褐色を呈する。底部外面に黒斑がある。

221はS P 430出土の壺の口縁部である。口径は外傾し、端部内側をつまみ上げている。口径は14.8

cmを測る。口縁部外面には煤の付着がみられる。胎土には少量の白色粒と赤褐色粒を含む。浅黄橙色を呈する。

222はS P563出土のB類黒色土器である。口縁がわずかに外湾している。口径16.5cmを測る。内外面に丁寧な横方向のミガキを施している。

223はS P616出土の鉢である。口縁は内傾し、口径17.6cm、器高10.6cm、底径7.6cmを測る。調整は胴部内面が縦方向のナデを、口縁付近が横方向のナデを、外面は風化のため不明である。赤褐色粒・角閃石・白色砂粒を多く含み、白橙色を呈する。口縁部に黒斑がある。

224はS P319出土の繩文土器である。波状口縁で、口径14.7cmを測る。地文に幅1mmの繩文を持つが、多くの部分がナデによって消されている。凸帯で曲線と直線を表現している。凸帯には部分的に刻目を施している。

225はS P548出土の石鎌である。黒曜石製の打製石鎌で、刃部には細かな鋸歯状の剥離を行っている。断面はやや厚みのあるレンズ状を呈する。

226はS P552出土の鉄製品である。長さ5.2cm、幅4.0cm、厚さ1.0cmを測り、板状を呈する。重量は49gである。

227はS P557出土の鉄鎌の茎部分である。断面は方形を呈している。

(4) 下層の概要

下層文化層は調査当初の予定にないもので、下層文化層発見時にすでに、報告書に全容を掲載することが不可能であることが予想されていたが、原因者と協議し報告書の繰り延べを依頼したものの、当調査の整理・報告の予算措置がすでに終わっていたため、報告書の延期は不可能であった。現段階では出土遺物の保存処理もほとんど行ってなく、接合・復元作業もほとんど進んでいない。従って、本稿では検出した遺構と出土遺物の概要報告のみしか行うことができない。大変遺憾ではあるが、いずれ何らかの方法で、再度の報告を行いたいと考えている。

1 下層調査の経緯

下層包含層を発見したのは、S E016をバックフォーで断ち割った時である。調査はすでに予定の2/3を終了し、打って返しを目前にした時である。調査予定地区の中央で検出し、そこから南へ向けて層を追いかけた。上層遺構面から約1mという深さがあり、掘削土量の多さのため、区全体を掘削することができず、結果的には、下層全体を5区に分けて掘らざるを得なかった。

調査は、最初にこの層を確認した部分を中心に、2mおきに西から東にA~F、南から北に1~3のグリッドを設定した。その後、南にグリッドを広げて△1、

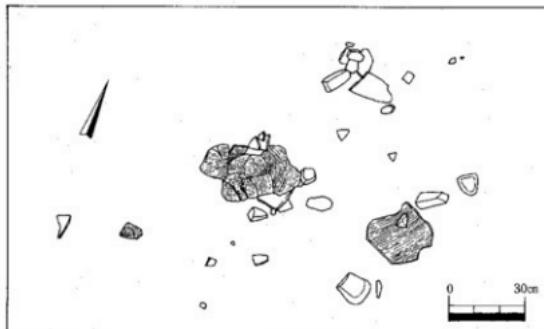


Fig.47 下層撚糸文土器出土状況

△2...とし、調査区南端近くではAの西側に乙のラインを設定した。一方、上層2区の調査後、北へ調査区を広げていった。5区に分けた調査区毎に、包含層の上面で遺構検出を行った後、遺物を残しながら掘り下げ、ドットを落とした。包含層掘り下げ後、再度遺構検出を行い、土坑やピットを検出した。

遺物包含層はほぼ上層の1区の範囲内（調査区南端からS C015付近まで）で検出した。包含層は基本的には1層で、黒色～黒褐色の砂質土層である。ただし北と南の両端部は包含層がシルトや砂質土などの薄い互層で構成されており、明らかに流れ来た層である。その互層部分も次第に薄くなり、消滅する。調査区南端近くでは、包含層が薄くなった部分から自然礫の堆積が見られ、次第に落ちていっている。このまま谷に移行するものと考えられる。北側はほぼ上層の1区に対応する範囲内まで包含層があった。その北側はシルトや砂の互層で、無遺物層である。

遺物包含層の下は白色～黄白色の細砂であるが、包含層南端部付近では赤味を帯びた粘土混じりの砂であった。この部分は、前述の互層部分に相当し、遺物は出土するものの、人工的な遺構は確認できなかった。

出土遺物は土器と石器で、遺物が集中する区域やほとんどない部分もあるが、ほぼ包含層全面に認められた。中にはB 3区付近のようにかなり大型の破片がまとまっている部分もある。出土遺物の総点数は4000点を越える。

2 遺物の出土状況 (Fig.47)

遺物はほぼ包含層が遺存している部分全体に広がっている。その中でも包含層の範囲の中心部や北側のSK102からSX 101にかけての地区に大型の破片が多く、遺物の出土量も多い。特にSK102付近では半個体分の燃糸文土器が2ヶ所でつぶれた状態で出土した。また細かく見れば、遺物の分布にはいくつかの集中区が認められる。現在、遺物の接合を充分行っていないため、これらの分析はできていない。

3 検出遺構

検出した遺構は、石組炉2基、集石遺構1基、土坑13基とピットである。石組炉の石は包含層掘り下げ中に検出したが、その他は包含層掘り下げ後に検出した。遺構の覆土はほとんどが包含層に近い色で、黒褐色または薄い黒褐色系統の砂質土である。なお遺構についても十分な整理ができていないいた

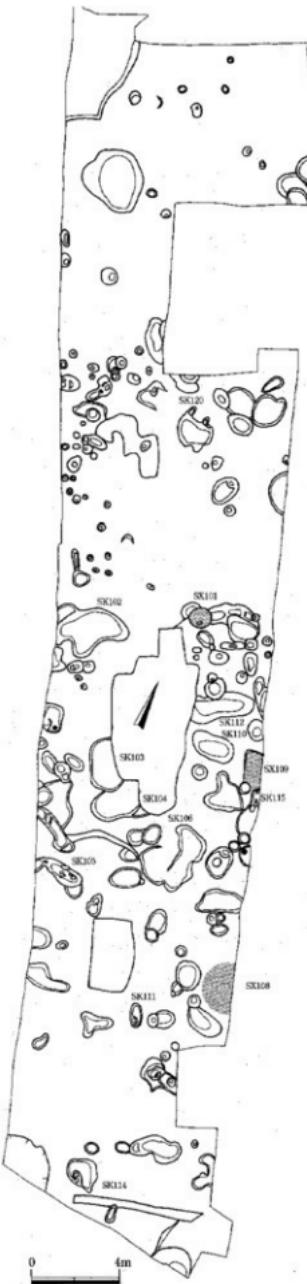


Fig.48 下層遺構配置図

め、ここでは発掘段階で番号を付した遺構のみ取り上げておくが、番号を付した内、調査区南端部のSK116とSK117・SK118は遺物は出土したもの、自然の凹み・落ち込みと考えられる。

① 石組炉

S X 1 0 1 (Fig.49, PL.25)

調査区中央付近で、包含層掘り下げ中に上部の石を検出した。炉を構成していた石の多くは動かされていた。一見集石のような状況を呈しているが、上面の石を取り除くと、全体の約半分ほど、炉が本来使われていた時の状態を示していた。まず長さ20cm、厚さ8cmほどの円礫を底石としておき、その周囲を10cm未満の小石で固め、さらにその外から石を立てている。炉体の石は焼けているものが多い。炉体の上にあった石は、炉の炉体の残り半分や、炉を廃棄したときに投棄した石と考えられる。炉の下部には長さ1.1m、幅0.8m、深さ25cmの掘り込みがある。

柏原F遺跡や原遺跡などの石組炉を見ると、炉体の石はほぼ掘り込みの壁に沿って造られており、この掘り込みはそれに比して大き過ぎることと、炉体の石が床面から15cm以上浮いているため、この炉に伴う掘り込みは掘り過ぎていると考えざるを得ない。しかしこの大きな掘り込みには、床面まで炭化物が見られ、床面の一部に焼土らしきものがあることから、この炉を構築する以前に、大きな掘り込みを伴った底石をもたない炉を造り、その炉の廃棄後にSX101の炉を構築したのではないかと考えることができる。

炉の内部からは遺物はほとんど出土しなかったが、炉の周辺から少量の燃糸文土器片が出土した。

S X 1 0 9 (Fig.49, PL.25)

調査区や南側の東壁付近で検出した。包含層掘り下げ中に上部の石を検出した。この炉も一見集石の様相を呈しているが、上の石を取り除くと、下部に炉体の一部が遺存していた。炉の底には長さ約30cm、厚さ10cmの扁平な石を置き、さらにその横に中小の石をやや高めに据え、徐々に高さを加えて炉を造っている。炉体の南半は壊されている。炉体に使った石は花崗岩の角礫・円礫がほとんどで、焼けた痕跡と思われる赤変したものが多い。

掘り込みは長さ約1m、現状の幅約70cmで、炉を復元した大きさに相当する。炉体の底石はこの掘り込みに密着して置かれている。炉の北側は石がかなり浮いているが、掘り過ぎの可能性が高い。なお、この掘り込みの外の掘り込みはこの炉に伴うものではない。炉の内部と周辺からはごく少量の土器片が出土しただけである。

② 集石遺構

S X 1 0 8 (Fig.49, PL.26)

調査区南端近くで検出した。石はほぼ地山にのった状態で、掘り込みはない。長さ10~30cmほどの花崗岩の円礫・角礫約100点を、長さ1.5m、幅1.3mの範囲に平面的に広げた状態で、石の重なりは少ない。石には焼けた痕跡や、人工的に手を加えた様相は認められなかった。焼土・炭化物もなかった。周辺からは土器片や石器が少量出土した。

③ 土坑

S K 1 0 2 (Fig.50)

調査区中央西壁近くで検出した。長さ3.12m、幅1.45mの長楕円形の平面プランに、長さ約1m、幅約80cmの半円形の突出部を持つ。深さ20cmを測る。2基の切り合の可能性もあるが、床面の高さは変わらない。床面がほぼ平坦なことから崩れた住居跡の可能性も考えたが、床面や遺構の周囲に柱穴がない。覆土はかなり薄い黒褐色の砂質土である。覆土から石鉢3点のほか、土器片や黒曜石など50点あまりが出土したが、床面密着のものは少ない。

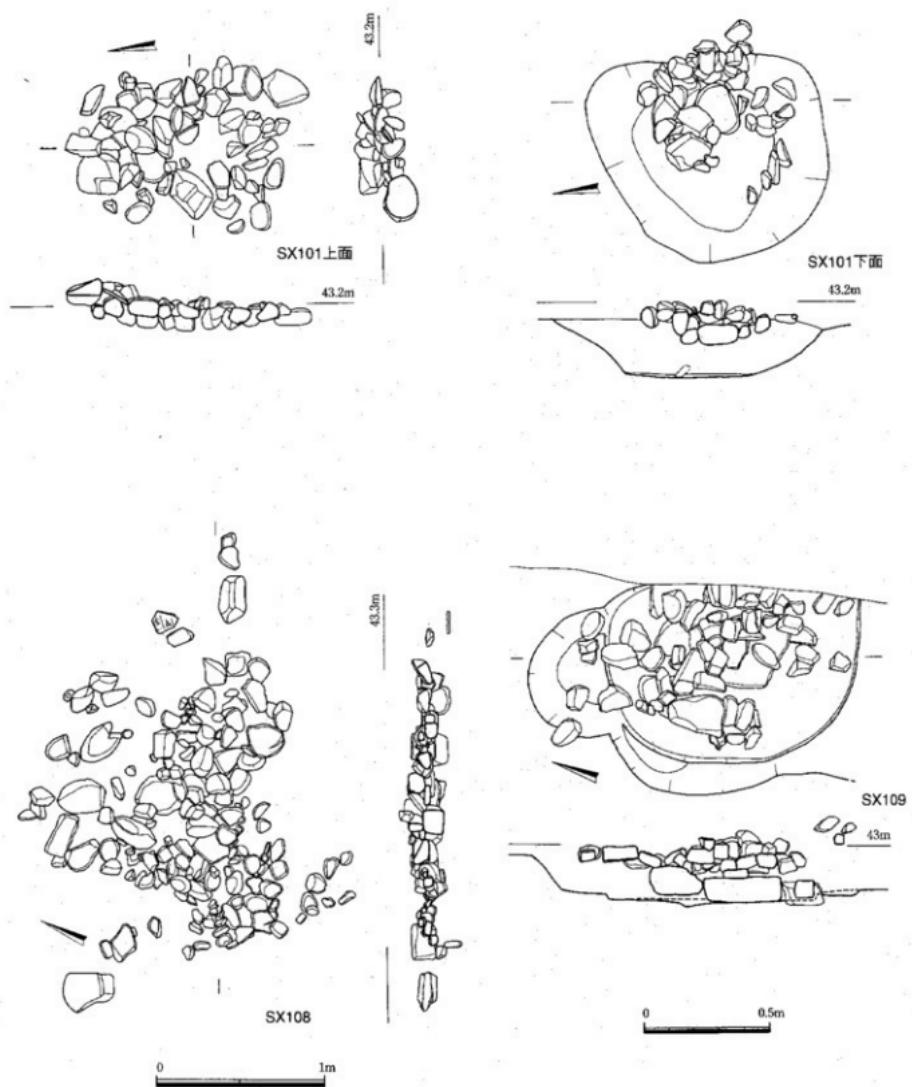


Fig.49 下層の石組炉と集石遺構

SK103 (Fig.50)

上面のSE007西側で検出した。東側をSE007の半裁の際に掘った穴で壊している。平面形は長楕円形を呈している。長さ2.33m、幅約1.55m、深さ10cmを測る。床面は中央がやや下がるもの、ほぼ平坦である。遺物は数点出土しただけである。

SK104 (Fig.50)

上面のSE007南側で検出した。北側をSE007の半裁の際に掘った穴で壊している。平面形は不整形もしくは不整方形を呈している。長さ1.73m、遺存部分の幅1.51mを測る。断面形は逆台形で、深さ22cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土に大形の土器片1点と他に数点の遺物が出土した。

SK105 (Fig.50, PL.27)

A△3区から△4区にかけて検出した。2基の細長い土坑が繋がっているようであるが、切り合はわからず、西側からは遺物が出土しなかったため、東側の土坑に番号を付した。平面形は長楕円形で、長さ1.75m、幅0.73mを測る。断面形は丸みを帯びた逆台形を呈する。深さ20cmを測り、床面は中央部分がやや深い。中央付近に角礫4点があったが、いずれも床面からは浮いている。大形の土器片1点のほか、土器や剥片が約20点出土した。

SK106 (Fig.50, PL.27)

C△3区で検出した。平面形は卵形を呈し、長さ1.02m、幅0.81mを測る。断面形は逆台形に近く、深さ11cmを測る。遺物はほとんど出土していない。

SK107

SK106のすぐ南側で検出した。東側半分は検出しきれなかった。長さ1.75m、現存幅1m、深さ10cmを測る。

SK110 (Fig.51)

E△1区付近で検出した。平面形は北西隅がやや張り出した長楕円形を呈する。長さ2m、幅1.03mを測る。断面形はやや丸みを帯びた逆台形を呈し、深さ31cmを測る。床面は東側がやや深くなっている。西側の張り出し部分に大小の礫6個がまとまっているが、焼けた痕跡等は認められなかった。遺構の上から数点の遺物が出土している。

SK111 (Fig.51)

C△7区で検出した。平面形は長楕円形を呈し、長さ1.06m、幅51cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ12cmを測る。床面は南にむかってわずかに傾斜している。床面南側に径25cm、深さ7cmの浅いピットがある。さらにその南側に長さ20cmほどの縁があるが、これは床面にめり込んでおり、もともとここにあった石ではないかと考えられる。

SK112 (Fig.51)

E△1区で検出した。西側をSE007の断ち割り穴によって壊され、北側の一部を縄文包含層の上の層から掘り込まれている風倒木状遺構によって切られている。平面形は出入りのある長楕円形を呈し、現存長2.86m、幅1.22mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ17cmを測る。

SK113

石組炉101のすぐ北側にあり、一部を101に切られている。全形は出入りが激しく、床面もフラットではないことから、自然の凹凸と考えられる。

SK114

調査区南端近くで検出した。やや歪んだ楕円形を呈する。長さ60cm、幅55cm、遺構面からの深さ19cmを測る。遺物が出土したが、人工的な穴かどうか判断がつかなかった。

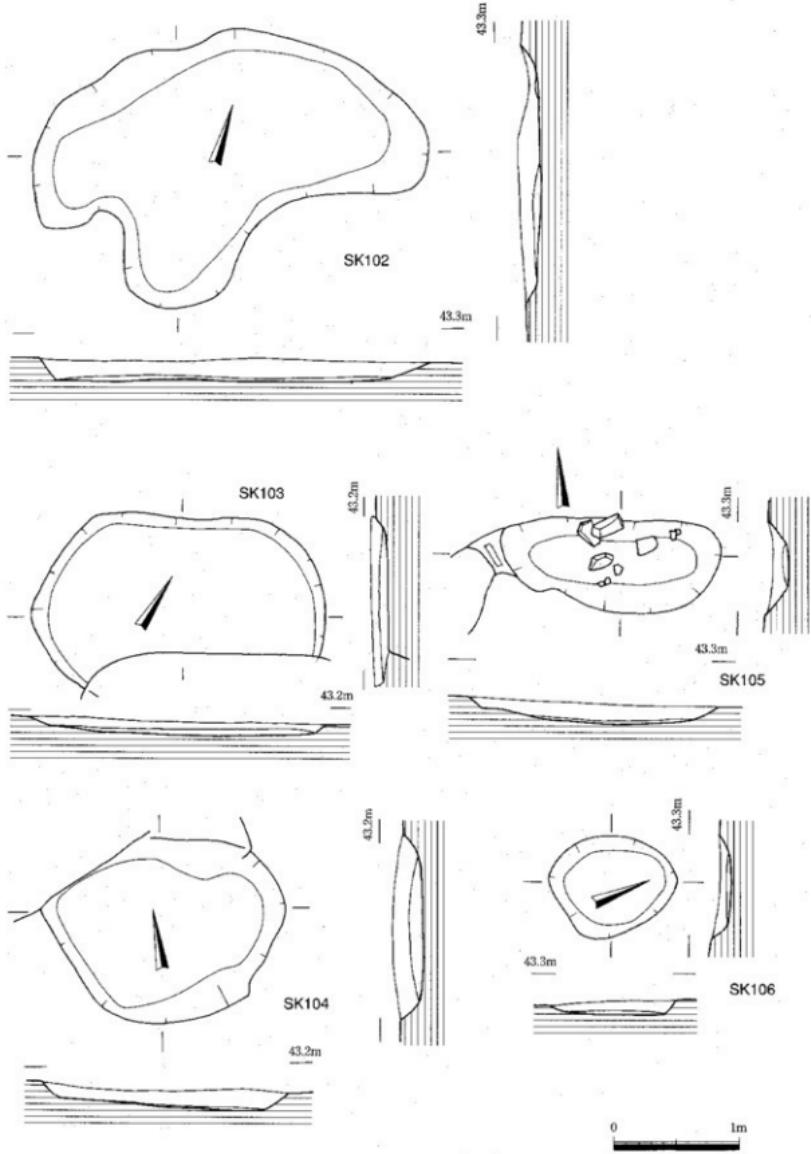


Fig.50 下層の土坑1

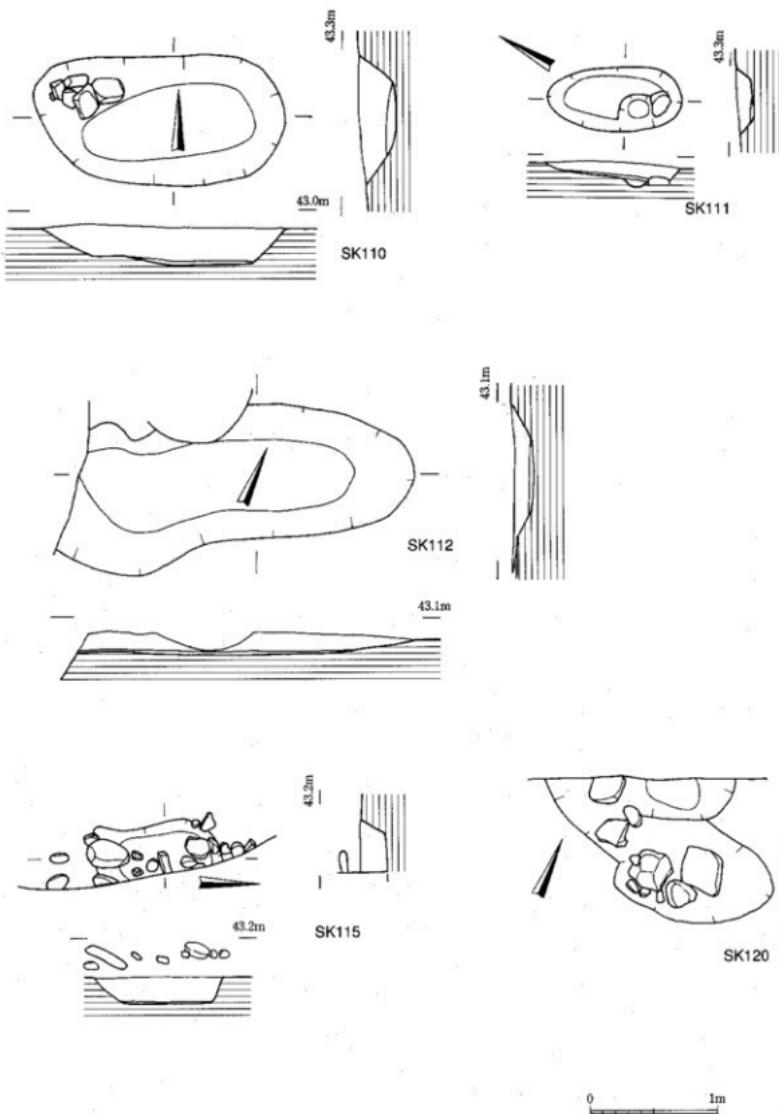


Fig.51 下層の土坑 2

SK115 (Fig.51)

F△2区の調査区東壁沿いで検出し、さらに調査区外へと続いている。土坑を検出した面の上の包含層中には20個ほどの礫があるが、土坑に伴うかどうか不明である。現状の平面形は長楕円形を呈し、長さ約1m、確認部分の幅40cmを測る。断面形は逆台形を呈すると思われ、深さ21cmを測り、床面は平坦である。

SK116

土層断面で確認した結果、自然の浅い凹みであった。

SK117

調査区南西隅で検出した。遺物が少量出土したが、壁・床ともに凹凸が激しく、自然に形成された穴と判断できる。

SK118

調査区南東隅で検出した。自然の小段落ちの中にある。段落ち内には、礫が多い。この土坑も自然に形成された穴と考えられるが、比較的大きい撚糸文土器片が出土した。

SK120 (Fig.51)

最初に検出した遺構である。マンホール南側で検出した。上部に焼けた礫が数点ある。調査者の不手際により、遺構図を完成させておらず、断面形がないままである。石組垣を破壊したものとも考えられる。

4 出土遺物

遺物は包含層中及び遺構内から総数4000点前後が出土した。前述のとおり、まだ整理がすんでいないため、詳細な内容は把握できていない。土器はたいへん脆く、水洗い時に分解したものもあり、水洗い後にバイオドライヤー処理を行わなければならない。現時点では、出土した土器の2割しかこの処置が終わっておらず、以下に報告する遺物はその中の代表的なものである。

① 土器

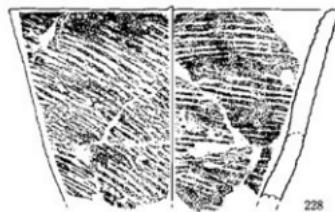
発掘中の所見や、すでに水洗いがすんでいるものを見ると、土器のほとんどは撚糸文土器である。確認した中では、数点の繩文土器や条痕文土器の小片がある。撚糸文土器のほとんどが大粒の粒子を含み、胎土も粗く、焼成も悪い。器壁は1cmを越えるものがほとんどでかなり厚い。

撚糸文土器

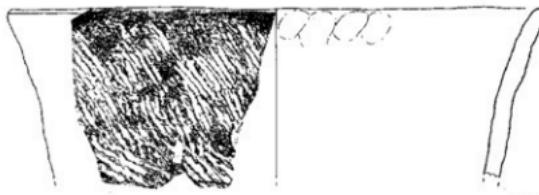
器形・文様によっていくつかのタイプがあるが、まだ未整理のためここではタイプ分類を行わず、個別の土器ごとの説明を行う。

228は口径19.4cmを測る小形の土器である。口縁部から底部までほぼ一直線に外傾するが、粘土の接合部でやや屈曲する。口縁端部は細くなり、内面がやや外反する。器壁は1.2cmと厚い。外面には斜め方向に二重ないしは三重に撚糸を転がしている。内面には、口縁部は横方向に撚糸文を施し、その下約1.5cmの無文帯を挟んで、横方向に近い斜め方向の撚糸文を施している。さらにその下は若干方向を変えている。1段目は7本、2段目は8本の条線がある。燃りはかなり不鮮明であるが、R一段の燃りと思われる。施文はかなり深い。内面の破片最下部と、外面口縁部に煤の付着が認められる。橙色を呈し、胎土には大粒の石英等を多く含んでいる。

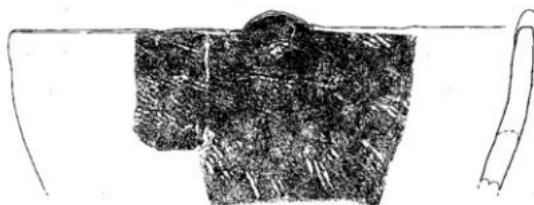
229はやや外反する口縁部をもち、口径31.8cmを測る。器壁は1.1cmを測る。外面に縱方向に近い斜



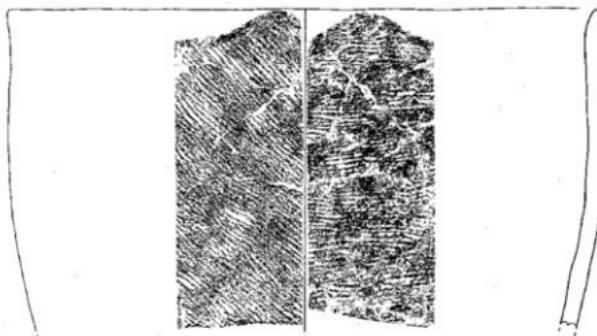
228



229



230



231



Fig.52 出土繩文土器 1

め方向の撚糸文を施す。施文方向は、途中で若干傾きを変えている。撚りはR一段と思われる。内面は指ナデ調整で仕上げている。口縁部外面に煤が付着している。両面とも黒褐色を呈し、石英、白色粒を多く含んでいる。

230はやや内寄ぎみの口縁部を持ち、幅約4cm、高さ約1cmの山形を持つ。口径31.2cmを測る。器壁は1.2cmを測る。外面口縁部付近に横走する撚糸文を施した後、斜め方向の撚糸文を施している。口縁部の下では縱方向に近い斜め方向に施している。外面には煤が多く付着し、さらにその上に砂が付いたままバインダー処理しているため、文様の細部はほとんどわからない。内面は指ナデである。内面は浅黄色を呈し、外面は灰オリーブ色を呈している。

231は大破片であるが、やや歪みがあるため、径に若干不安なところがある。口縁端部のみわずかに外反し、口径35.4cmを測る。全体的にはかなり直立する。外面には斜走する撚糸文を、内面には横走する撚糸文を施している。撚りはR一段である。施文は他に比べると浅い。器壁は9mmと他よりはやや薄い。外面のほぼ全周と内面の一部に煤が付着している。胎土には石英や白色粒を多く含んでいる。

232～236は口縁部の小片である。232は外面に斜方向の撚糸文を施し、内面はナデ調整を施している。胎土には2～5mmの石英・白色粒や金雲母を大変多く含んでいる。外面の一部が剥げ落ちているが、その部分にも撚糸文の痕跡が見受けられる。233は他の撚糸文と原体がかなり異なっている。他の原体の撚糸間は3～4mmあるのに対し、これは2mmもない。また施文の深さもかなり浅い。胎土も、微細な金雲母粒や1mm以下の白色粒を含んでいるだけで、かなり良い。器面の保持も良く、バインダー処理をする必要がない。外面口縁直下に刺突状の穴がある。草創期末の土器ではないかと考えられる。234は両面に撚糸文を施す口縁部片で、器壁1.3cmを測る。外面には口縁端部まで右下がりの斜方向の撚糸文を施し、内面は口縁端部の無文帶の下に横方向の、さらにその下に斜方向の撚糸文を施している。撚糸間の幅は2～3mmである。235は外面に右下がりの撚糸文を施す。撚糸間の幅は3～5mmを測り、他の撚糸より幅が広い。口縁端部に煤が付着している。内面はナデ調整である。大粒の白色粒・石英を多く含み、大変粗い胎土である。236は外面に右下がりの撚糸を施している。撚糸は他に比べて浅い。器壁1cmを測る。他に比べて、胎土・焼成ともに良い。

237・238・242は胴部片である。237は外面に斜方向の撚糸文を施した後ナデしている。そのため撚糸文は大変不鮮明である。内面にナデ調整を施しているが、粘土帶の接合痕がわかる。胎土には大粒の石英・白色粒を多く含んでいる。238は斜方向の撚糸文を外面に施している。内面はナデ調整である。外面は煮炊きのため黒変しているが、内面は淡黄褐色を呈している。242は外面に太い撚糸文を右下がりの斜方向に施している。内面はナデ調整である。

239～241は尖底の底部片である。239は底部から胴部への立ち上がりがかなり開く。外面に斜走する撚糸文を施している。底部先端から2.5cm程は、現状では文様は施されていない。撚りの間隔は3～4mmを測り、施文は深い。両面とも浅黄色を呈し、胎土は大粒の石英等を含み、粗い。240は239とは逆に立ち上がりが狭い。底部先端近くまで施文している。撚りの間隔は狭く、2mm前後しかない。両面とも橙色を呈している。241は底部先端から3cm程遺存しているが、文様は認められない。外面はていねいなナデ調整で、内面は剥落している。

243は推定口径は47cm前後の大型の土器である。尖底の底部から胴部へはかなり直線的に開いて立ち上がり、胴上部でやや内寄する。途中、粘土の接合部が明瞭に分かる。外面には斜め方向の撚糸文を施している。文様の深さ約3mmと深く、糸の撚りは太い。ただし撚った糸の纖維の痕跡は極めてわずかしか残存していない。そのため、撚糸はR一段と思われるが、明瞭ではない。内面は全面ナデ

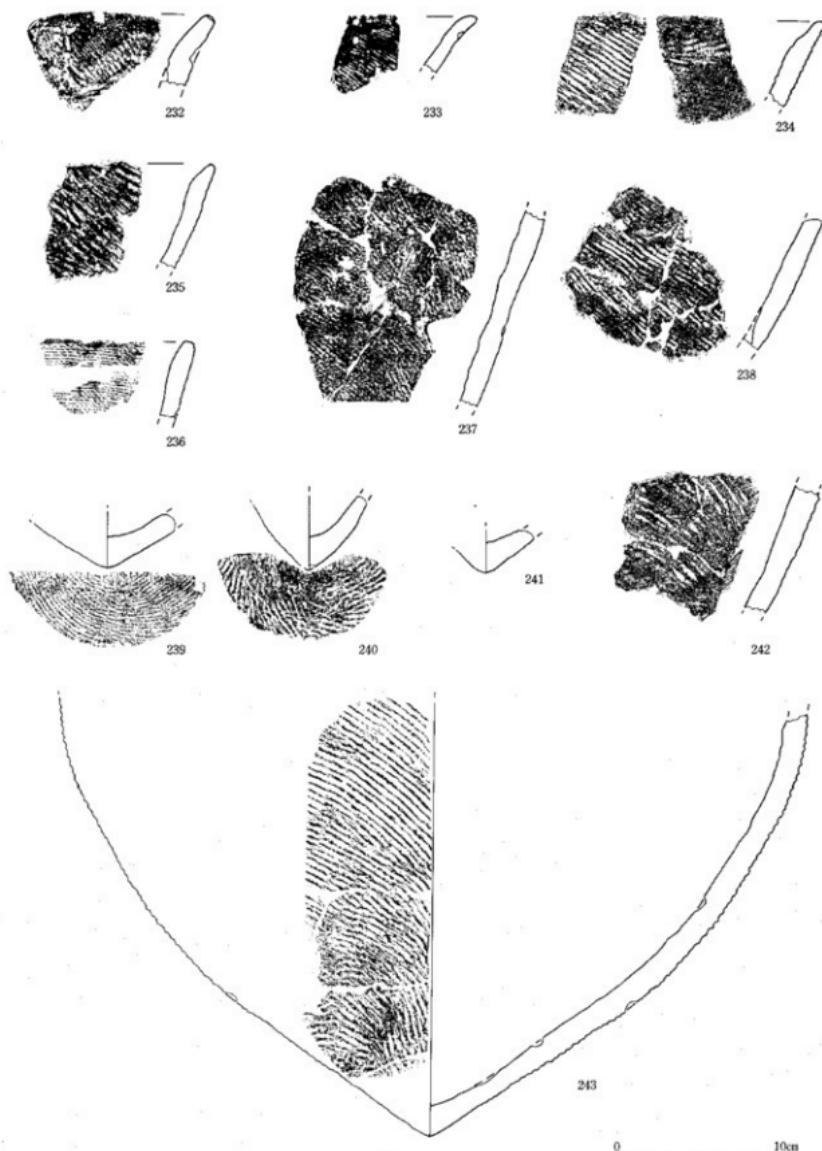


Fig.53 出土縄文土器 2

で仕上げている。器壁は1.4cmと厚い。胎土は3~5mmの砂粒を多く含みかなり粗く、焼成も甘い。

② 石器

出土した石器は、確認できた範囲では、石鎌・石槍・スクレーパー・磨石・石皿などである。斧・石匙は出土していない。定型化した石器の中では、圧倒的に石鎌の率が高く、200点を越えそうである。その他は各10点に満たないようである。

石鎌

ほとんどが長さ2cm未満の小形のもので、重量も0.5g以下のものがほとんどである。局部磨製した石鎌が多く、実測した中では5割を越える。全般的に全長の短さの割には脚が長いものが多い。石材のほとんどは漆黒曜石だが、安山岩製のものもある。

形態的にはほとんどが圓基式で、平基式に近いものが少量ある。244~249は平面形がゆるくカーブする。244は全長が短く、先端部が厚みを帯びる特異な形態を呈す。245~246は剥離面を残している。長さ1.6cm以下である。250~264は概ね両側縁が直線状を成し、脚部分で折れ曲がり脚先端部の形状が三角形を成しているものである。ただし259は側縁がやや曲線的で、そのまま脚部に移行している。255~256・258以外は局部磨製を施している。263・264のように大きなものは磨製の部分も多い。265~267は脚部の長いタイプで、265・267は剥離部の下に小さな抉りが入る。266もそれを意識している風である。268~269は正三角形に近い形状で小さな抉りが入っている。269は素材の剥離をそのまま生かしたいわゆる剥片鎌に分類できる。270~271は幅広の二等辺三角形を呈し、抉りがほとんど入らないタイプである。270は正三角形に近い。270はわずかに磨製を施している。272は尖頭器状の石鎌

Fig.	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	出土区	備考
244	石鎌	12.2	11.7	2.8	0.3	黒曜石	A-△10-J5	
245	石鎌	15	11.5	2.1	0.3	黒曜石	B-△6-J13	
246	石鎌	15.3	10.5	2.1	0.3	安山岩	B-△10-J5	
247	石鎌	14.9	2.6	11.3	0.3	黒曜石	A-1-J6	
248	石鎌	16.5	11.4	2.9	0.4	黒曜石	B-1-J2	
249	石鎌	12.7	10.8	2.6	0.2	黒曜石	A-1-J5	
250	石鎌	13.5	10.3	2.3	0.2	黒曜石	B-△3-J20	局部磨製・先端欠損
251	石鎌	14.6	10.5	2.2	0.3	黒曜石	A-△6-J56	局部磨製
252	石鎌	15.1	10.9	2.8	0.3	黒曜石	A-△7-J38	局部磨製・脚欠損
253	石鎌	16.1	11.4	2.2	0.3	黒曜石	B-○5-J15	局部磨製
254	石鎌	17.2	11.3	2.4	0.3	黒曜石	B-△6-J2	先端・脚欠損
255	石鎌	15.4	11.4	2.7	0.3	黒曜石	A-△7-J26	
256	石鎌	16.3	8.8	2	0.2	黒曜石	C-△8-J5	
257	石鎌	17.2	10.2	2.4	0.3	黒曜石	J26	局部磨製
258	石鎌	18.2	11.6	2.9	0.4	黒曜石	B-△9-J15	
259	石鎌	19.7	11.5	2.8	0.5	黒曜石	E-8-J15	局部磨製
260	石鎌	19.1	11.5	12.5	0.4	黒曜石	D-△11-J9	局部磨製
261	石鎌	20.6	10.8	2.1	0.4	安山岩	A-0-J1	局部磨製
262	石鎌	18	11.5	2.3	0.4	安山岩	B-△9-J28	局部磨製
263	石鎌	20.2	11.2	2.3	0.4	黒曜石	C-△10-J1	局部磨製
264	石鎌	20.8	11.7	2	0.4	黒曜石	B-△3-J1	局部磨製
265	石鎌	17.4	10.7	2.1	0.3	黒曜石	A-10-J1	局部磨製
266	石鎌	21.7	11.7	3.2	0.5	黒曜石	SK14-J1	脚欠損
267	石鎌	18.7	11.6	3	0.4	黒曜石	A-△3-J13	局部磨製・脚欠損
268	石鎌	19.6	14.2	3.2	0.9	安山岩	A-△6-J8	局部磨製・先端欠損
269	石鎌	18	16.8	2.2	0.6	安山岩	B-△4-J	
270	石鎌	21.3	18.7	5.1	1.7	安山岩	A-△4-J38	局部磨製
271	石鎌	24.7	14.7	2.6	1	黒曜石	F-7-J9	先端・側刃欠損
272	剥突具(石鎌)	20.7	6	2.2	0.3	黒曜石	B-△10-J7	局部磨製
273	尖頭狀石器	45.1	19.8	3.9	3.9	安山岩	B-7-J1	局部磨製
274	柳葉形尖頭器	82.9	14.5	8.1	11.4	安山岩	B-3-J37	局部磨製・両端欠損
275	尖頭狀石器	40.2	14.7	5.2	4.1	安山岩	A-△2-J37	
276	削器	54.4	23.8	6.9	9.4	安山岩	D-△5-J1	
277	尖頭狀石器	52.3	27.1	17	16	黒曜石		

表2 下層出土石器属性表

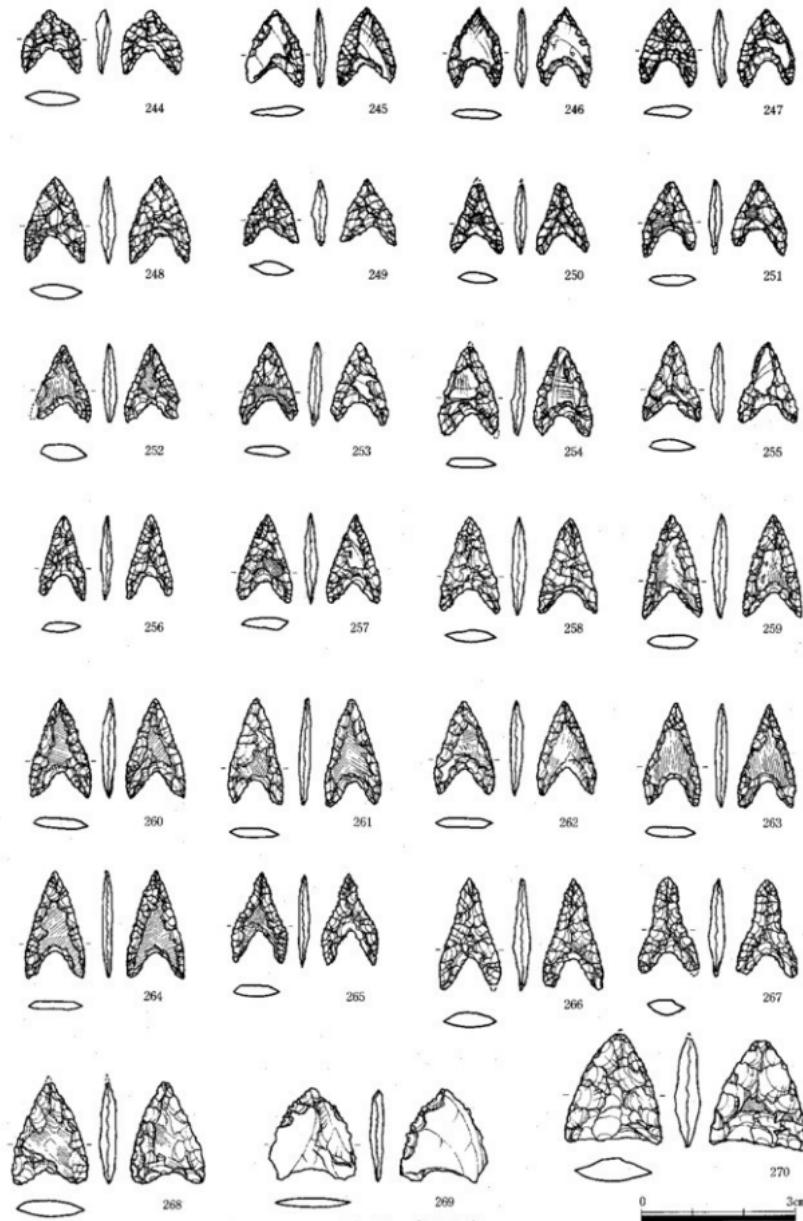


Fig.54 出土石鏃

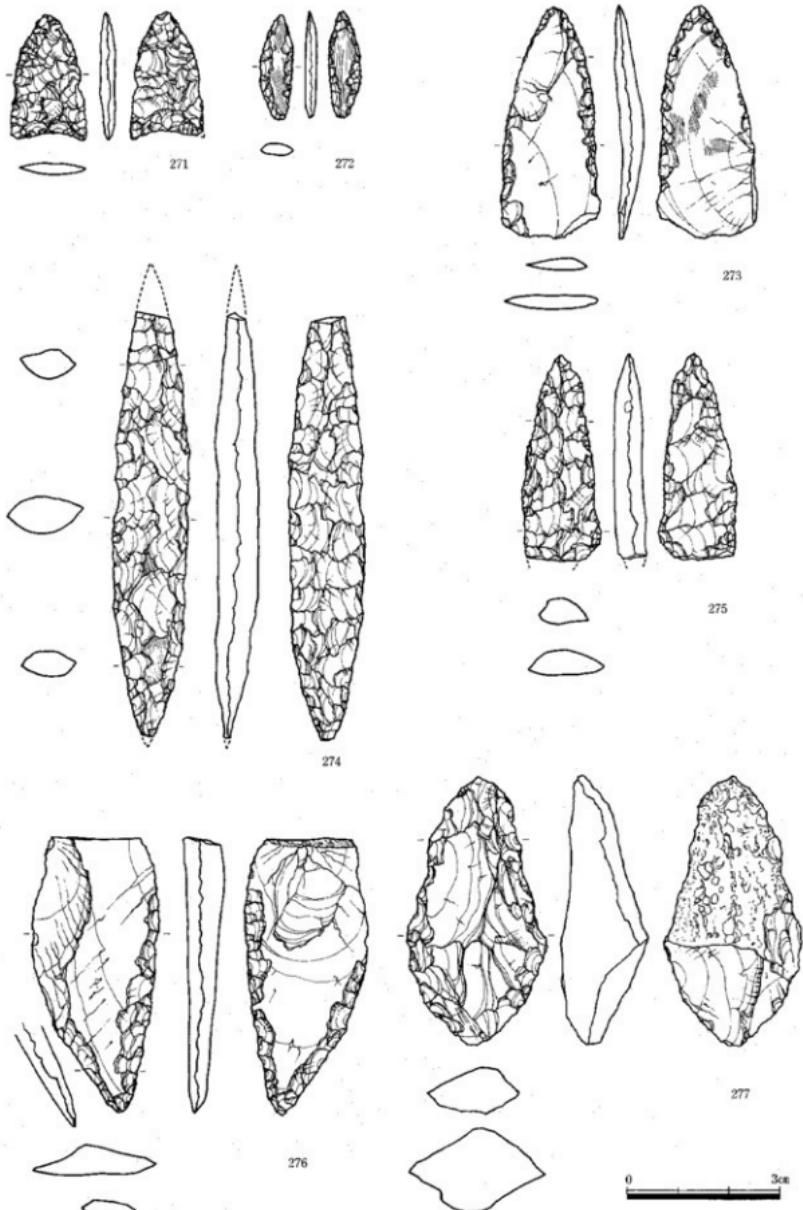


Fig.55 出土石器

で、両面に局部磨製を施している。石材は黒曜石であるが、赤い縞がある。

尖頭状石器

いわゆるポイントである。すべてタイプが異なっている。273は横長剥片を利用した安山岩製のポイントである。主要剥離面側は先端部を中心に、裏面は基部近くも含めて、側縁のみに二次加工を加えている。側面形は弓のように曲がっている。274は柳葉形のポイントで、中央部分と基部のごく一部を磨いている。重量は10gを越す大型品である。両面とも両側縁から丁寧な調整を施している。275は柳葉形に近い形状のようだが、基部がすぼまり、全長が短い。274・275ともに安山岩製である。277は黒曜石製のポイントである。片側には大きく自然面を残し、調整を施している面は、左側縁から大きな剥離を加えている。失敗品か。

削器

276は安山岩製の削器である。縦長剥片の側縁のみに、主要剥離面と裏面の両側縁先端部を中心に二次加工を加えている。

(5) 小結

第3次調査で検出した遺構等の時期は、下層が縄文時代早期、上層が弥生時代前期から平安時代末まで含まれている。縄文時代早期の遺構・遺物及び弥生時代中期・古墳時代前期の住居群については次章で詳述しているので、ここではその他の遺構等について簡単に述べる。

下層出土以外の縄文時代遺物は、押形文土器と磨消繩文土器が各1点、晩期の土器が2点出土している。押形文土器は小粒な稜円文で比較的古式なもの、中期土器は地文として磨消繩文を持ち、曲線の凸帶を持つことから船元系土器と考えられる。晩期の土器も含めて、これらの各時期の遺構は近隣でも未発見である。

弥生時代前期の遺構は土坑一基であるが、調査区北端で前期末から中期初頭の包含層があった。整地層的な土層ではなく、斜面上に堆積した層と考えられるが、かなり大型の破片を多く含んでおり、層の形成原因はわからない。包含層は古代のものも調査区ほぼ全域に認められた。これも完形に近い土器が随所に見られたが、遺構などに伴うものではない。今回の調査では遺構には恵まれなかつたが、周辺地域には弥生時代前期末頃の遺構群が存在していると考えられる。また弥生時代後期の方形住居跡が1軒、終末期の住居跡が2軒検出された。早良平野では、後期の住居跡の検出はまれであり、今後、早良平野での資料の増加の可能性を示した。

古代の包含層から出土した遺物の内、特記すべきは212の土器で、須恵質というより瓦質に近い陶器である。当該期の国産遺物には該当するものは見あたらない。特にやや瓦質に近い軟質であることや、黒色顔料を塗布していることから朝鮮半島産の陶器と見て大過ないものと思われる。同種のものは鴻臚館跡で多く出土している。当調査区と室見川を挟んだ対岸では、東入部遺跡第7次調査が行われている。この調査では、古代末頃の遺構に伴って晚唐の三彩万年壺が出土しており、今回の新羅焼の出土と併せて、古代後半～末頃に早良平野南部に何らかの施設があったことが想像される。

第3次調査では多くの鉄滓が出土した。鍛治津4722.33g、製鍊津76.61gが遺跡から出土しており、そのうち時期を推測できた遺構から出土したのは弥生時代中期後半が554.2g、古墳時代前期が795.8g、井戸が830.7gである。ほとんどが鍛治津であり、鉄滓は楕形を呈するもの、球状を呈するもの、不定形を呈するものがある。特に1~2cmの球状を呈したものが多く、松木田遺跡における鉄滓の一特徴である。古墳時代前期の土坑であるSK019・SK033は検出状況から鉄器の廃棄土坑であると思われる。同時期のSC010からは鉄塊系遺物・楕形滓・鉄器が出土している。注目できるのは弥生時代中期後

半の住居 S C 015 から楕形溝、鉄塊系遺物、炉壁が出土していることである。鉄塊系遺物の出土から、鉄片処理をするだけではなく、鉄塊系遺物を処理できる技術をもっていたことが想定される。博多遺跡などの高度な技術はもっていなかったと考えられるが、弥生から引き継ぐ鍛冶工房が行われていたのであろう。ただし、S C 015 は古墳時代前期の住居である S C 036・S K 019 に切られており、この時期の混じり込みであることとも考えられる。いずれにしろ弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけて鉄器生産を行っていた可能性を示す資料として注目したい。

なお中世遺構は若干のピットを除いて検出されておらず、この周辺地域では通常中世遺物が出土するが、今回の調査ではほとんど遺構・遺物とともにほとんどなく、中世集落の立地と当調査区が異なっていたのかもしれない。

第3次調査では、沖積地の調査の難しさを実感させられた。特に遺構が錯綜しているときの切り合いで確認の困難さには今回大いにてこずらされ、結果的には本文中にあるように、住居跡の切り合いを間違うという失敗も犯してしまった。そのような中でも、かなり偶然の産物ではあるが、今回2つの発見をしたと考えている。

1つは下層文化層、つまり縄文時代早期の層の発見である。これまでの調査では疊層（今回の上層の遺構面）を検出した段階で、部分的には下を確認することはあっても、基本的には調査を終了していた。これからは、周辺の立地を見ながら、疊層の下を確認することが必要になったといえる。

もう1つは小さな発見であるが、古墳時代前期の住居のベッド状遺構の中に、地山削りだしのものと、一度地山を床面の高さまで削った後、ベッドを貼って造ったものが存在していることである。これは入部地区圃場整備に伴う調査でも確認したところであるが、今回再確認することができた。ところが困ったことに、この貼床の検出が容易ではない。従来、当該期の住居の中には奇妙なベッド状遺構が存在しているが、あるいはこの貼床で造ったベッドを検出しきってない可能性を考えられよう。いずれにしろ、今回の第3次調査では失敗と偶然の発見があった調査であった。

V まとめ

縄文時代早期の遺構と遺物、弥生時代中期の住居跡、古墳時代前期の住居跡に関して、2次・3次あわせて、簡単にまとめる。

(1) 縄文時代早期の遺構と遺物について

前述のとおり、今回は概要しか掲載することができなかったが、本報告の予定のない現在、できるだけまとめておきたい。

①立地について

今回の該期の遺構・遺物の発見は当初まったく予期しなかった。従来、早良平野における調査の場合、遺構面（概ね当遺跡の上層）より下にある疊層を検出した段階で、試掘ないしは発掘調査を終了しており、今回のように疊層上面より1.5m下に縄文時代の包含層があるとは全く予想の範囲外であった。包含層の範囲は、北側は3次調査区内で完結するが、南側は3次調査区外へと続いている。ただし同調査区南端近くでは、包含層自体が複雑な堆積状況を呈し、包含層と言うよりは自然層位の中に遺物が混入しているという状況を呈している。調査区南東隅では疊層と成っていること、遺構も同調査区南端ではほとんど見られないことから、第3次調査南側には、流れ込みの遺物は別として、生活痕跡自体はないものと推察できるし、遺物の出土量も少なくなっている。

早期の遺構が検出された範囲は、Fig.16にある西側の丘陵から舌状に伸びる砂躰台地の範囲と概ね一致する。この範囲内は、早期の遺構が形成された時、黄白色の砂が表面にあり、周囲より一段高かったと考えられ、川に近い微高地という景観を呈している。このような地形は、Fig.16を見る限り、早良平野内の他の地点でも見ることができ、そのような地点のみならず、疊層の下における縄文時代以前の文化層の有無を、今後の調査時において注意する必要がある。

②出土遺物について

すべての出土遺物の整理が終了していないため、現時点でわかっている範囲内でまとめたい。

土器

出土した土器のほとんどが撚糸文土器で、ほぼ撚糸文単純層と言って過言ではない。土器の特徴を列記すると、器壁が1cmを越え、胎土はかなり粗く、焼成も良くない。全体的に造りの悪い土器といえる。口縁部の形態は直立気味のものや外傾するものがあるが、かなり直立している231の土器はかなり歪んだ土器で、図の傾きはやや不確かである。全体的には20°ほどの傾きのものが多い。端部は外反するものや内弯ぎみのものもある。1点ではあるが、山形をもつ土器があるのは特徴的である。胴部はほぼ直線的に底部へ移行するが、途中でわずかに屈曲するものが多い。底部は尖底で、乳房状に近いもの、立ち上がりが狭いものや広いものなど数タイプがある。

文様は基本的にはR一段の燃りと考えられ、燃りの間隔は3~4mm程度のものが多い。施文はかなり深く、原体の燃りの太さはかなり太いものと考えられる。外面にはほとんどが右下がりの斜め方向に施文している。内面に施文しているものも少量ある。内面施文のものは概ね口縁部下が横方向、胴部以下が横に近い斜方向が多い。

撚糸文土器は、草創期からすでに見ることができる。福岡市内でも南区柏原遺跡群、西区大原D遺

跡で出土している。特に柏原F遺跡Ⅲ層出土の撫糸文土器は、底部が丸底である点を除くと、器形及び文様の施文方法も比較的当遺跡例に近い。この土器は丸底の条痕文土器や刺突文土器と同一層から出土しているが、同じ層の中でも最下層から出土している。草創期の末に近い時期に編年されることが多い。

早期に入ると、撫糸文土器の良好な例がない。特に当遺跡のように主体的に出土する遺跡は皆無で、他の土器にまじって破片が出土する程度である。前述した土器の諸特徴を考慮すれば、早期前半に位置することは疑うことがない。草創期末から早期初頭の良好な土器群が出土した大分県二日市洞穴の出土土器と器形を比較すると、第5文化層出土土器にもっとも近い。現時点では早期初頭に位置づけられる可能性が高いが、今後他遺跡例との比較によって詳細な時期を見極めたい。

なお、撫糸文のうち、233番の土器は他の撫糸文と全く異なっており、本文中に述べたように草創期に位置づけられる可能性が高いと考えられる。

石器

当遺跡から出土した石器の大半を占めるのは石鏃である。出土石鏃は100点を超える。その石鏃の特徴を列記すると、現在整理が済んだものを見ると長さ12.2mm～21.7mmで、ほとんどが2cm以下である。平面形は二等辺三角形に近く脚がやや長い、局部磨製石鏃（実測した遺物中5割を越す。）が多い、欠損率が低い（29点中7点）、ということが上げられる。もちろん、未整理分の方が多いため、この割合が遺跡全体を通していえるのかどうかまだわからないが、発掘調査中の時点でも同様の傾向が見て取れた。以下、柏原F遺跡での分析を参考に順に検討する。

小形品は柏原F遺跡において各層から満遍なく出土しており、小形品のみからでは時期的傾向は読みとりにくいが、上層に行くほど大型品の出土傾向が高くなっている、大型品がほとんどない（発掘時の所見も同様）当遺跡の場合、少なくとも鏡形鏃が出現する前段階である可能性が高い。小形品の形態を見ても、柏原II層の場合、抉りの短い平基に近い形態のものが多いが、柏原III層では半数以上が当遺跡例に近い抉りがやや深いタイプである。従って形態的に見る限り、当遺跡の石鏃は縄文時代草創期末に位置づけられる柏原F遺跡III層に近いことが分かる。

石鏃の欠損率は、実測点数が少ない現時点では明確な数字ではないが、柏原F遺跡の6割近い欠損率に比べると当遺跡（24%）はかなり低い数字である。本来石鏃は屋外で使う道具であり、欠損していない石鏃が遺跡内に残っていること自体奇異な感じを受ける。今後の資料整理の課題にしたい。

局部磨製石鏃は以前は早期を代表する石鏃であったが、近年大原D遺跡など草創期後半期には確實に存在している。特に草創期末から早期前半にはその割合がかなり多く、早期後半には姿を消していく。当遺跡では通常の石鏃のみならず、尖頭状の石鏃・ポイントも局部的に磨いている。柏原F遺跡では、III層における局部磨製石鏃の頻度の高さに比べ、II層ではわずか2点に激減し、この場合も柏原III層に対応しているということができよう。

なお270は平面形が正三角形に近い二等辺三角形を呈し抉りのほとんどないタイプで、草創期に属する可能性がある。

③石組炉及び生活痕跡について

今回検出した遺構のうち、用途が分かることは2基の石組炉だけである。2基ともにすでに破壊されていたが、幸い中央部分は本来の位置を保っていると考えられる。それを見ると、石を配するための浅い穴を掘った後、中央に平らな礫を敷く。その周囲に礫を花弁状に配するタイプと考えられる。多くの早期石組炉が見つかった柏原F遺跡II層の石組炉は、基本的には底石のある花弁状に礫を配する

タイプと見て大過ないものと考えられる。Ⅲ層では石組炉は見つかっていない。

近隣の例として、福岡県那珂川町深原遺跡では押形文土器に伴って底石を持つタイプがある。福岡県筑紫野市原遺跡では押形文土器期と考えられる時期の底石のないタイプが発見されている。いずれも住居址は検出されていない。草創期後半の住居址群が発見された福岡市大原D遺跡では小形の底石のないタイプが見つかっている。

当遺跡の場合、発掘範囲が幅10mと限られた中であったため、住居の有無については明確ではないが、たとえばSK102はややいびつなプランであるが、遺構内からは石鎌を始め遺物が多く出土し、床面も平坦であることから、砂地に掘った住居の残骸と見られなくもない。ただし柱穴はない。今回、遺物のドットの分析を行うことができなかったが、検出した遺構とあわせて検討していきたい。

おわりに

以上述べて来たように、当遺跡の下層文化は土器・石器等の従来の編年観では縄文時代草創期末～早期初頭頃に位置づけられるべき生活遺跡である。土器が尖底であることから早期初頭に位置づけるのが妥当と考える。類例の乏しい土器が単純層として出土した貴重な遺跡として、今後4000点の遺物と格闘していきたい。

(米倉)

(2) 弥生時代中期の住居跡について

①松木田遺跡における中期の状況

松木田遺跡では弥生時代中期と確定できた住居跡は第2次調査・第3次調査あわせて5軒検出されている。円形住居跡は第3次調査のSC015・SC030・SC031の3軒、方形住居跡は第2次調査のSC002・第3次調査のSC005である。床面積を測ると円形住居跡のSC015は78.5m²（径10.6m）、SC030は43m²（径7.4m）、SC031は53m²（径8.2m）、方形住居のSC002は15.5m²（4.7×3.3m）、SC005は12.8+αm²（5.3×2.4+αm）で、円形住居跡が方形住居跡よりはるかに大きい。円形住居跡は周辺の中初期初頭の青銅器を有した墓地を持つ東入部遺跡、吉武遺跡と比較しても3軒とも大型である。その中でも特にSC015は群を抜いている。

②大型円形住居跡（SC015）

SC015の住居跡は柱が2重に切りあって巡ることから建て替えを行っている。土層はSC015の最後の形態が（Fig.22）の状態であったことを示している。建て替え前の住居を推察してみると2つの状況が考えられる。①床面積は立て替え後の状態と変わらず柱・上部構造のみを作り替えた。②ベッド部分を拡張した。これは東側の壁溝がベッド状遺構より内に入っている状況を呈することからである。ここでは床面積は50m²から78.5m²となる。立て替え前の床面積はSC030の43m²、SC031の53m²とほぼ同じである。

SC015のベッド状遺構と床面は特異な形態を呈している。まずベッド状遺構であるが、同じ幅で全周するのではなく東側で最大110cm、そして徐々に細くなり、西側で12cmとなる。ベッド状遺構が寝所と考えるならば東側で寝ることは可能であるが西側では不可能である。物置と考えても西側では難しい。12cmという幅のベッド状遺構は何の意味を持つのか判断できない。

床面は中央土坑付近が一番高く、壁側に向かって徐々に下がり壁溝へと続いている。この形態の床

面は東入部遺跡第5次調査のSC-03に見られる。但しその傾斜は松木田遺跡のSC015ほど急ではない。しかも、SC015の中央部分は貼床をせず、地山の状態である。その周囲は貼床を構築している。おそらく排水、防湿効果を目的としたものと思われる。SC015は規模が大きいというだけではなく、住居の構造においても松木田遺跡の他の2つの住居跡とは違っている。松木田遺跡のなかで、SC015の特異性がうかがえる。

③円形大型住居跡の類例

(1) 入部地区（岩本遺跡・東入部遺跡）

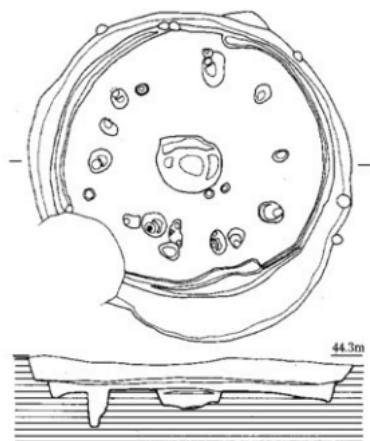
近接する岩本遺跡と東入部遺跡では違った様相を呈している。入部地区では前期から多くの竪穴住居跡が造られ、前期末から中期初頭にかけて長方形の竪穴住居跡が出現する。中期中葉には掘立柱建物へと変遷していく。岩本遺跡では円形竪穴住居跡の規模は径5~6mのものばかりであり、大型円形竪穴住居跡は検出されていない。また構造において壁溝・ベッド状遺構とともに確認されていない。そして中期中葉で竪穴住居跡はみられなくなる。東入部遺跡では北側に位置する第2次調査（未報告）で前期～中期の住居跡が約40軒確認されている。第2次調査の北側の第11次調査（未報告）では中期の円形竪穴住居跡が径約6.5mの規模で10軒、小規模の方形竪穴住居跡が25軒以上確認されている。本報告がされている南側の第7次調査では前期末～中期前半の集落が確認されていて、中期初頭に9.1~9.3mを測る円形竪穴住居跡（3162竪穴住居）が出現している。大半を中期前半の住居跡に切られ西北側は削平を受けている。貼床をしており、壁溝が断続して巡っている。壁溝は他の7軒（径4.1~8.9m）の住居では検出されなかった。主柱穴は4本想定されているが疑問符つきである。東側の第4次・第5次・第8次調査で中期末から後期初頭の竪穴住居跡が9軒確認されている。第8次調査で復元径9mの円形住居が検出されているが大半は調査区外に延びていて詳細は不明である。本報告がされていて、ベッド状遺構を確認したのは東入部遺跡ではこの住居だけである。

(2) 吉武遺跡

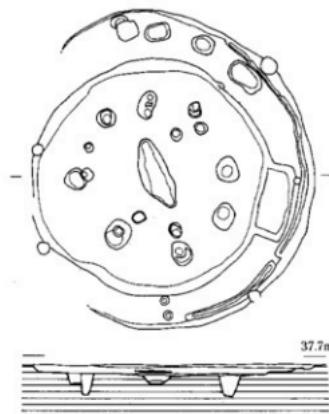
弥生時代中期の住居跡は多く確認されている。円形住居に比べて方形住居の割合が他の遺跡と比較すると少ない。円形住居のはほとんどは直径4.4m~7.0mの範囲である。8.0mを越えているのはいずれも中期中葉であり、中期後葉になると最大は7.8mと小さくなる。報告書を見る限りではベッド状遺構が確認された住居は1軒も無い。また床面の状況も松木田遺跡のSC015と同じものはみられない。吉武遺跡で最大の規模を持つのは第1次調査2区のSC-19である。半分以上を他の住居に切られているが規模は8.2~9.0mと推定されている。8本柱で西側に壁溝を持つ。床面はほぼ水平である。

(3) 比恵遺跡第50次調査（福岡平野）

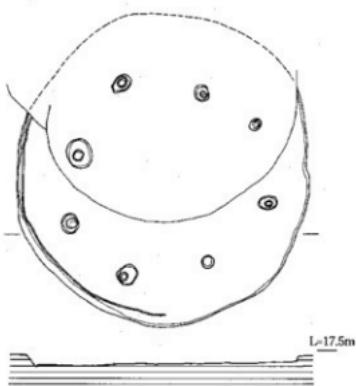
弥生時代中期から後期初頭にかけての竪穴住居跡が円形・方形あわせて17軒検出されている。複雑・切り合いが激しく遺構の残存は良好ではない。全貌を伺えないものが多く正確な数字では現れないが直徑が3.5m級の住居跡から大型で直徑12.5mを測る住居跡が併存している。大型円形住居と言えるものは3軒確認されている。それぞれに切り合いがありSC114は弥生中期中葉で直徑10.5mを測る。それを切って北側にSC119が弥生中期中葉～後半に現れる。直徑は12.5mを測り、円形住居跡で12mを越えるものの発見例は今のところ比恵遺跡だけである。その後SC114を切って南側にSC109があり直徑8.8mを測る。弥生中期後半である。3基とも中央土坑があり、主柱穴が2重に巡る。SC119は南側に、内側に入る壁溝が確認されていて立て替えが行われたと考えられている。多くのピットに切られていてよく分からないがベッド状遺構は無いようである。床面状況も松木田遺跡とは違い平坦である。規模・配置から集団の共同利用施設か、集団のトップの人の住居であろうと考えられている。



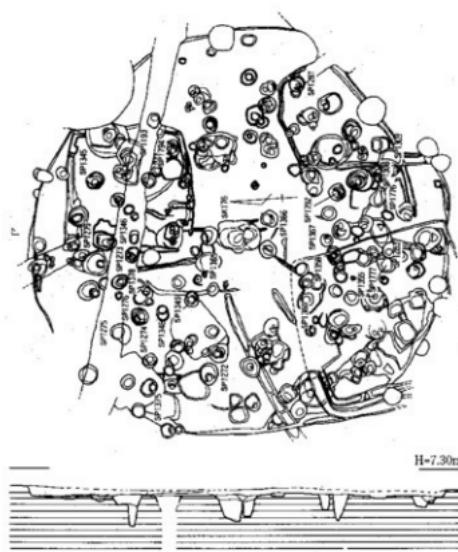
松木田遺跡 第2次調査 SC015



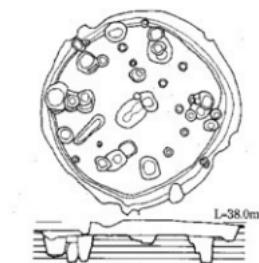
東入部遺跡 第7次調査 3162竪穴住居



吉武遺跡 第1次調査 SC-19



比恵遺跡 第50次調査 SC119



東入部遺跡 第5次調査 SC-03

Fig.56 早良平野の弥生時代大型住居 (S=1/150)

④おわりに

以上のように大型円形住居が集落で占める割合はごくわずかである。切り合いや住居間の距離を考えると大型円形住居は1つの集落で1軒あるか無いかという状況であったと思われる。

松木田遺跡で検出された円形竪穴住居跡SC015は径10.6m、SC030は径7.4m、SC031は径8.2mであり、他の遺跡で多く見られる径5~6m級のものが1軒も検出されなかった。方形の竪穴住居は他の遺跡と同規模のものである。

比恵遺跡と同様の規模の住居が早良平野の奥で検出されたことは非常に興味深いことである。早良平野の拠点的集落である吉武遺跡でも円形住居の最大規模は径8.2~9.0mであった。ただし吉武遺跡では中期初頭に大型掘立柱建物が出現していることを念頭に置いておく必要がある。SC015と同様の構造をもつベッド状遺構の類例は早良平野においては見られなかった。ベッド状遺構自身の検出例も極めて少なかった。また床面の構造も東入部遺跡でみられた1軒だけであった。以上のような特異性を松木田遺跡の中期の住居群はもっている。

早良平野の奥部については東入部地区を除くとまとまった調査例が少なく、特に室見川西岸域での弥生時代住居の発見は今回が初めてである。そういう意味で今回SC015が投げかけた上記の問題点について今後周辺諸遺跡の調査が進んだ段階であらためて考察を行いたい。

(星野)

(3) 古墳時代前期の住居跡について

調査区は沖積微高地上に立地し、遺構面は黄色砂礫・黄色シルトと変化しており、一定していない。調査報告でも前述しているように、遺構検出は極めて困難であった。遺構内の状況も同様に貼床・ベッド状遺構の盛土の有無は小トレンチを入れて、ようやく確認したものもあった。また、SC010のベッド状遺構は北壁・南壁は地山の削りだしの上に盛土をしているが、東壁への鉤手部分は床から直接土を盛って作っている。1つの住居内でも部分的に築造方法を変えており、掘りすぎてしまった可能性がある。ここではほぼ全貌を窺える、第2次調査・第3次調査をあわせた6軒の住居を扱うこととする。

①松木田遺跡における住居の変遷

松木田遺跡で古墳前期の住居は、方位・規模・構造から2つに分類できる。第2次調査のSC001・SC004・第3次調査のSC027(A群)と第3次調査のSC010・SC017・SC021(B群)である。A群の方位はN-4°-Wであり、3軒ともほぼ同じである。床面積は16.3~21.6m²と小型である。住居の形態は短辺の一方にベッド状遺構を持ち、出入口と考えられるビットはSC001・SC027に存在し、両方とも東側にある。主柱穴はSC004は不明であるが、SC001・SC027は2本柱である。

B群の方位はN-8°-Eであり、一部調査区外に延びているので全形は分からぬが、床面積は概ね24.5~32.8m²である。住居の形態は両辺にベッド状遺構を持ち、中央土坑を挟んで主柱穴は2本ある。出入口と考えられるビットはSC017は西側に、SC010は東側にある。ただし、SC010のビットは前述したように、5cmと浅く、掘り足りない可能性も考えられる。また、西側に中央ではないが南寄りに深さ20cmのビットがあり、これが出入口のビットとなる可能性もある。

出土土器は概ね古墳時代前期、柳田編年のⅡbの時期におさまる。6軒とも布留式甕をもつ。詳述

すると、SC010の025は肩部が張り、底部も尖底で古い様相を呈している。他の5軒の住居から出土している土器群はほぼ同じと考えられるがSC001・SC004・SC017は甕が長胴化しており、やや新しい傾向をもつ。SC021はまとまった土器が出土していないため詳細は分からぬ。整理するとSC010→SC027→SC001・SC004・SC017の流れが考えられる。

しかしSC004の土器の出土状況を見てみると、いずれも床面から浮いた状況で出土している。住居跡が少し埋まっている後に(Fig.57)では土器を投棄している状況が現れている。よってSC004の使われていた時期は出土土器の時期よりも古い。同様にSC017・SC027の土器群も15~20cm床面から浮いており、住居の使用時期は出土土器が示している時期よりも古いと言える。

以上より、松木田遺跡における集落をまとめると、6軒の住居跡は同時期か、前後しても時間幅はそう開かないと考えられる。A群はさらにSC001・SC004とSC027の距離間が85mあることから2つに分けることができる。B群の3つの住居跡は4m間隔に整然と並んでいる。同時併存か同じ集団が建て替えた可能性が高いと考えられる。次にA群とB群の住居構造の違いがどこから生じてくるのか周辺の遺跡を概観する。

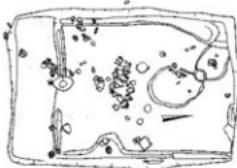
②岩本遺跡・有田遺跡との比較検討

早良平野で古墳前期の住居がまとまって確認されているのは宝見川の対岸の重留遺跡・岩本遺跡・清末遺跡・東入部遺跡、北側に位置する吉武遺跡・太田遺跡・有田遺跡である。ここでは本報告がなされ、ある程度まとめて集落を形成している岩本遺跡第2次調査・有田遺跡をとりあげる。

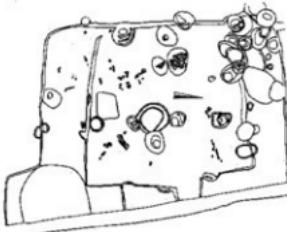
岩本遺跡では15軒の住居がある。集落はさらに北東部へ続くと考えられるが未調査である。第2次調査区内でまとめてみると北と南の2群に分かれ、南群は規模が小さく、出土土器は相対的に古い様相を呈すると報告されている。0501は弥生終末である。0506の住居はベッド状遺構は短辺の一方に作られている。北群のみを概観すると、ベッド状遺構が両短辺に作られている住居は床面積が21~27m²と小型である。ベッド状遺構が「L」字形のもの、壁際の3方を巡る住居は床面積が30~43m²と大型である。土器は両短辺にベッド状遺構を持つものの方が相対的に古い。主柱穴が判明しているものはすべて1軒を除いて2本柱である。0505のみ一辺が6.4mの正方形で、床面積も43m²と最も大きく4本柱である。ベッド状遺構も北隅・出入口と考えられるピット以外は全周している。特異な形態の住居である。岩本遺跡で大きく見てみると時期的に南群→北群の小型→北群の大型という変遷がみられる。

有田遺跡では多くの古墳前期の住居跡が確認され、時代を追った住居の平面プランの変遷が明らかにされている。井澤洋一・山崎龍雄が「弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて長方形で2本主柱、床面にベッド状遺構を持ち、壁中央に出入口部を持つ住居形態が基本となる。古墳時代前期の古段階は前代とあまり変化がなく、ベッド状遺構の形態はバラエティーに富むが、中段階になるとベッド状遺構が出入口の土坑を挟んで全周する形態が一般的となる」(井澤洋一『有田・小田部第8集』1987、山崎龍雄『有田・小田部第18集』1993)とまとめている。これに加えるとすると弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて床面積は概ね30~40m²だが、古墳時代前期の古段階になると20m²前後と小型になる。それが中段階になると再び大型化する。

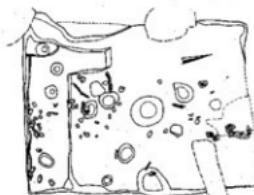
以上より時期による住居の規模の変化、ベッド状遺構の変化がみてとれる。岩本遺跡・有田遺跡から松木田遺跡のA群とB群の住居構造の違いは、わずかな時期差から生じてくるのではないかと考えられる。



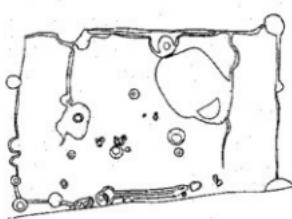
第3次調査 SC027



第3次調査 SC010



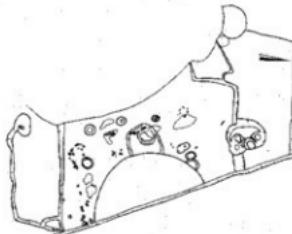
第2次調査 SC001



第3次調査 SC017

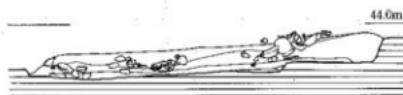
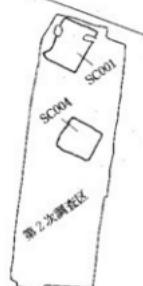


第2次調査 SC004



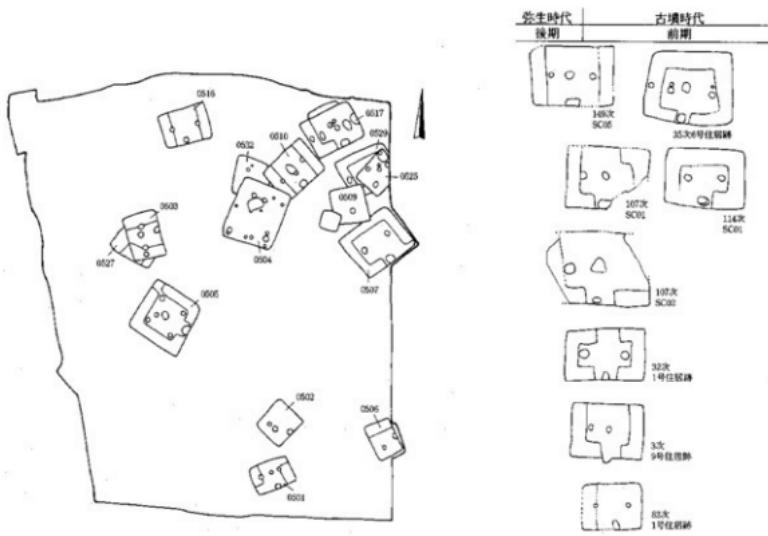
第3次調査 SC025

松木田遺跡第2次・3次調査 古墳時代前期住居跡 (S=1/120)



第2次調査 SC004 土器出土状況 (S=1/60)

Fig.57 松木田遺跡 古墳時代前期の竪穴住居跡



岩本遺跡 第2次調査
古墳時代住居跡配置略図 (S=1/600)

有田遺跡 古墳時代前期の
竪穴住居の変遷略図 (S=1/400)

Fig.58 岩本遺跡・有田遺跡の古墳時代前期の住居跡

③おわりに

以上の諸状況から当遺跡の住居群を考えれば、土器は S C 010→S C 027→S C 001・S C 004・S C 017という順序を示すが、S C 027・S C 004・S C 017の土器は住居が廃絶された埋没後の投棄と考えられ、この順序はあまり当てにならない。有田遺跡・岩本遺跡の住居の変遷からは、むしろ S C 001・S C 004・S C 027→S C 010→S C 017・S C 021という順序が考えられる。ここでは住居の構造・方位を重視し後者の順序が妥当性をもつと考えたい。つまり、S C 001・S C 004とS C 027の2箇所に小型で短辺の一方にベッド状遺構を持つ住居（A群）を建て、その後、大型で両辺にベッド状遺構を持つ住居（B群）を建てたと考えられる。さらにB群はA群に土器を投棄した可能性をもつ。入部地区では1集落が4~5軒であると考えられている（浜石哲也『入部V』1995）。当遺跡の砂礫台地はFig.16のとおり、あまり広い面積を有しないことを考えると、当遺跡も数軒から成る小集落であった可能性が高いと言えよう。

(星野)